

楠・荒田町遺跡

第42・43・46次発掘調査報告書

2011

神戸市教育委員会

楠・荒田町遺跡

第42次・43次・46次発掘調査報告書

2011

神戸市教育委員会

序

いにしえに、神戸が政治の中心として栄えた時代がありました。また、そのころには日宋貿易を中心として港町としても栄え、繁栄していた時代でもありました。神戸の歴史の1ページとして輝かしい時代をつづる福原京の時代、その時代を語る遺跡は、長らく幻・謎のままでした。

近年の発掘調査の成果にはめまぐるしいものがあり、次々と新発見が相次いでいます。福原京に関しても例外ではありません。兵庫区平野町では祇園遺跡から苑池がみつかり、平家関連の遺跡の発見として話題となりました。また、楠・荒田町遺跡では、二重壕が見つかり、これも福原京関連の遺跡ではとその全貌解明に大きな関心が寄せられています。

今回の調査はその二重壕の継続部分にあたり、壕の性格やその時期などこれまでに問題となっていたいくつかの点について、明らかにすることができました。これらの成果も神戸市域全体での地道な発掘調査の継続によってもたらされるものです。

本報告書の刊行がその継続的な意味において少しでも神戸の歴史の解明に寄与できれば幸いです。

最後になりましたが、現地での発掘調査事業の円滑な推進並びに報告書刊行に当たり、ご協力いただきました関係諸機関並びに関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成23年3月

神戸市教育委員会

例言

本書は、神戸市中央区楠町6・7丁目において平成19年度・20年度・22年度に発掘調査を実施した、楠・荒田町遺跡第42次、第43次、第46次の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

1. 調査は国立大学法人神戸大学医学部附属病院に隣接する建物建設に伴い、事前に神戸市教育委員会が調査主体となって実施したものである。
2. 各調査の調査期間と調査組織および担当者については本文に記した。
3. 出土遺物の整理作業は、報告書作成と平行して、平成22年度に実施した。
4. 本書写真図版のうち、現地での遺構写真は調査担当者によるもので、カラー写真は丸山潔、航空写真は㈱GEOソリューションズによる。遺物写真については、杉本和樹氏（西大寺フォト）がおこなった。
5. 本書の第43次調査の遺構の記述は、小林が、その他の記述ならびに編集は富山がおこなった。
6. 本書に使用した、国立大学法人神戸大学医学部附属病院内の遺構図については、兵庫県教育委員会作成のものに、一部加筆の上、使用している。
7. 本書に使用した標高は東京湾平均海水面(T.P.)を、方位座標については、過去の調査成果と結合させるため、平面直角座標系世界測地系第V系にもとづく測量成果による基準点を日本測地系「旧測地系(日本測地系第V系座標)」に変換させて使用している。
8. 本書に掲載した位置図は国土地理院発行の25,000分の1の地形図「神戸主部」「神戸南部」、神戸市発行の2,500分の1地形図「神戸駅」「諫訪山」、明治19年作成假想地形図「神戸」「兵庫」「須磨村」、柏青房編集発行「日本近代都市変遷地図集成」1987、を使用した。
9. 発掘調査で使用した遺物および図面・写真等の記録類は、神戸市教育委員会において保管している。
10. 調査成果の報告としては、「楠・荒田町遺跡第42次調査」「平成19年度神戸市埋蔵文化財年報」、「楠・荒田町遺跡第43次調査」「平成20年度神戸市埋蔵文化財年報」がある。その後の整理作業によって内容を変更した部分がある。本書によって訂正する。
11. 現地での発掘調査の実施については、事業主である国立大学法人神戸大学、国立大学法人神戸大学医学部附属病院のご協力を得た。
12. 現地での調査、本書の作成については下記の方々にご教示を頂いた。記して感謝いたします。
市澤 哲、岡田章一、佐藤亜聖、鈴柄俊夫、高橋昌明、中井淳史、中川 涉、藤田 淳、古市 晃、別府洋二、山田清朝、山田邦和
以上（順不同、敬称略）

目 次

例言

本文目次

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 遺跡の位置と環境	3

第2章 第42次調査

第1節 第42次調査区の位置と基本層序	11
第2節 第1遺構面の遺構と遺物	11
第3節 第2遺構面の遺構と遺物	11
第4節 小結	13

第3章 第43次調査

第1節 第43次調査区の位置と基本層序	13
第2節 第1遺構面の遺構と遺物	15
第3節 第2遺構面の遺構と遺物	18
第4節 小結	19

第4章 第46次調査

第1節 第46次調査区の位置と基本層序	21
第2節 第1遺構面の遺構と遺物	21
第3節 第2・3遺構面の遺構と遺物	26
第4節 小結	29

第5章 自然科学分析

第1節 楠・荒田町遺跡第43次調査の花粉分析調査	31
第2節 楠・荒田町遺跡第46次調査の古環境分析	34

第6章 考 察

第1節 土器について	49
第2節 発掘された福原の全容	63

挿図目次

- 図1 柿・荒田町遺跡周辺地図
 図2 中世における神戸市六甲山南麓主要遺跡位置図
 図3 柿・荒田町遺跡周辺遺跡位置図
 図4 柿・荒田町遺跡調査区位図
 図5 国立大学法人神・大学医学部附属病院大病院地盤調査位置図
 図6 柿・荒田町遺跡第42次調査遺構平面図
 図7 柿・荒田町遺跡第42次調査出土遺物実測図
 図8 柿・荒田町遺跡第43次調査遺構平面図
 図9 柿・荒田町遺跡第43次SK101～SK104出土遺物図
 図10 柿・荒田町遺跡第43次調査岡内断面図
 図11 柿・荒田町遺跡第43次調査細胞断面図
 図12 柚・荒田町遺跡第43次調査SK101・1号・断面図および遺物出土状況図
 図13 柚・荒田町遺跡第43次調査SK102平面・断面および遺物出土状況図
 図14 柚・荒田町遺跡第43次調査SK101・SD104出土遺物
 図15 柚・荒田町遺跡第43次調査SK102出土遺物
 図16 柚・荒田町遺跡第43次調査SK201出土遺物
 図17 柚・荒田町遺跡第43次調査SK201出土遺物
 図18 明治14年当時の周辺地形図
 図19 柚・荒田町遺跡第46次調査分区整理基本土壌断面図
 図20 柚・荒田町遺跡第46次調査1第1遺構断面図
 図21 柚・荒田町遺跡第46次調査1第1遺構断面SK01・SD01・土層断面図
 図22 柚・荒田町遺跡第46次調査1第1遺構断面SD01最下層出土状況
 図23 柚・荒田町遺跡第46次調査1第1遺構断面SD01最下層出土遺物
 図24 柚・荒田町遺跡第46次調査1第1遺構断面SD01中層・SD02出土遺物
 図25 柚・荒田町遺跡第46次調査1第1遺構断面SD03～SD05・土層断面図
 図26 柚・荒田町遺跡第46次調査第2・3遺構断面全体図
 図27 柚・荒田町遺跡第46次調査第2・3遺構断面SB01・土層断面図
 図28 柚・荒田町遺跡第46次調査第2遺構断面SD01出土遺物
 図29 柚・荒田町遺跡第46次調査第3遺構断面SB01平面・土層断面図
 図30 柚・荒田町遺跡周辺地盤構成図
 図31 柚・荒田町遺跡第43次調査地点の位置・断面図
 図32 花粉化石群集の層位分布
 図33 柚・荒田町遺跡第46次調査地点の層位および分析結果図
 図34 主要珪藻化石群集の層位分布
 図35 花粉化石群集の層位分布
 図36 植物珪酸体含量の層位の変化
 図37 二葉町遺跡第22次調査SE315出土遺物
 図38 二葉町遺跡二葉町6丁目地区SE304出土遺物
 図39 二葉町遺跡第22次調査SE318出土遺物
 図40 生田町遺跡第4次調査SE4101出土遺物
 図41 二葉町遺跡久保町6丁目地区SE302出土遺物
 図42 二葉町遺跡第22次調査SE317出土遺物
 図43 二葉町遺跡久保町6丁目地区SE301出土遺物
 図44 大槻町遺跡第1次調査SE104出土遺物
 図45 二葉町遺跡久保町6丁目地区SK311出土遺物
 図46 二葉町遺跡第22次調査SK301出土遺物
 図47 紙漉跡SK07II-1期出土遺物
 図48 紙漉跡SK07II-1期出土遺物
 図49 柚・荒田町遺跡第H151次調査SK01出土遺物
 図50 紙漉跡SK07II-3期出土遺物
 図51 大開遺跡第4次調査SE04出土遺物
 図52 二葉町遺跡二葉町6丁目地区SE312出土遺物
 図53 上沢遺跡第20次調査SE01出土遺物
 図54 柚・荒田町遺跡第H151次調査SD01最下層出土遺物
 図55 長田神社境内遺跡第17次調査SK06出土遺物
 図56 松野遺跡第19次調査SK01出土遺物
 図57 二葉町遺跡久保町6丁目地区SP301出土遺物
 図58 二葉町遺跡久保町6丁目地区SP302出土遺物
 図59 柚・荒田町遺跡H151次調査SD01中層出土遺物
 図60 二葉町遺跡二葉町6丁目地区SE306出土遺物
 図61 松野遺跡SF306出土遺物
 図62 森北町遺跡第20次調査SN08出土遺物
 図63 二葉町遺跡久保町6丁目地区SK310出土遺物
 図64 薩摩遺跡第21次調査SK01出土遺物
 図65 二葉町遺跡二葉町6丁目地区SK302出土遺物
 図66 古川町遺跡第20次調査SN09出土遺物
 図67 二葉町遺跡二葉町6丁目地区SE313出土遺物
 図68 森北町遺跡第20次調査SN02出土遺物
 図69 二葉町遺跡久保町6丁目地区SK302出土遺物
 図70 二葉町遺跡久保町6丁目地区SK308出土遺物
 図71 生田町遺跡第4次調査SE4102出土遺物
 図72 松野遺跡SK302出土遺物
 図73 二葉町遺跡久保町6丁目地区近隣全体図
 図74 柚・荒田町遺跡周辺地形図
 図75 二葉町遺跡周辺地形図
 図76 柚・荒田町遺跡主要構造平面図
 図77 柚・荒田町遺跡主要構造の位置関係図

表目次

- | | | |
|------|-----------|----|
| 表1 | 花粉分析結果 | 32 |
| 表2-1 | 珪藻分析結果(1) | 38 |
| 表2-2 | 珪藻分析結果(2) | 39 |
| 表3 | 花粉分析結果 | 43 |
| 表4 | 植物珪酸体含量 | 45 |
| 表5 | 平家関連年表 | 63 |

挿図写真図版

- | | | |
|---------|-----------------------------|----|
| 挿図写真図版1 | 柿・荒田町遺跡第43次調査花粉化石 | 33 |
| 挿図写真図版2 | 柿・荒田町遺跡第46次調査珪藻化石 | 47 |
| 挿図写真図版3 | 柿・荒田町遺跡第46次調査花粉化石 | 48 |
| 挿図写真図版4 | 柿・荒田町遺跡第46次調査
植物珪酸体・植生遺体 | 48 |

カラー図版

- カラー図版 1 径高分布グラフ 1
 グループ A 径高分布グラフ
 グループ B 径高分布グラフ
 グループ C 径高分布グラフ
- カラー図版 2 径高分布グラフ 2
 グループ D 径高分布グラフ
 グループ E 径高分布グラフ
 グループ F 径高分布グラフ
- カラー図版 3 径高分布グラフ 3
 グループ G 径高分布グラフ
 グループ H 径高分布グラフ
 グループ I 径高分布グラフ
- カラー図版 4 径高分布グラフ 4
 上師跡径高分布グラフ
 須恵器径高分布グラフ
 瓦器径高分布グラフ

モノクロ図版

図版 1

楠・荒田町遺跡第 42 次調査第 1 遺構面全景（東から）
楠・荒田町遺跡第 42 次調査第 2 遺構面全景（東から）

図版 2

楠・荒田町遺跡第 42 次調査 SD101 遺構土層断面（西から）
楠・荒田町遺跡第 42 次調査 P102 上層断面（南から）
楠・荒田町遺跡第 42 次調査 P101（北から）
楠・荒田町遺跡第 42 次調査 P101 遺物出土状況（東から）
楠・荒田町遺跡第 42 次調査 P101 光輝状況（北から）
楠・荒田町遺跡第 42 次調査 P103 上層断面（南から）
楠・荒田町遺跡第 42 次調査 SD202 上層断面（西から）
楠・荒田町遺跡第 42 次調査 SD201 上層断面（西から）
楠・荒田町遺跡第 42 次調査区土層断面（西から）

図版 3

楠・荒田町遺跡第 43 次調査第 1 遺構面全景（南から）
楠・荒田町遺跡第 43 次調査第 1 遺構面全景（西から）
楠・荒田町遺跡第 43 次調査第 1 遺構面満群全景（南から）

図版 4

楠・荒田町遺跡第 43 次調査 SK101（北西から）
楠・荒田町遺跡第 43 次調査 SK102（北東から）
図版 5
楠・荒田町遺跡第 43 次調査 SD101（北から）
楠・荒田町遺跡第 43 次調査 SD102（北から）
楠・荒田町遺跡第 43 次調査 SD103（南から）
楠・荒田町遺跡第 43 次調査 SD104（南から）
楠・荒田町遺跡第 43 次調査 池池土層断面（南西から）

図版 6

楠・荒田町遺跡第 43 次調査第 2 遺構面全景（南から）
楠・荒田町遺跡第 43 次調査第 2 遺構面全景（北西から）

図版 7

楠・荒田町遺跡第 43 次調査 SD201 遺物出土状況（南西から）
楠・荒田町遺跡第 43 次調査 SK201（南西から）

図版 8

楠・荒田町遺跡第 43 次調査 SK201（南西から）
楠・荒田町遺跡第 43 次調査 SK203 土層断面（南から）
楠・荒田町遺跡第 43 次調査 SD202 土層断面（東から）

- カラー図版 5 楠・荒田町遺跡第 46 次調査区全景垂直写真
カラー図版 6 楠・荒田町遺跡第 46 次調査区北半全景垂直写真
カラー図版 7 楠・荒山町遺跡第 46 次調査区北半遺景写真
カラー図版 8 楠・荒田町遺跡第 46 次調査区北半全景写真
カラー図版 9 楠・荒田町遺跡第 46 次調査区北半斜め全景写真
楠・荒田町遺跡第 46 次調査区北半 SD01・SD02 上層断面写真
カラー図版 10 楠・荒山町遺跡第 46 次調査区北半 SD01 全景写真
楠・荒田町遺跡第 46 次調査区北半 SD01 土層断面写真
カラー図版 11 楠・荒田町遺跡第 46 次調査区北半 SD02 全景写真
楠・荒田町遺跡第 46 次調査区北半 SD02 土層断面写真
カラー図版 12 楠・荒田町遺跡第 46 次調査 SD01 山上遺物集合写真

図版 9

楠・荒田町遺跡第 46 次調査区北半全景（東から）
図版 10 楠・荒田町遺跡第 46 次調査区北半全景（西から）

図版 10 楠・荒田町遺跡第 46 次調査区北半全景（西から）

図版 11

楠・荒田町遺跡第 46 次調査 SD01・SD02 土層断面（西から）
楠・荒田町遺跡第 46 次調査 SD01・SD02 切合関係上層断面（東から）

図版 12 楠・荒田町遺跡第 46 次調査 SD01 土層断面（西から）

図版 12 楠・荒田町遺跡第 46 次調査 SD02 土層断面（西から）

図版 13

楠・荒田町遺跡第 46 次調査 SD01 最下層遺物出土状況（西から）

楠・荒田町遺跡第 46 次調査 SD01 最下層遺物出土状況（北から）

図版 14 楠・荒田町遺跡第 46 次調査石組全景（西から）

図版 14 楠・荒田町遺跡第 46 次調査石組土層断面（西から）

図版 15

楠・荒田町遺跡第 46 次調査 SD03・SD05 土層断面（西から）

楠・荒田町遺跡第 46 次調査 SD04 土層断面（西から）

図版 16

楠・荒田町遺跡第 46 次調査区南半第 2 遺構面全景（北から）

図版 17

楠・荒田町遺跡第 46 次調査区南半第 2 遺構面全景（北から）

楠・荒田町遺跡第 46 次調査区南半第 2 遺構面全景（北から）

図版 18 楠・荒田町遺跡第 46 次調査 SF01（北から）

図版 18 楠・荒田町遺跡第 46 次調査 SE01 土層断面（北から）

図版 19

楠・荒田町遺跡第 46 次調査区南半第 3 遺構面全景（北から）

楠・荒田町遺跡第 46 次調査区南半第 3 遺構面全景（北から）

図版 20

楠・荒田町遺跡第 46 次調査 SB01 全景（西から）

楠・荒田町遺跡第 46 次調査 SB01 柱穴上層断面（南から）

図版 21

楠・荒田町遺跡第 42 次調査・43 次調査第 1 遺構面出土遺物

図版 22 楠・荒田町遺跡第 43 次調査第 2 遺構面上出遺物

図版 23 楠・荒田町遺跡第 46 次調査 SD01 最下層出土遺物

図版 24 楠・荒田町遺跡第 46 次調査 SD01 中層山上出遺物

図版 25 楠・荒田町遺跡第 46 次調査第 1 遺構面 SD02

第 2・3 遺構面上出遺物

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と経過

今回報告する楠・荒田町遺跡第42次調査、同第43次調査、同第46次調査については、いずれの場所も神戸市埋蔵文化財分布図に記載されている楠・荒田町遺跡の範囲内で、国立大学法人神戸大学医学部附属病院、ならびに学舎敷地内に所在しており、兵庫県教育委員会の調査成果から、埋蔵文化財の存在が確認されていた地点である。

いずれの地点も事業主と協議を行い、工事によって埋蔵文化財に影響を与える部分について発掘調査を実施することとなった。なお、調査原因については、第42次・第46次調査が、国立大学法人神戸大学医学部附属病院関連施設建設、第43次調査が国立大学法人神戸大学医学部大学院演習施設建設である。

調査組織 神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古資料担当）

壇上 重光 前 神戸女子短期大学教授（～平成19年7月14日）

工渠 普通 大阪府立狭山池博物館館長

和田 晴吾 立命館大学 文学部教授

平成19年度

教育委員会事務局

現地調査・遺物整理

教育長 小川 雄三

社会教育部長 黒住 章久

教育委員会参事 柏木 一孝

（文化財課長事務取扱）

社会教育部主幹 丸山 潔

（埋蔵文化財指導係長事務取扱）

社会教育部主幹 渡辺 伸行

（埋蔵文化財センター所長事務取扱）

埋蔵文化財調査係長 千種 浩

文化財課主査 丹治 康明

文化財課主査 安田 滋

文化財課主査 山本 雅和

事務担当学芸員 阿部 敬生

事務担当学芸員 中谷 正

遺物整理担当学芸員 黒田 恭正

遺物整理担当学芸員 中村 大介

調査担当学芸員 富山 直人

平成20年度

教育委員会事務局

現地調査・遺物整理

教育長 橋口 秀志

社会教育部長 黒住 章久

教育委員会参事 柏木 一孝

（文化財課長事務取扱）

社会教育部主幹 丸山 潔

（埋蔵文化財指導係長事務取扱）

社会教育部主幹 渡辺 伸行

（埋蔵文化財センター所長事務取扱）

埋蔵文化財調査係長 千種 浩

文化財課主査 丹治 康明

文化財課主査 安田 滋

文化財課主査 山本 雅和

事務担当学芸員 阿部 敬生

事務担当学芸員 中谷 正

遺物整理担当学芸員 黒田 恭正

遺物整理担当学芸員 佐伯 二郎

遺物整理担当学芸員 中村 大介

調査担当学芸員 富山 直人

調査担当学芸員 小林 さやか

平成22年度

教育委員会事務局

現地調査・遺物整理

教育長 橋口 秀志

社会教育部長 大寺 真秀

教育委員会参事 柏木 一孝

（文化財課長事務取扱）

社会教育部主幹 渡辺 伸行

（埋蔵文化財センター所長事務取扱）

埋蔵文化財調査係長 千種 浩

文化財課主査 丹治 康明

文化財課主査 安田 滋

文化財課主査 斎木 巖

事務担当学芸員 佐伯 二郎

遺物整理担当学芸員 西岡 誠司

遺物整理担当学芸員 中村 大介

調査担当学芸員 富山 直人

調査担当学芸員 中谷 正



図1 楠・荒田町遺跡周辺地形図

調査の経過

第42次調査では、平成19年10月15日より、重機掘削を開始する。調査対象面積は35m²である。順次人力による遺構検出作業を行い10月17日に第1遺構面の写真撮影を行う。その後、第2遺構面の検出を人力によって行い、10月22日に写真撮影を行った。10月22日より、隣接地における埋蔵文化財の残存状況を確認するため、トレンチ調査を実施し、重機による掘削と人力による精査を行った。結果として、地表面より1.3mにて、中世の包含層を確認した。図面関係の整理と、トレンチの埋め戻しを行い、平成19年10月24日に調査を終了した。

第43次調査では、平成20年4月7日より、重機掘削を開始する。調査対象区域内に明治19年代までは確實に使用されていた溜池が存在していることが事前にわかつていたため、池の範囲を確定し、影響深度まで掘削して、人力による検出作業のうち、4月18日に、断面写真ならびに断面図を作成し、池の部分を埋め戻した。以後、この部分を土置き場として使用しながら、東側の遺構が残存している部分の調査を実施した。調査は、順次人力による遺構検出作業を行い、4月23日に写真撮影を行った。その後、第2遺構面の検出を人力によって行い、5月14日に写真撮影を行った。5月15・16日に撤収作業を行い、平成20年5月16日に完了して、すべての現地調査を終了した。

第46次調査では、平成22年5月10日から、調査対象面積600m²のうち、まず、調査区の北半について重機掘削を行い、調査を実施した。5月14日より、調査は一時中断したが、6月10日より、調査を再開し、重機掘削、ならびに搅乱の掘り下げを行い、順次人力による遺構検出作業を行った。7月22日にクレーンによる写真撮影、7月23日に第1遺構面の全景写真撮影を行う。7月24日には、現地説明会を実施した。7月26日から、反転し、残りの南半部分の調査区について、重機掘削ならびに人力掘削により、搅乱を掘り下げ、調査を実施した。順次人力による掘削を行い、遺構検出作業を実施したが、南半では北半の範囲で確認した時期の遺構が存在していなかったため、検出した面を第2遺構面として、8月10日に写真撮影を行った。その後、第3遺構面について、順次人力による遺構検出作業を行い、8月18日に全景写真撮影ならびに8月19日にクレーンによる写真撮影も行った。8月20日より、井戸の断ち割り、ならびにピットの断ち割りを行なった。8月25日より、図面関係の整理と埋め戻しを実施し、8月30日に現地から撤収を完了し、調査を終了した。

第2節 遺跡の位置と環境

楠・荒田町遺跡が所在する中央区楠町と兵庫区荒田町の一帯は、北側に六甲山の山塊、東側は安養寺山から神戸海洋気象台のある宇治野山、西側は会下山から滝山・菊水山と三方を閉まれた地形になり、北東から南西に延びる梢円形状の盆地地形となる。その地形は南にいくほど低くなるが、六甲山系から派生する石井川・天王川とその合流した湊川が中央を流れ、かつては宇治川も西流していたと思われる谷地形が残される起伏の多い地形である。

楠・荒田町遺跡はその南側の開口部の東半部を占めており、その南端には推定古代山陽道が抜けている。周辺には荒山町の他に、「雪の御所町」「上・下三条町」「祇園町」「馬場町」「夢野町」「熊野町」「安濃城」「平野」「市場」「湯の口」などの地名が残されている。また、天王川の谷を北へ遡るルートは、古くは天王谷越えと呼ばれ、現在も国道428号線「有馬街道」として有馬温泉から丹波へと抜ける交通路として利用されている。

周辺の遺跡

原始・古代

近隣では旧石器時代まで遡る遺跡は会下山遺跡などしかなく、きわめて少ない。縄文時代になると、楠・荒田町遺跡でも縄紋早期以前まで遡る尖頭器が出土しており、中期から晩期にかけての土坑や貯蔵穴も検出されている。雲井遺跡では、早期から前期・中期・後期晩期と様々な時期の土器が出土しており、六甲山山麓における縄文時代の中心的な遺跡である。宇治川南遺跡では早期から晩期にかけての遺物が出土しており、黒曜石や石棒・土偶なども出土している。山麓の祇園遺跡でも早期・前期の遺物が出土している。低地では大開遺跡や上沢遺跡、五番町遺跡などが挙げられる。

弥生時代になると、遺跡は爆発的に増える。楠・荒田町遺跡では前期から中期初頭の貯蔵穴が検出され、宇治川南遺跡や大開遺跡では前期の竪穴建物が検出されている。大開遺跡は前期前半の環濠集落である。中期になると楠・荒田町遺跡でも竪穴建物や掘立柱建物、方形周溝墓などが検出され、宇治川南遺跡では木棺墓群が見つかっている。後期には長田神社境内遺跡や上沢遺跡・長田遺跡に集落が営まれる。また、中期や後期には熊野遺跡・会下山遺跡、河原遺跡、天王谷遺跡、祇園神社裏山遺跡などの丘陵上にも高地性集落が営まれるようになる。

周辺は市街化が著しいため、古墳は消滅や埋没したものが多いものと思われ、夢野丸山古墳・会下山二本松古墳・念佛山古墳・池田古墳群などが知られているにすぎない。古墳時代の集落跡は、楠・荒田町遺跡で中期や後期の建物が確認されている。他に、韓式系上器が出土した上沢遺跡や、御歳遺跡、御船遺跡、神楽遺跡、湊川遺跡、三番町遺跡などが知られる。さらに、松野遺跡では、古墳時代中期の居館と考えられる柵で囲まれた建物群が確認されている。また、松野遺跡の調査で、多量に白卡が出土した遺構も確認しており、祭祀関連の遺構も存在していたと考えられる。また、下山手北遺跡では7世紀前半の倉庫を含む掘立柱建物群が検出されている。

奈良時代の遺跡には、銅鏡が出土した上沢遺跡、8世紀末～9世紀の倉庫を含む掘立柱建物が検出され八部郡衙の推定地である御歳遺跡や、神楽遺跡、御船遺跡などがあり、楠・荒田町遺跡内の岡立大学法人神戸大学医学部附属病院構内でも多くの上器が出土した土坑が検出されているが、その他の地区では上器が散見されるにすぎない。兵庫津遺跡では大輪田泊の時代にまで遡る遺物が、兵庫津遺跡第32次調査で出土しており、今後の調査に期待がもてる。室内遺跡からは上製の仏像の一部や瓦が出土しており、寺院跡の存在が窺われる。平安時代前半の遺跡には下山手北遺跡があり、貴族クラスの邸宅跡と考えられる園池を伴う掘立柱建物群が検出された。宇治川南遺跡では10世紀末から13世紀前半の遺物が出土している。神楽遺跡では平安時代中期の綠釉陶器・灰釉陶器などの遺物が出土している。二葉町遺跡では、複数の広範囲にわたる調査を実施しており、11世紀後半から、13世紀前半にかけての集落の変遷が理解できる貴重なデータを提供している。

中世

平安時代後半から鎌倉時代初頭の遺構・遺物の出土は増加する。

この時期の代表的な遺跡のひとつ、祇園遺跡は、神戸市兵庫区にあり、旧平野と呼ばれていた場所にある。平成5年度より調査が開始された遺跡で、京都系上器が出土するほか、庭園遺構の検出された遺跡としても著名である。その造りは、とても精緻で京都の同時期の庭園遺構と比較しても、遜色のない見事なものである。この庭園遺構の時期は、土器型式からみておおよそ2型式程度の時期幅に収まるもので、

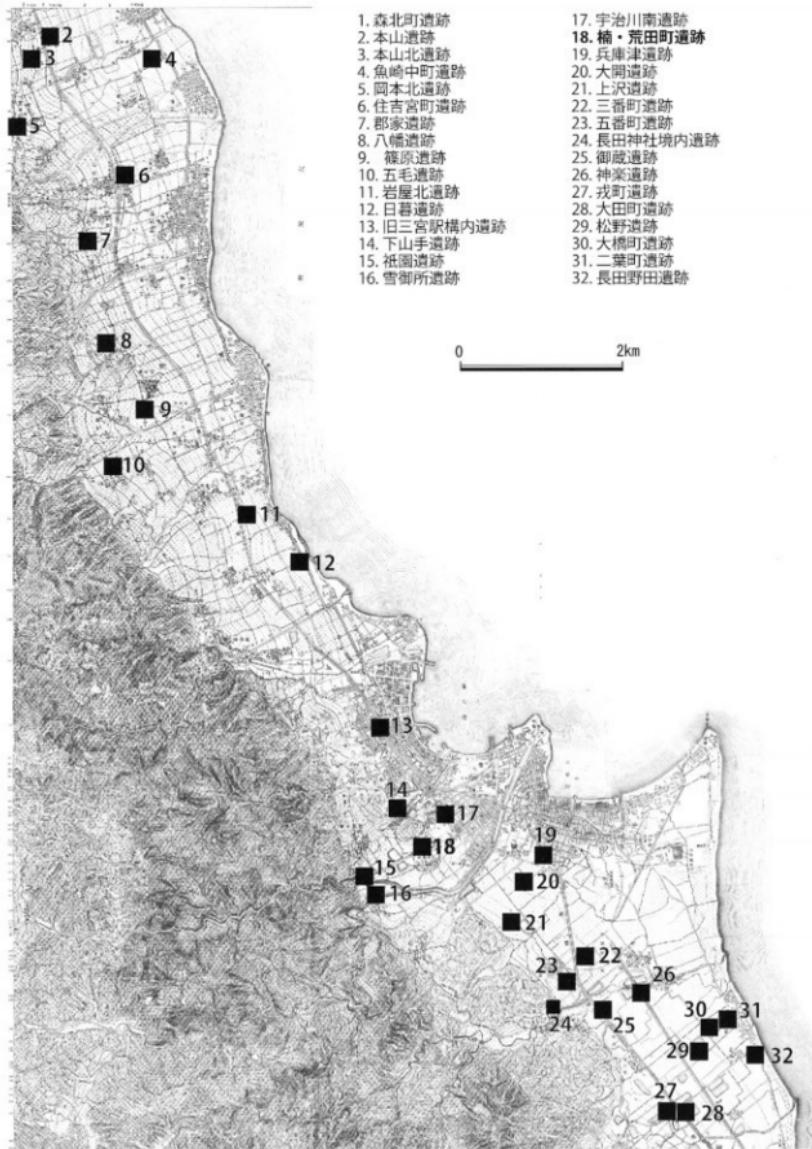


図2 中世における神戸市六甲山南麓主要遺跡位置図

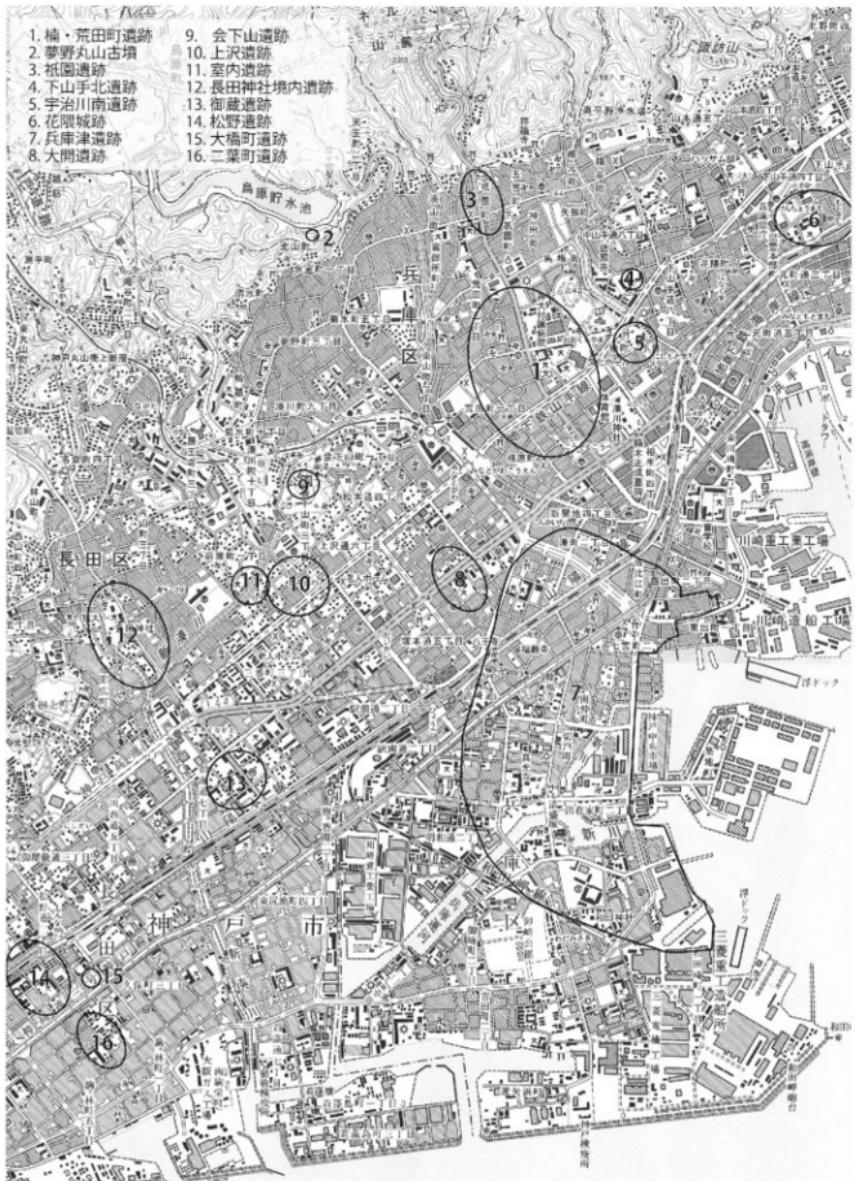


図3 桥・荒田町遺跡周辺遺跡位置図 (S = 1 /25000)

非常に短時間のうちに何度も補修と改修が行われていたことが確認されている。そして、時期的には、清盛が福原を「遁世退老之幽居」としていた時期と一致するのである。また、遺構からは、輸入陶磁器などの出土が認められる。これらの遺構と遺物の内容から、この地は、平氏の中でもかなり身分の高い人物の別荘であった可能性が高いのである。また、12世紀後半の土器資料としても、神戸市域における指標となるものである。なお、庭園遺構の洲浜の堤が、約N—52°—Eの東西方向で、祇園遺跡周辺部の現状の地割りに近い方位となっている。これとは別に、同時代と考えられる石垣等が検出されており、この石垣はN—37°—Wの南北方向をとるものである。

二葉町遺跡では広範囲に調査が行われており、中世の集落の様相がほぼ復元可能な貴重な資料提供している。集落は、11世紀中頃から13世紀中頃にかけて綿々と営まれておらず、12世紀後半以降に集落が拡大し、13世紀にはピークを迎える。集落内部には、規模の異なる建物が配置されており、単なる住居群としてではなく、住居群と共にいくつかの用途をもった建物を含む居住域が形成されている。建物の方向は、現状の周囲の地割りに近い方位をとりながら、それぞれ個別に微妙に異なっており、おおよその方向性の中で、微地形などの影響を受けた結果、個々に微妙に異なったと考えられる。

御歳遺跡では、弥生時代以降継続して生活が営まれているが、奈良時代には三彩や皇朝12銭が出上するほか、人形の擬立柱建物など、官衙的な性格をにじませている。その他中世墓群も確認されている。

長田神社境内遺跡では、平安時代から鎌倉時代にかけての遺構遺物はそんなに多くはないが、長田神社境内遺跡第17次調査において、12世紀後半と考えられる土坑(SK06)からセットで土器が出土している他、谷状の遺構から、祭祀にかかわるとみられる遺物が出土している。

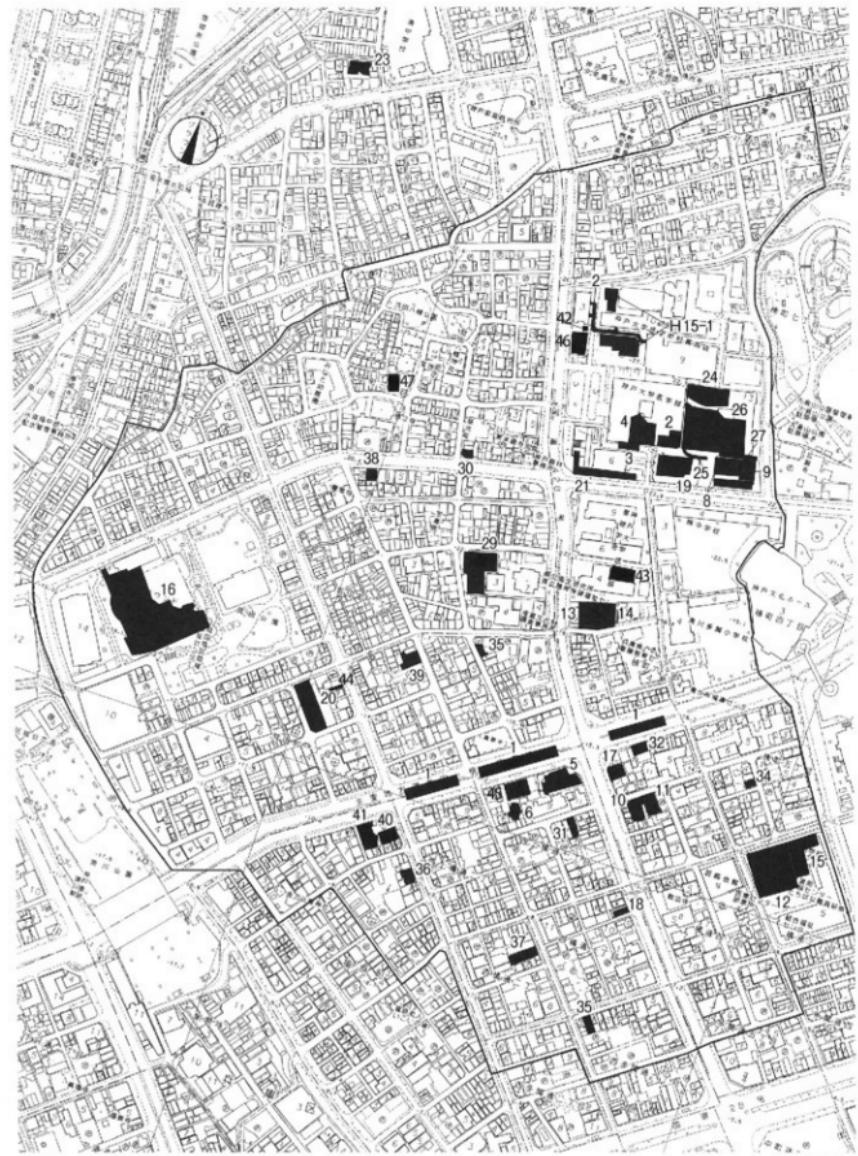
上沢遺跡でも中世の資料は増加しているが、上沢遺跡第55次調査のST01からは、13世紀前半と考えられる土師器が出土している。

五番町遺跡では、11世紀後半以降の建物群などが確認されており、それに伴って、土器の出土が認められる。

二葉町遺跡の鈎溝は、現状の周囲の地割りにほぼ沿うものであり、時期としては12世紀後半とされている。この鈎溝の他に、御歳遺跡や松野遺跡など、それぞれの遺跡における周囲の現状の地割り方向に一致する鈎溝が多く確認されている。また、大橋町遺跡1次調査で確認されている鈎溝は、飛鳥時代では、調査区の周囲の現状の地割りと異なっていたものが平安時代後期より少し前から現行の地割りにほぼ揃う鈎溝の方向へと変化している。さらに、二葉町遺跡では、神戸市長田区久保町六丁目における調査において、確認されている建物群は、この鈎溝を切って建てられており、鈎溝より後出するものである。ただし、建物はこの方向に規定されるようにして建てられている。

これらの鈎溝の多くが12世紀以降と考えられ、部分的にであるにしても12世紀前半にはすでに現存する地割に一致する方向へと変化する区域が存在し始めていたと考えられるのである。このことから、断片的であるにしても12世紀中ごろには、八部郡内において広範囲に条里的な方向の一貫性が意識されていたと考えられるのであるが、あくまでも部分的なものであり、全体の地割りによる条里の整備は段階的に行われ、完成したものと考えられる。

西摂西部地域における土器の様相としては、京都系土師器とともに、回転糸切り底部の在地系土師器が混在する傾向がある。ただ、祇園遺跡のSX07や楠・荒田町遺跡H15-1次調査のSK01出土の土師器群については、在地系の土器は含まれるとしても、比率としてはわずかである。つまりは、祇園遺跡並びに楠・荒田町遺跡周辺は土師器の様相として、京都色が強い特異な状況を示している地域と考えられる。



番号は、楠・荒田町遺跡の調査次数を表す。

S=1/5000

図4 楠・荒田町遺跡調査区位置図

楠・荒田町遺跡では、1978年に最初の調査がおこなわれて以来、多くの調査が実施されており、その成果も多岐にわたる。

調査開始当初に確認された弥生時代前期の集落は、その後の調査から広範囲には広がっていないことがわかり始めている。中期には土器などの出土量は増え、その地点も広がりを見せるが、集落域と墓域にわかれ、それぞれが領域を広げたことを示していると考えられる。古墳時代の様相は不明瞭な部分が多いが、奈良時代には遺構・遺物が散見できる。奈良時代にはこの周辺に集落の跡みが想定されるが、規模については不確定である。

楠・荒田町遺跡第2次調査では、大型の柱掘方をもつ掘立柱建物と共に2条の塹が確認されている。建物の方位は、約N-40°-W前後である。しかしその南で確認されている2条の塹は方向が建物とは異なるもので、およそN-70°-E前後の方向をとるものである。この溝は、V字状の断面をもつもので、都城関係の溝というよりは、軍事的な防御的性格の強いものと考えられる。この他に、兵庫県教育委員会において、いくつかの調査が実施されている。これらの調査によって、溝や建物などが確認されており、時期としては福原離宮の時期に相当するものと考えられている。特に、楠・荒田町遺跡第26次調査では、L字形に配置された2棟の建物が検出された他、南北方向に走る溝が検出されている。時期としては福原離宮の時期に前後するものと考えられている。これらの遺構のほとんどは、N-16°-17°-W前後の方位をとるのである。これらの遺構の方位は、楠・荒田町遺跡第2次調査以降、今回の調査で検出されている塹に近い区画の方位と考えられるのである。また、鎌倉時代の遺構も確認されているが、それらの主な方位は12世紀代のものとほぼ一致しており、基本的には周辺の地割りを踏襲していたものと考えられるのである。

国立大学法人神戸大学医学部附属病院関連の調査以外にもいくつか調査が実施されている。

楠・荒田町遺跡第10・11次調査では、塹状遺構が確認されている。この塹状遺構は、幅約5m、深さ1.7mを測る断面V字状のもので、時期としては、12世紀から13世紀と考えられる。この遺構の方位は、明治19年作成の假製地形図に見られる地割り方向に近い方位をとるもので、祇園遺跡の庭園遺構の洲浜の方向とほぼ一致するものである。

また、楠・荒田町遺跡第12次調査では、溝が一条確認されている。この溝は、二段に掘り込まれており、幅5m以上、深さ1.4m以上を測るものである。溝幅は推定で、10m近いものであり、時期としては12世紀後半から13世紀と考えられている。溝の方位は、楠・荒田町遺跡第10・11次調査で確認されている塹状遺構とほぼ一致している。

楠・荒田町遺跡第16次調査では、柵によって区画された掘立柱建物群10棟が確認されている。これらの建物の内、SB02とSA01が11世紀後半、SB03が12世紀代、SB09・SB10が13世紀代と時期がある程度特定できる。これらの内、12世紀代とされるSB03の方位は、N-39°-Wで、この方位とほぼ一致する建物や柵列としては、SB02・SB05・SA01・SA05があり、福原離宮の時期に該当する柵で囲まれた邸宅の可能性がある。なお、SB03の示す方位は、明治19年作成の假製地形図に見られる調査地区周辺の地割り方向に近い方位で、強い真北への意識は認められず、周囲全体の地割りからも特に特異な方向ではない。おそらくは、山陽道に近い方位で地形に合わせて開発された区画によって規定された建物の方位と考えられ、楠・荒田町遺跡周辺でも水田区画等の方位を大きく改変して建物を建てることはなかったと考えられる。つまりは、周囲の地形的制約の中での段階的開発によるもので、この緩やかな規制を越えて、北を意識した大規模な開発についてはその資料並びに根拠は希薄である。

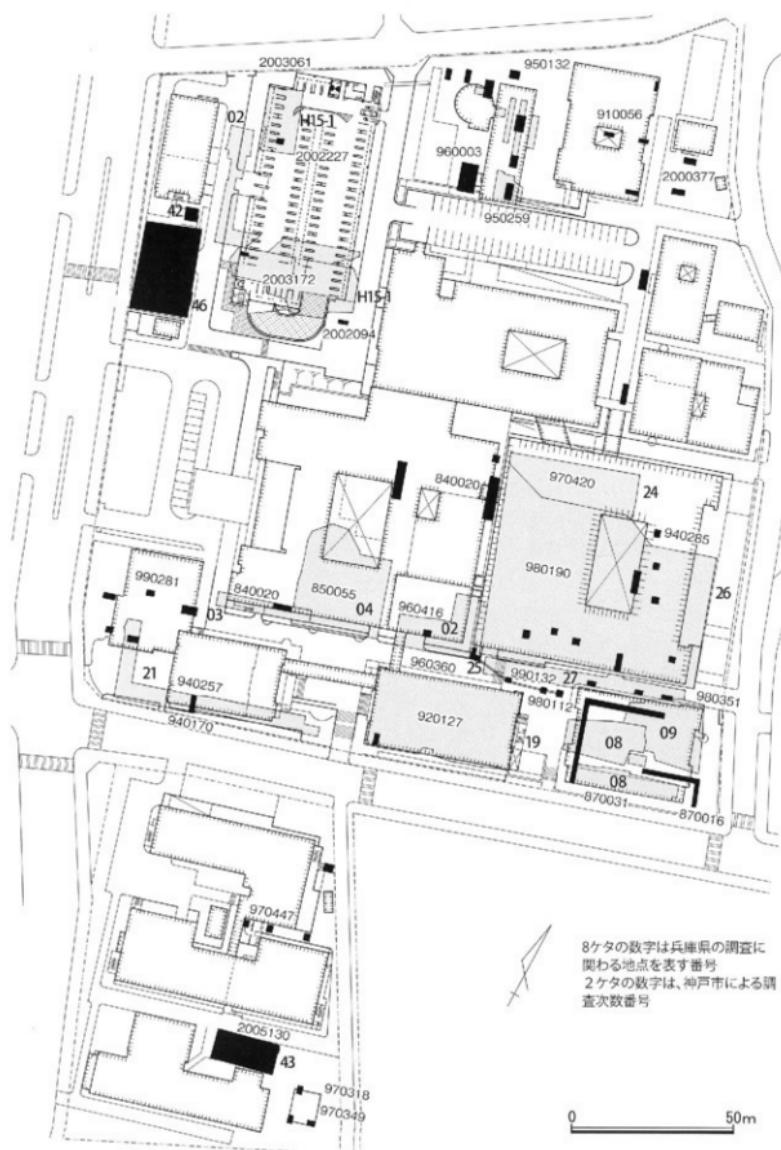


図5 国立大学法人神戸大学医学部附属病院内調査地詳細位置図

第2章 第42次調査

第1節 第42次調査区の位置と基本層序

第42次調査区は、中央区楠町7丁目・国立大学法人神戸大学医学部附属病院の旧本館の北西端にあたり、兵庫県教育委員会によって実施された第H15-1次調査「楠・荒田町遺跡II掲載の遺跡調査番号2003172」(以下県報告IIと省略する)の西、第46次調査の北に位置する。

調査区の基本層序は、110cmの盛土の下に淡黄灰色粗砂(層厚15cm)がある。以下の層が包含層となっており、淡褐色中～粗砂(層厚25cm)、褐色シルト混中～細砂(層厚20cm)で、いずれにも上器が含まれている。時期としては、平安時代から鎌倉時代にかけてと考えられる。さらに、暗褐色砂混シルト(10cm)・灰褐色砂混シルト(20cm)で、それぞれ下面が遺構面である。第1遺構面は、平安時代であり、第2遺構面は奈良時代から平安時代にかけての時期と考えられる。

第2節 第1遺構面の遺構と遺物

暗褐色砂混シルトを包含層とする下面で、灰褐色砂混シルトを基盤とする遺構面である。

調査区からは溝並びにピットを検出した。

溝(SD101)は幅50cm、深さ10cmで、北東から南西に流れる。この溝の方向は、県報告II掲載のV字形壕SD01(以下V字形壕と省略する。)と方向が近いが、正確には、2次調査で確認されている建物の方向も含めて若干異なる。なお、溝の時期は、出土遺物が細片のため図示できないが、溝からは11世紀から12世紀にかけての遺物が出土しており、V字形壕に先行すると考えられる。

ピットは、一辺30cm前後の方形のものが中心であり、深さは10～20cmを測る。建物としてのまとまりは確認できていない。ピットの底には礎盤として、石を据えているものが確認されている。pit1の石の底から土器が出土しているが、時期としては6世紀後半から末のもので、たまたま下層の遺構である溝の遺物が混入したのか、又は6世紀代の遺構なのか判断しにくい状況である。各ピットは建物としてはまとまらない。

pit1出土の須恵器1は、口径14.0cm、器高3.9cmを測る环蓋である。天井部と口縁部の境は不明瞭である。口縁端部は、上方に伸びて丸く收める。口径と形状から、田辺昭三氏による陶色編年でのTK43型式に比定しうるものと考えられる。

第3節 第2遺構面の遺構と遺物

灰褐色砂混シルトを包含層とする下面で、暗褐色シルトを基盤とする遺構面である。

溝(SD201)は深さ20cmほどで、幅は調査区外に延びるため不明である。溝から出土した遺物から、10世紀末頃を中心とした時期と考えられる。

溝(SD202)は、幅80cm、深さ10cmを測る。溝から出土した遺物はいずれも細片であり、明確な時期は提示しえない。

ピットはいずれも直径20～30cmの円形で、深さは20～30cmを測る。建物としてのまとまりは確認できていない。出土した遺物の年代から、これらのピットは9世紀から11世紀にかけての時期と考えられる。

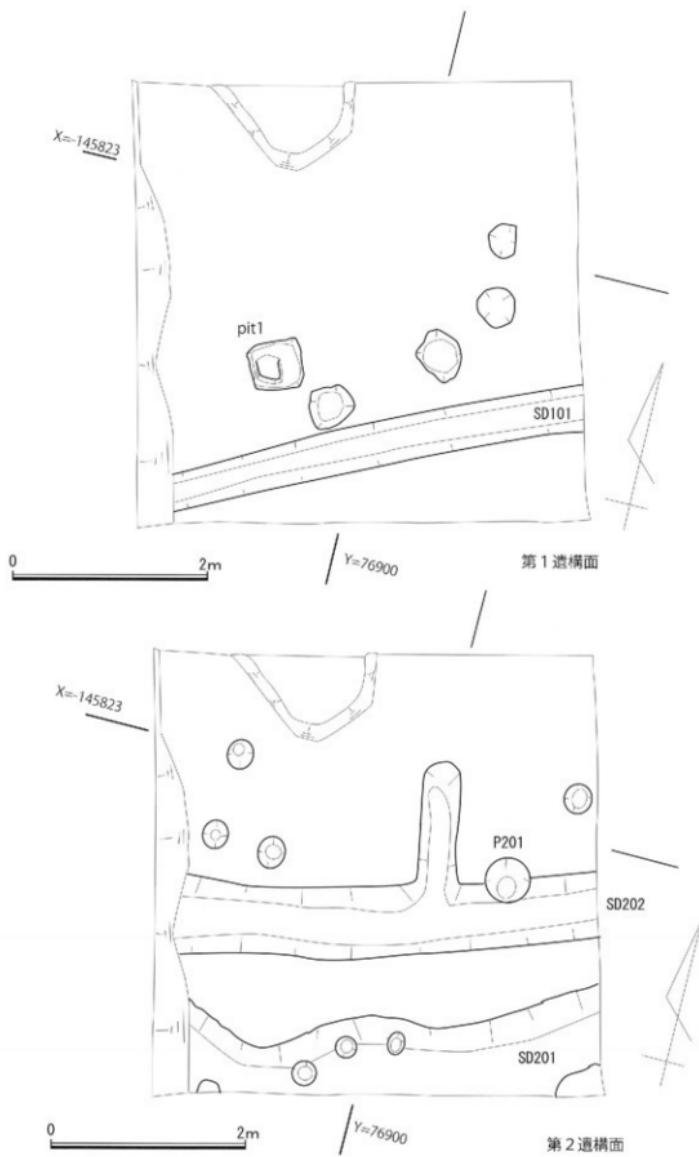


図6 桟・荒田町遺跡第42次調査遺構平面図

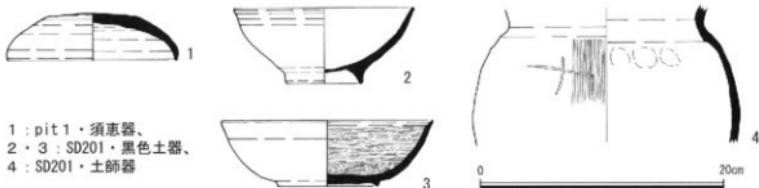


図7 楠・荒田町遺跡第42次調査出土遺物実測図

SD201 出土の黒色土器楕2は、口径 14.8cm、器高 6.2cm を測る。底部から外上方に延び、中程で屈曲する体部をもつ。口縁部はやや外反気味に延び、端部はやや方形を呈する。高台は、高く、やや台形に近い。

SD201 出土の黒色土器楕3は、口径 17.4cm、器高 5.4cm を測り、底部から内湾気味に外上方に延びる体部から、やや外反気味に立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部内面には沈線が施されている。体部内面には細かなヘラミガキが密に施されている。高台は、粘土組貼り付けの断面三角形に近いものである。およそ、10世紀末と考えられる。

SD201 出土の土器師表4は、頸部から体部上半に至る破片である。頸部外面は強いナデを施し、体部外面はタテハケである。体部の肩の部分に十字のヘラガキが認められる。

第4節 小結

第42次の調査では、溝、並びにピットを確認している。第1遺構面で確認した溝、並びにピットは平安時代の可能性が高く、およそ11世紀～12世紀にかけての時期であると考えられる。第2遺構面では9世紀から11世紀の遺構が確認されている。いずれもこれまでの調査で確認されてはいるものの、その事例は少なく、貴重な事例の確認といえよう。

なお、可能性としてはあるが、第2次調査で確認されている建物はその方向が現況の地割り方向と大きく異なっている。周辺部の調査から、現況の地割り方向へと変化していくのが12世紀以降と考えられることから、時期的には第42次調査で確認された時期に相当すると考えられる。

第3章 第43次調査

第1節 第43次調査区の位置と基本層序

第43次調査区は、中央区楠町6丁目・国立大学法人神戸大学医学部附属病院敷地の南側にある大学院演習施設群の敷地の東に位置し、兵庫県教育委員会によって実施された楠・荒田町遺跡IIに掲載の遺構調査番号 970318・970349（以下県報告IIとする）の位置にはほぼ重なる部分がある。

調査区は、国立大学法人神戸大学医学部附属病院の校舎建設によって影響の及ぶ範囲と深さ（工事掘削影響深度、G.L. - 2.5 m）を基準として、影響の及ぶ範囲について実施している。

調査地は、東から西に傾斜しており、西側およそ2/3は後世の溜池によって遺構面が削平されている。また、溜池の底は、工事影響深度より深いため、一部を確認するにとどめている。

基本層序は、約50cmの盛土・擾乱のち、茶褐色小礫混細～中砂（第2層）、灰褐色小礫混細～中砂（第8層、第1遺構面）、黄色少礫混シルト（第18層、第2遺構面）となる。

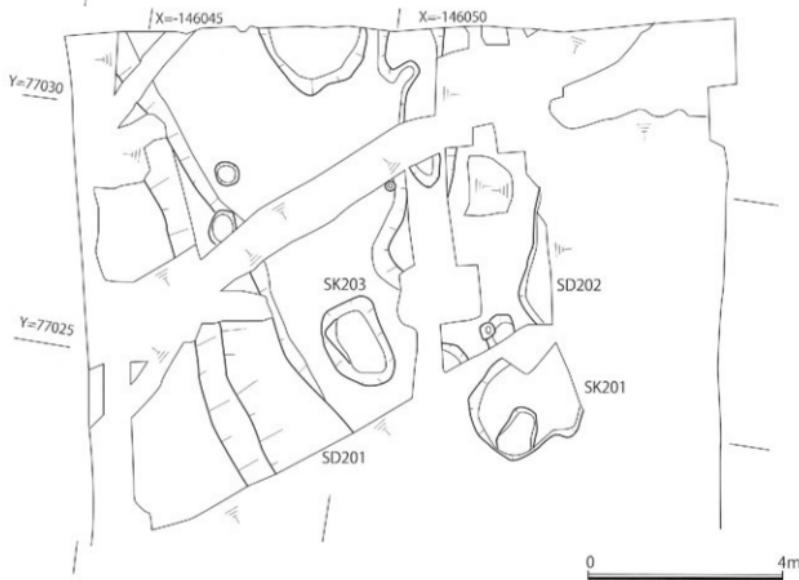
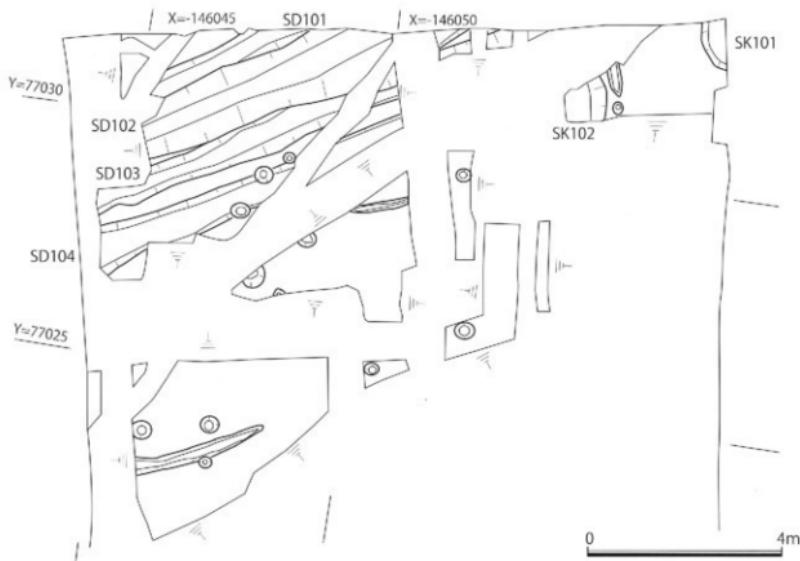


図8 楠・荒田町遺跡第43次調査遺構平面図

第2節 第1遺構面の遺構と遺物

茶褐色小礫混細～中砂を包含層とする下面で、灰褐色小礫混細～中砂を基盤とする遺構面である。調査区からは中世の溝を4条、土坑2基、ピットならびに溜池を確認している。

調査区は遺構の残っている東半分についても搅乱が多い。調査区の西で確認された溜池は、明治19年頃の假製地形図にも記載されており、埋没時期はそれ以降と考えられる。掘削時期については、池の最下層の埋土から、中世の遺物しか出土しておらず、池斜面に位置するSK201を切っていることから、11世紀以降、おそらくは、中世以降のことと思われる。

調査区の北東で検出したSD101～104は、方位としては、N-30°-Eの方向にそれぞれほぼ並行してはしる溝である。SD101は幅0.7m、深さ0.1mを測り、4条の中で最も浅い。埋土は淡黄灰色シルトである。

SD102はSD103と切り合い、SD103より新しい。底面は平坦で、幅は0.7m、深さ0.3mを測る。埋土は黄灰色細～中砂、淡黄灰色粘質シルトである。この溝は灰褐色シルト混細砂を埋土にもつ溝（SD103）を切り込んでいることが断面で確認できる。

SD103は幅0.9m、深さ0.3mを測り、底面は平坦である。埋土は最終堆積から順に灰白色細砂混シルト、灰白色粘質シルト、灰褐色シルト混細砂、灰色細砂である。

SD104は、幅0.9m、深さ0.3mを測り、SD103と平行してはしる溝である。埋土は暗灰褐色シルト、灰褐色細砂、灰色細砂である。

SD104出土の6は、高台径7.2cmを測る灰釉陶器である。

高台は台形を呈し、比較的高い立ち上がりを持つ。高台のみの出土のため時期は不明確である。

SK101は、調査区の南東隅で検出した土坑である。搅乱のために規模は不明、深さ0.2mを測り、埋土は灰黄色シルト混細砂、黄灰色細砂混シルトで、瓦器檢が1点のみ出土している。

SK101出土の5は、口径15cm、器高4.5cm、高台径3.5cm

T.P+22.0m

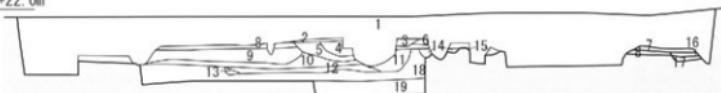
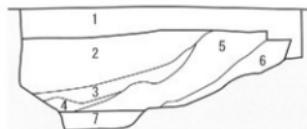


図9 楠・荒田町遺跡第43次調査

SD101～SD104 土層断面図



T.P+22.50m



- | | |
|----------------|----------------|
| 1. 盛土 | 11. 噴灰褐色細砂 |
| 2. 茶褐色小礫混細～中砂 | 12. 暗灰色小礫混細砂 |
| 3. 淡灰黄色細砂 | 13. 淡灰黄色シルト混細砂 |
| 4. 淡灰褐色小礫混細～中砂 | 14. 淡灰褐色細砂 |
| 5. 茶褐色小礫混細砂 | 15. 茶灰色細砂混シルト |
| 6. 黄灰色細砂 | 16. 黄灰色極細砂 |
| 7. 淡灰色細砂 | 17. 黄灰色細砂 |
| 8. 灰褐色小礫混細～中砂 | 18. 黄色小礫混シルト |
| 9. 灰褐色礫混中砂 | 19. 黄色粗砂 |
| 10. 茶褐色小礫混細砂 | |

- | | |
|------------|------------|
| 1. 盛土 | 5. 灰色小礫混細砂 |
| 2. 暗灰色細～中砂 | 6. 黄灰色細砂 |
| 3. 灰色細～中砂 | 7. 淡灰黄色シルト |
| 4. 灰色シルト | |

0 4m

図10 楠・荒田町遺跡第43次調査調査区断面図

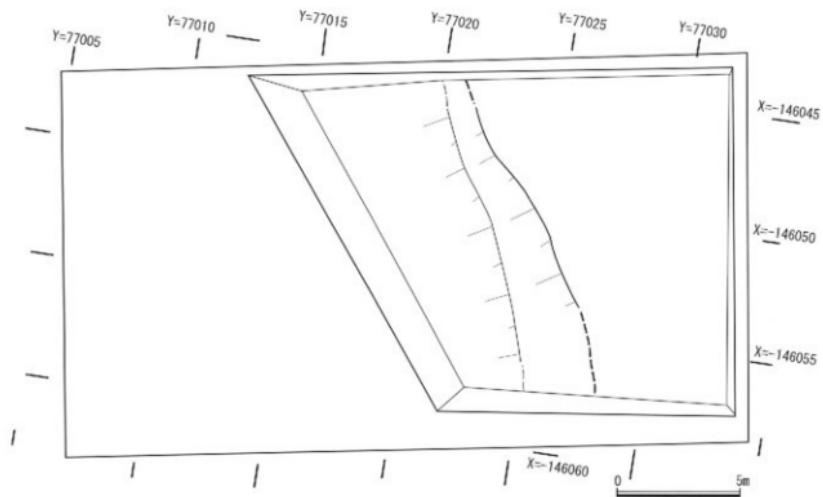


図 11 楠・荒田町遺跡第43次調査溜池範囲確認図

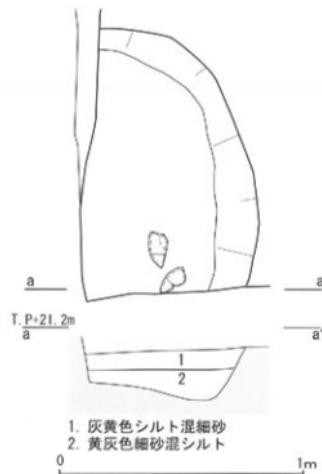


図 12 楠・荒田町遺跡第43次調査SK101 平面・断面図
および遺物出土状況図

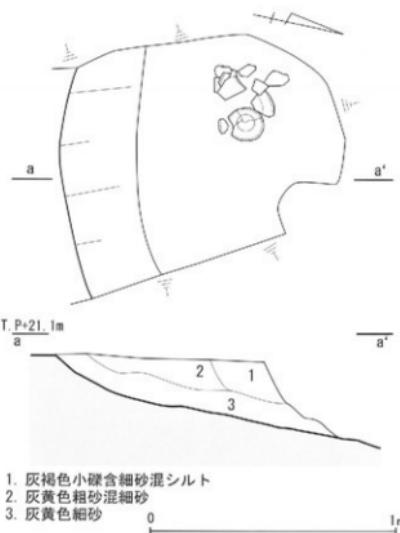


図 13 楠・荒田町遺跡第43次調査SK102 平面・断面図
および遺物出土状況図

を測る瓦器楕である。断面台形状の比較的低い高台を貼り付けている。内面には、わずかに横方向の暗文が確認できる。口径は15cmを保つが、器高が4.5cmと5cmを切る事例であり、時期としては、13世紀中葉～後葉と考えられる。

SK102は、調査区の南東で検出した上坑で、擾乱のため正確な規模は不明である。深さ0.3mを測り、埋土は灰褐色小疊合細砂混シルト、灰黄色粗砂混細砂、灰黄色細砂である。SK101より、やや時期差のある瓦器楕・土師器皿が出土している。

SK102出土の瓦器楕7は、口径15.6cm、器高4.0cm以上を測る。内面には横方向の暗文、内面見込み部分には数条の並行線の暗文が認められる。外面はナデ、ならびにユビオサエによる圧痕が残る。

瓦器楕8は、口径16.0cm、器高4.6cm、高台径5cmを測る。高台は、糸状の粘土を貼り付けた程度の低いもので、高台としての機能は失われている。内面の調整は摩滅のため不明である。

瓦器楕9は、復元径15.8cmを測る。口縁部外面は、ヨコナデを施す。内面の暗文は摩耗が著しく、不明である。

瓦器楕10は、復元径15.6cmを測る。底部内面の見込み部分の暗文は平行線文であり、体部内面中程には螺旋状暗文を施す。

瓦器小皿11は、口径9.5cm、器高1.4cmを測る。底部と口縁部の境が不明瞭で、口縁部のみヨコナデによって仕上げられている。内面には横方向の暗文が認められる。

瓦器小皿12は、口径8.6cm、器高1.8cmを測る。内面は磨耗のため不明である。

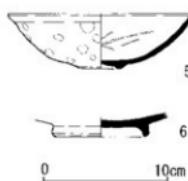
これらの瓦器の一群は、やや時期幅がある可能性もあるが、神戸市域の六甲山南麓において、須恵器の出土が減少し、瓦器の占める割合が増加する時期に相当し、13世紀前葉から中葉と考えられる。

土師器皿13は、口径13.8cm、器高3.0cmを測る。口縁部は外上方に伸び、端部はほぼ面を持たずに丸く收められている。体部上半の外面には1段ナデが施されており、土師器皿の形状からは、13世紀中頃の特徴を備えている。

土師器鍋14は、口径28.4cm、器高7.0cmを測る。

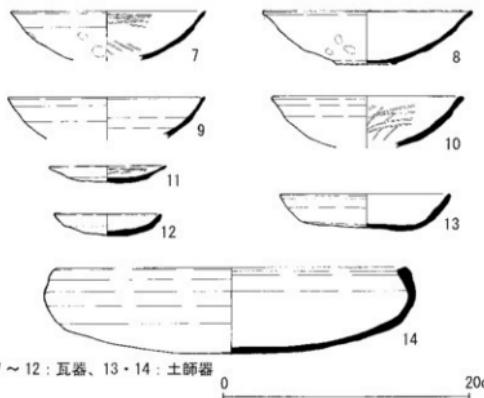
第1遺構面のピットは13基検出した。規模はいずれも直径0.2～0.4m、深さ0.2～0.4mを測る。

埋土は大きく分けて、黄色シルトブロック混褐色細砂、淡茶灰色シルト混細砂、淡黄色細砂に分けることができるが、散在しており、並ぶものはない。また出土した土師器・須恵器はいずれも細片であるため、時期は不明である。



5: 瓦器楕・SK101、6: 灰釉陶器・SD104

図14 楠・荒田町遺跡第43次調査
SK101・SD104出土遺物



7～12: 瓦器、13・14: 土師器

図15 楠・荒田町遺跡第43次調査 SK102出土遺物

第3節 第2遺構面の遺構と遺物

灰褐色小礫混細～中砂を包含層とする下面で、黄色小礫混シルトを基盤とする遺構面である。調査区からは中世の溝1条（SD201）、土坑2基を確認している。

SD201は擾乱により東西に分断されているため、当初別の遺構として掘削していたが、断面の形状、出土遺物により同一遺構と判断した。東西方向のこの溝は、幅6.4m、深さ0.2mを測る。断面は北側、緩やかに傾斜しているのに対し、南側は立ち上がりが急である。

出土遺物はサヌカイト片、大型蛤刃石斧の一部や、古墳時代から中世の上器が出土しており、時期幅がある。ただ、溝の北西側で平安時代前期の土師器環・甕の破片がやまとまって出土している。

15・17・18・21は、土師器皿である。15は、口径11cmを測る小型のもので、17は口径14cmを測る。いずれも口縁端部内面に段を持ち、口縁端部は外反する。18は、口径13.8cm、器高2.7cmを測る。底部から緩やかに外上方に伸びる口縁に、やや外反する端部をもつ。口縁部は2段のヨコナデ調整にて仕上げられている。口縁端部内面先端には細い沈線を施す。21は、口径15.2cm、器高2.9cmを測り、底部から屈曲して外上方に延びる体部を持つ。口縁部はやや外反し、口縁端部内面には沈線を施す。

16・19・20・22～25は土師器環である。16は、口径11.4cm、器高3.2cmを測る。19は、口径16.4cm、器高3.7cmを測る。底部から屈曲して外上方に伸びる口縁に、やや外反する端部をもつ。口縁部はヨコナデ調整にて仕上げられている。20は、口径13.2cm、器高3.4cmを測る。口縁部は外上方にのび、端部は丸く收める。口縁端部外面はヨコナデ調整によって仕上げられているが、あまり明瞭ではない。22・24は、底部から緩やかに外上方に伸びる口縁に、やや外反する端部をもつ。口縁部は2段のヨコナデ調整で仕上げている。口縁端部内面先端には細い沈線を施す。22は、口径14.4cm、器高3.5cm、24は、口径17cm、器高3.3cmを測る。23は、口径15cm、器高3.7cmを測り、底部から内湾気味に緩やかに外上方に延びる体部を持ち口縁部は外反する。25は口径17cm、器高5cmを測る。

26・27・29は高台を持つ土師器椀である。26は、高台が台形を呈し、やや外下方に広がる形状で、径10.2cmを測る。底部から体部にかけては丸みを帯びた器形である。内外面ともに磨きによる調整であるが、摩滅のため一部しか確認できない。27は、高台径13.2cmを測る。高台は台形を呈する。底部からやや屈曲して外上方に伸びる体部をもつ器形である。体部には内・外面ともに回転ナデが施されている。29は高台径6.6cmを測る。

28・30は、須恵器環である。高台径はそれぞれ、28が8.4cm、30が8cmを測る。

31は、須恵器椀である。高台径は、8.0cmである。

32は、断面三角形の高台を持つ黒色土器である。高台径は、8cmを測る。

これらの土師器には、先端内面に沈線が施されるものもあり、やや古い傾向の土器が含まれる。そのため、10世紀から11世紀にかけてのやや時期幅を持つ上器が出土していると考えられられる。

SK201は、調査区の南、池の脇に位置する不定形な形状で、埋土は灰褐色礫混粗砂である。埋土内からは、細片ながら、10世紀から11世紀にかけての土師器・須恵器が出土している。

SK203は、SD201の底から切り込む長辺1.8m、短辺1.2m、深さ0.5mを測る長方形に近い形状で、断面U字状・底面は平坦を呈する土坑である。埋土は灰褐色小礫混細砂、褐黃色極細砂、暗灰褐色シルト混細砂、灰褐色細砂、灰黄色シルト混細砂、黄灰色細砂混シルトである。遺構の時期は、土器が細片のため不明である。

第4節 小結

第43次調査では、調査区の大部分が池であったが遺構面の残存している東側では遺物が多く出土している。第1遺構面の溝や土坑は、13世紀中頃を中心とした時期であり、下層のSD201からの出土遺物の時期から、11世紀を中心とした時期と考えられる。第1遺構面の溝の方向は周囲の現行の地割り方向に近く、下層のSD201の方向は上層の溝の方向から直交した方向となっている。現行の地割りが11世紀代にまでさかのぼるかの問題は別としても、この頃に作成された地割りは、その後の周囲の開発において既成状況として影響を与えたと考えられる。



図16 楠・荒田町遺跡第43次調査 SK201 遺物出土状況並びに断面図

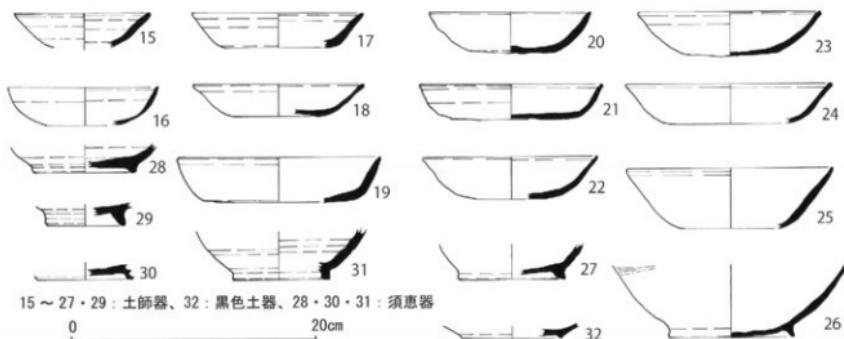


図17 楠・荒田町遺跡第43次調査 SD201 出土遺物



図 18 明治 14 年当時の周辺地形図

第4章 第46次調査

第1節 第46次調査区の位置と基本層序

第46次調査区は、中央区楠町7丁目・神戸大学医学部附属病院のIH本館の北西端にあたり、兵庫県教育委員会によって実施されたH15-1次調査「楠・荒田町遺跡II掲載の遺跡調査番号2003172」(以下県報告Ⅱと省略する)の西に位置する。

調査区は、北地区と南地区に分け、反転掘にて調査を実施した。

基本層序は、110cmの盛土の下に淡褐灰色シルト混じ~粗砂がある。以下の層からが包含層となっており、淡褐灰色シルト混じ~粗砂、明褐灰色シルト混じ~中砂で、いずれにも上器が含まれている。時期としては、平安時代から鎌倉時代にかけてと考えられる。上記の層の下層に当たる暗褐色砂泥シルトの上面が遺構面である。第1遺構面は、鎌倉時代から平安時代にかけての時期である。ただし、暗褐色砂泥シルト上面でSD01等を検出したが、削平等により、南半にはこの層は存在せず、灰褐色シルト混じ細砂上面が第2遺構面、下面が第3遺構面となる。第2・3遺構面は平安時代から奈良時代にかけての時期と考えられる。

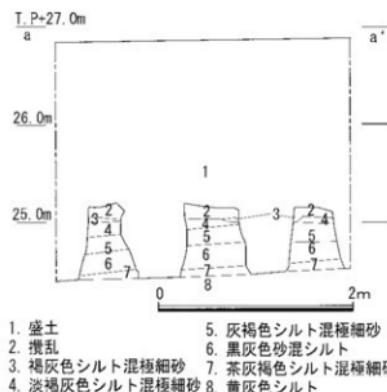


図19 楠・荒田町遺跡第46次調査区南壁基本土層断面図

第2節 第1遺構面の遺構と遺物

SD01 (V字形塹)は、調査地の一部で確認された淡褐灰色シルト混じ~粗砂の下面にて検出した塹で、幅400cm、深さ175cmを測り、北東から南西に通る。

SD02 (U字形塹)は、調査地の一部で確認された淡褐灰色シルト混じ~粗砂の下面にて検出した塹で、幅180cm、深さ170cmを測り、北東から南西に通る。

これらの塹は、以前に確認されている2重塹の続きと考えられる。

この2本の塹はほぼ並行しており、塹の方位はN-70°-Eである。SD02の堆積は断面からは北西侧からの堆積によって埋まっていく過程が観察される。また、遺物の出土状況では、SD01からは北西侧の肩からまとめて多く出土しているのに対して、SD02からは、細片が多く、その量も、SD01に比べて、極端に少ない。今回20mほどの長さを確認したが、第H15-1次調査の事例を含めると、全長約64m分を確認したことになる。また、最終堆積段階であるがSD01とSD02の切り合い関係を断面で確認しており、SD02の堆積後にSD01の堆積があり、最終の埋没はSD01となっている。

溝 (SD03) ~溝 (SD05) は盛土直下で検出している。

溝 (SD03) は、幅80cm、深さ90cmを測り、北東から南西に流れる。この溝は、SD01・02の南にあり、方向もほぼ一致しているが、出土遺物から、溝の時期は幕末と考えられる。

溝 (SD04) は、幅100cm、深さ100cmを測り、北東から南西に流れる。この溝は、SD01・02の南に

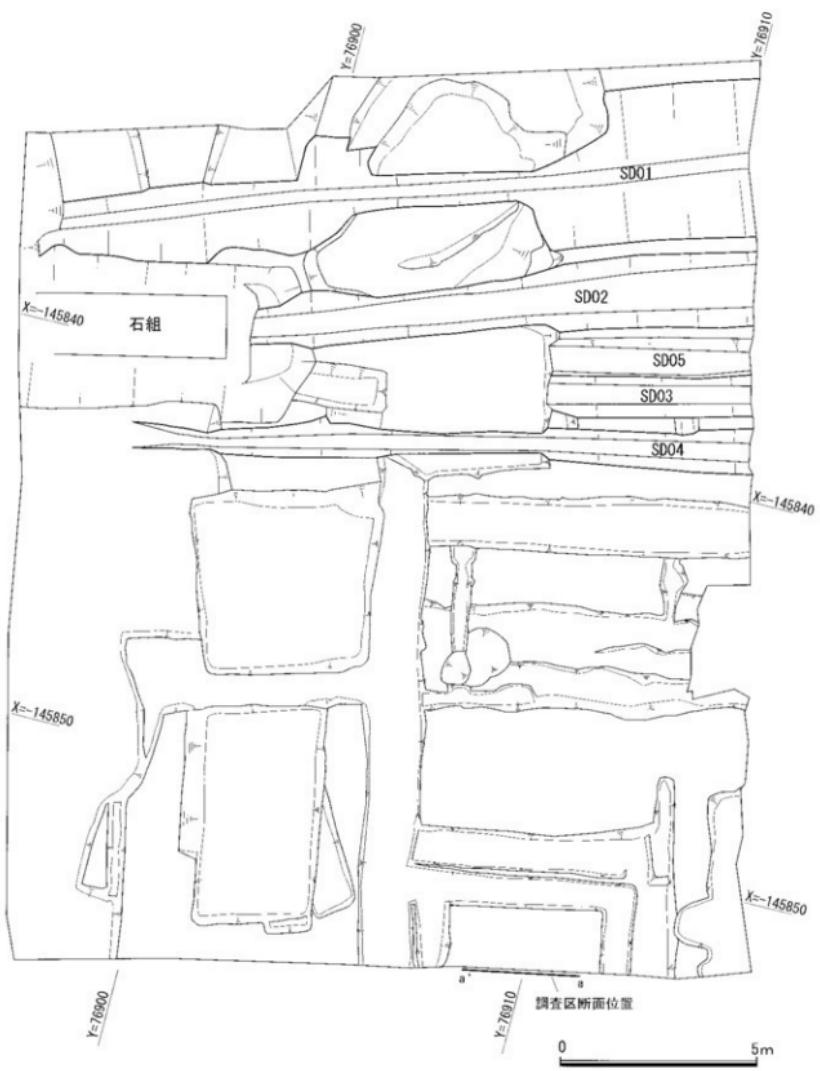
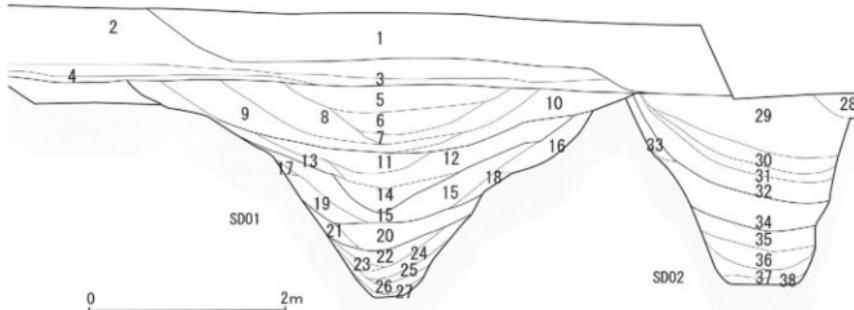


図20 楠・荒田町遺跡第46次調査第1造横面全体図



SD01・02土層断面図層名

- | | |
|-----------------------------|---------------------------|
| 1 盛土 | 21 淡灰褐色中～粗砂 |
| 2 淡褐色シルト混中～粗砂（土壤化） | 22 淡褐色細砂混シルト（黄灰色シルトブロック混） |
| 3 波褐色シルト混細～粗砂（土壤化） | 23 褐色粗砂 |
| 4 明褐色シルト混細～中砂 | 24 黄褐色細～中砂 |
| 5 灰褐色シルト混中～粗砂（小礫含む） | 25 灰褐色中～粗砂 |
| 6 灰褐色細～粗砂（小～中礫含む） | 26 淡青灰色シルト |
| 7 淡灰褐色中～粗砂 | 27 淡黄灰色中～粗砂 |
| 8 淡褐色シルト混細～粗砂 | 28 暗褐色シルト混粗砂 |
| 9 暗褐色シルト混細砂 | 29 黄橙色粗砂（小～中礫含む） |
| 10 淡黄灰色粗砂 | 30 棕褐色小～中礫混粗砂 |
| 11 淡灰褐色細～粗砂（大礫含む） | 31 暗褐色シルト混細～中砂 |
| 12 暗褐色粗砂（中～大礫含む） | 32 淡黄褐色シルト混細～中砂 |
| 13 暗褐色細砂 | 33 灰褐色細砂混シルト |
| 14 灰褐色中～粗砂（シルト含む） | 34 暗褐灰色シルト混細～中砂 |
| 15 黒褐色シルト混細～中砂（淡灰色シルトブロック混） | 35 黑褐色シルト混細～中砂 |
| 16 褐色シルト混細～中砂 | 36 黑灰色細～中砂混シルト |
| 17 黄褐色細～中砂 | 37 黄褐色粗砂 |
| 18 灰褐色シルト混中砂 | 38 黑灰色細砂混シルト |
| 19 淡黄灰色シルト混中～粗砂 | |
| 20 淡褐色シルト | |

図21 楠・荒田町遺跡第46次調査第1還構面 SD01・SD02 土層断面図

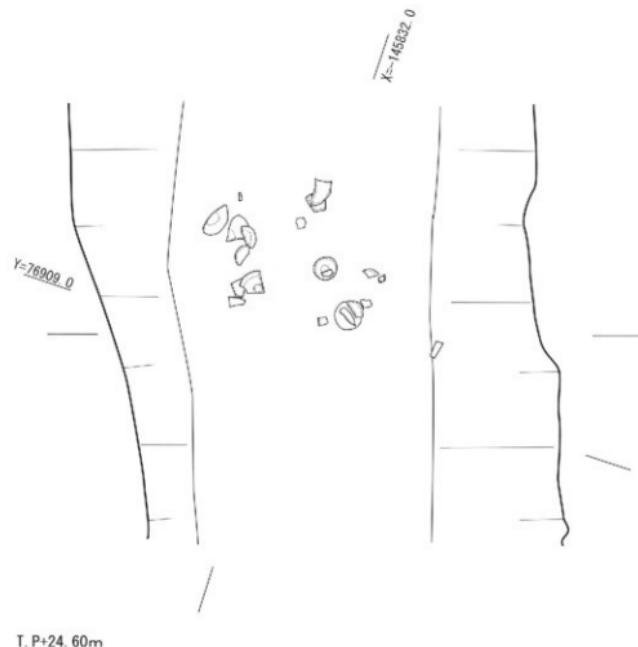
あり、方向もほぼ一致しているが、出土遺物から、溝の時期は幕末と考えられる。

溝(SD05)は、現状で、幅90cm、深さ60cmを測り、北東から南西に流れる。SD03と切り合い関係にあり、SD03に先行するものである。この溝は、SD01・02の南にあり、方向もほぼ一致しているが、出土遺物から、溝の時期は幕末と考えられる。

また、調査区西半で確認している石組は、幕末以後のものである。

SD01 最下層出土遺物としては、土師器皿と瓦器碗がある。

33～40は土師器皿である。33は口径9.0cm、器高1.5cmを測り、底部から屈曲する体部を持ち、体部上半には1段ナデを施す。口縁端部外面は、外傾する面を持つ。34は、口径9.0cm、器高1.5cmを測り、底部から屈曲する体部を持ち、体部上半には1段ナデを施す。口縁端部は丸みをおびており、明確な面を持たない。35は、口径9.1cm、器高1.8cmを測り、底部から屈曲する体部を持ち、体部上半には1段ナデを施す。口縁端部外面には、外傾する面を持つ。36は、口径9.1cm、器高1.3cmを測り、底部から屈曲する体部を持ち、体部上半には1段ナデを施す。口縁端部は丸みをおびており、明確な面を持たない。



T.P+24.60m

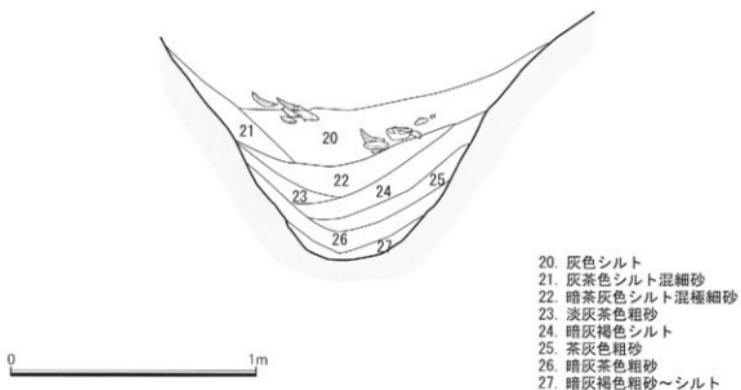


図 22 楠・荒田町遺跡第 46 次調査第 1 遺構面 SD01 最下層遺物出土状況

37は、口径9.5cm、器高2.0cmを測り、底部から屈曲する体部を持ち、体部上半には1段ナデを施す。口縁端部は丸みを帯びており、明確な面を持たない。38は、口径9.2cm、器高1.7cmを測り、底部から屈曲する体部を持ち、体部上半には1段ナデを施す。口縁端部外面は、外傾する面を持つ。

39は、口径10.4cm、器高1.8cmを測り、底部から屈曲する体部を持ち、体部上半には1段ナデを施す。口縁端部外面は、外傾する面を持つ。40は、口径13.8cm、器高2.5cmを測り、底部から屈曲する体部を持ち、体部上半には1段ナデを施す。口縁端部外面は、外傾する面を持つ。

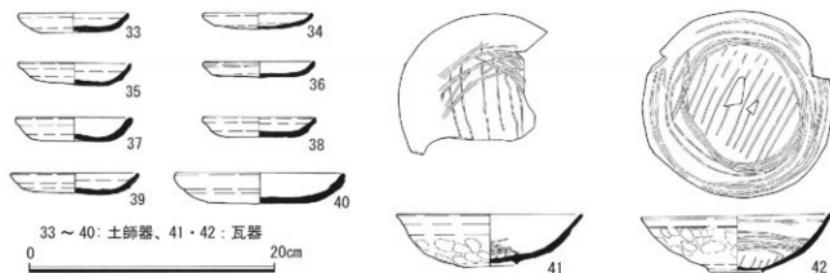


図23 楠・荒田町遺跡第46次調査第1遺構面SD01最下層出土遺物

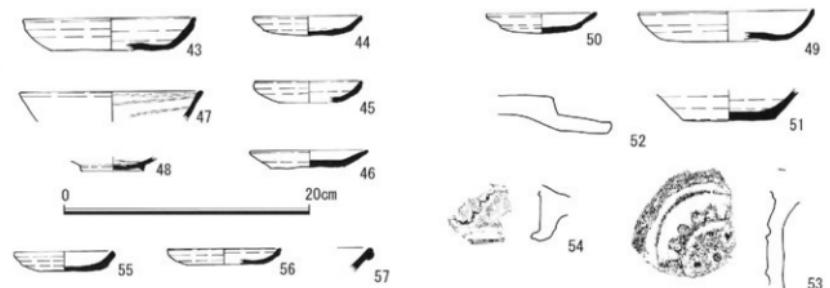
41は、口径15.2cm、器高4.3cmを測る瓦器椀である。底部から緩やかに内湾して立ち上がる体部にやや外反する口縁部を持つ。口縁部外面にはナデを施す。内面の見込み部分にはやや荒い平行線暗文を施す。底部の高台は低い逆三角形を呈するが、一部はひも状に退化している。

42は、口径15.6cm、器高4.8cmを測る瓦器椀である。底部から緩やかに内湾して立ち上がる体部にやや外反する口縁部で、口縁部外面にはナデを施す。内面の見込み部分には平行線暗文を施す。底部の高台は低い逆三角形を呈するが、一部はひも状に退化している。

SD01中層からの出土遺物としては、土師器・瓦器・瓦がある。

43は、口径14.1cm、器高2.6cmを測る土師器皿である。底部から屈曲する体部を持ち、体部上半には2段ナデを施す。口縁端部は丸みをおびており、明確な面を持たない。

44は、口径8.8cm、器高1.6cmを測る土師器皿である。45は、口径8.8cm、器高1.8cmを測る土師器



43～54 : SD01、55～57 : SD02、43～46・49・51 : 土師器
47・48・50 : 瓦器、52～54 : 瓦、55・56 : 土師器、57 : 白磁

図24 楠・荒田町遺跡第46次調査第1遺構面SD01中層・SD02出土遺物

T.P+25.20m

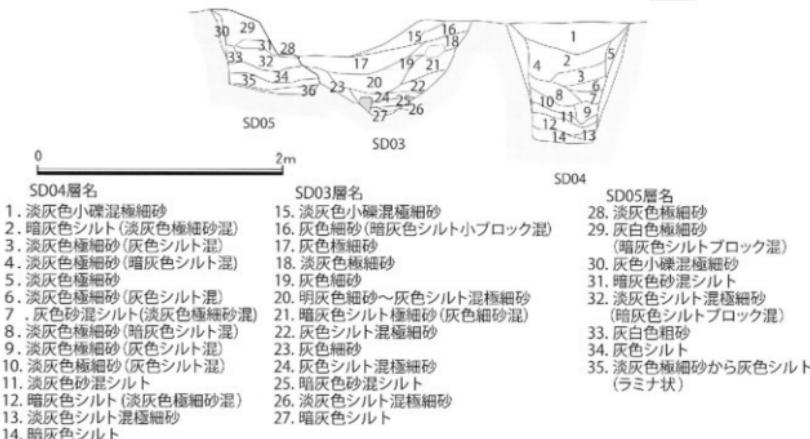


図25 楠・荒田町遺跡第46次調査第1遺構面SD03～SD05土層断面図

皿である。49は口径13.8cm、器高2.6cmを測る土師器皿である。いずれも底部から屈曲する体部を持つ体部上半に1段ナデを施すが、最下層のものより、ナデ幅が狭くなり、口縁部の面取りも不明瞭になる傾向がある。46は、口径9.6cm、器高1.4cmを測る底部糸切り痕の残る土師器皿である。51は、底径7.2cmを測る底部糸切り痕の残る土師器皿である。底部から屈曲して外上方に直線的に延びる体部を持つ。

47は、口径15.0cmを測る瓦器碗である。内面には暗文が認められる。48は、底径5.2cmを測る瓦器碗の底部である。50は、口径9.0cm、器高1.7cmを測る瓦器皿である。口縁部外面には強いナデを施し、体部内面には荒い暗文が認められる。

52は、丸瓦である。内面には布目圧痕が残る。53は、唐草文軒平瓦である。

54は、複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。くぼんだ厨房に珠文を配する。全面に自然釉が付着している。

SD02出土遺物は、細片が多く、出土量の割に図化できるものは少ない。

55は、口径8.2cm、器高1.7cmを測る土師器皿である。体部上半には2段ナデを施す。口縁部は丸みを帯び、明確な面を持たない。56は、口径9.2cm、器高1.3cmを測る土師器皿である。体部上半にはやや幅の狭い1段ナデを施す。口縁部は外形気味に開いており、口縁部外面にはわずかに面を持つ。

57は、口縁部が玉縁状にふくらむ白磁の口縁である。

第3節 第2・3遺構面の遺構と遺物

灰褐色シルト混極細砂上面で確認された第2遺構面では、井戸を確認している。井戸(SE01)は、1辺2mほどの隅丸方形の掘方をもち、深さ400cm以上を測る。出土遺物から、10世紀末と考えられる。

ピットはいずれも直径20～30cmの円形で、10世紀から11世紀にかけての時期と考えられる。

灰褐色シルト混極細砂下面で確認された第3遺構面では、SB01 2間×1間以上の掘立柱建物を検出した。柱間は約90cmと狭く、総柱建物とはならない。井戸(SE01)に柱の一部が切られており、井戸より古い時期の遺構と考えられる。

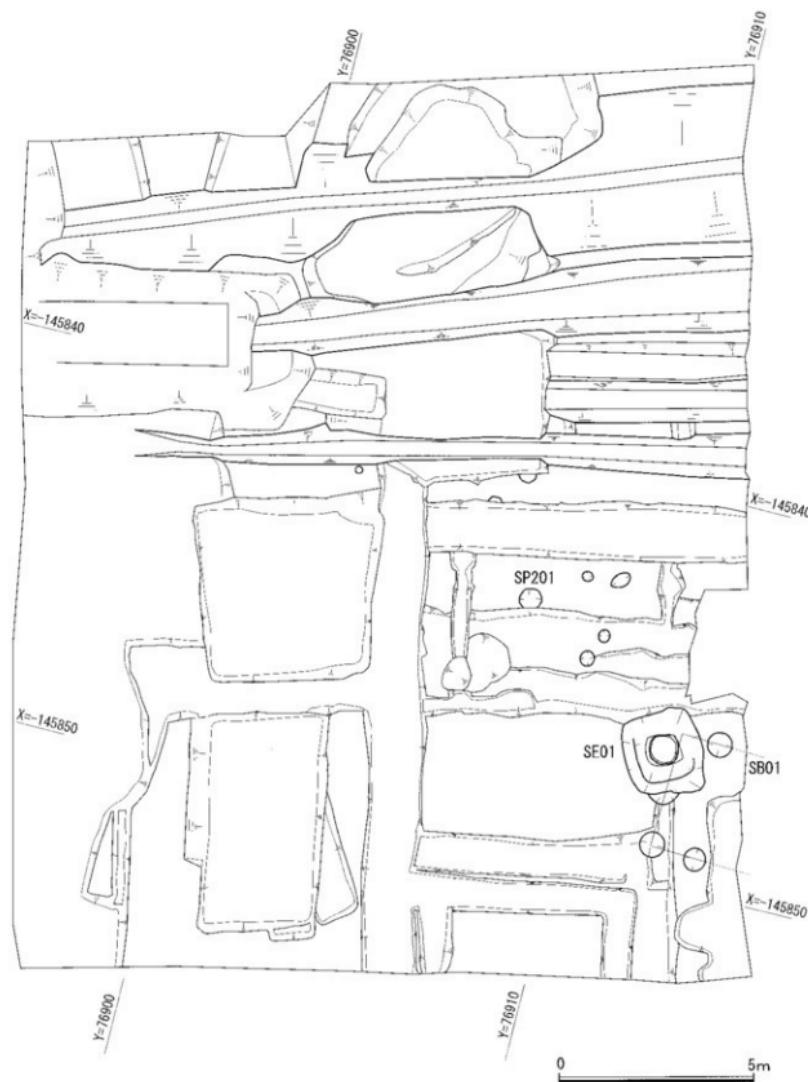


図26 桟・荒田町遺跡第46次調査第2・3遺構面全体図

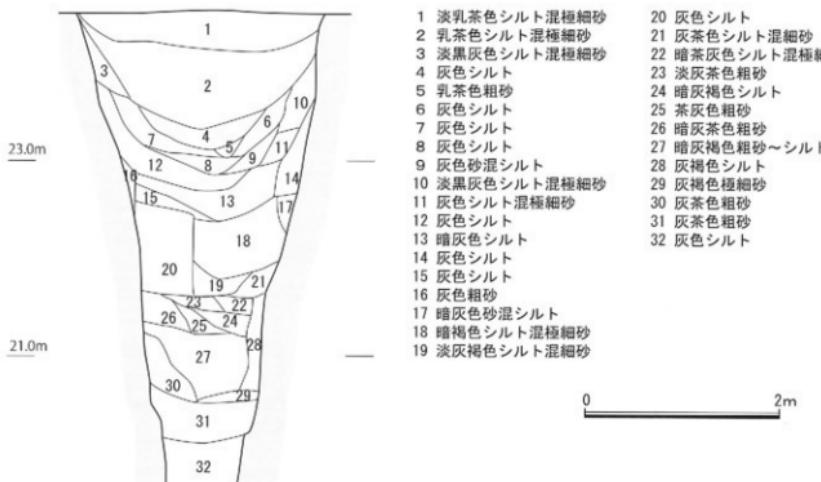


図27 楠・荒田町遺跡第46次調査第2遺構面SE01 土層断面図

SE01からの出土遺物は、土師器と須恵器である。安全面を優先して井戸は完掘していないため、出土遺物はいずれも中間層からの出土となる。56は、口径16.6cmを測る土師器壺である。口縁端部は外反し、内面にはハケメが残る。59～61は、いずれも土師器椀の高台である。それぞれ、59は底径6.8cm、60は、底径8.2cm、61は、底径7.8cmを測る。62は、口径24.4cmを測る須恵器甕の口縁部と思われる。63は、口径25.4cm、64は、口径25.4cmを測る羽釜である。

65・66は、SP201から出土したものである。65は、口径14cm、器高3.6cmを測る土師器椀である。66は、口径15cmを測る黒色土器である。

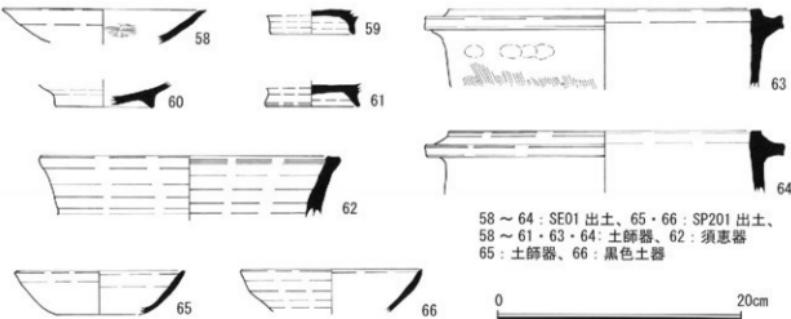


図28 楠・荒田町遺跡第46次調査第2遺構面SE01・第3遺構面SP201出土遺物

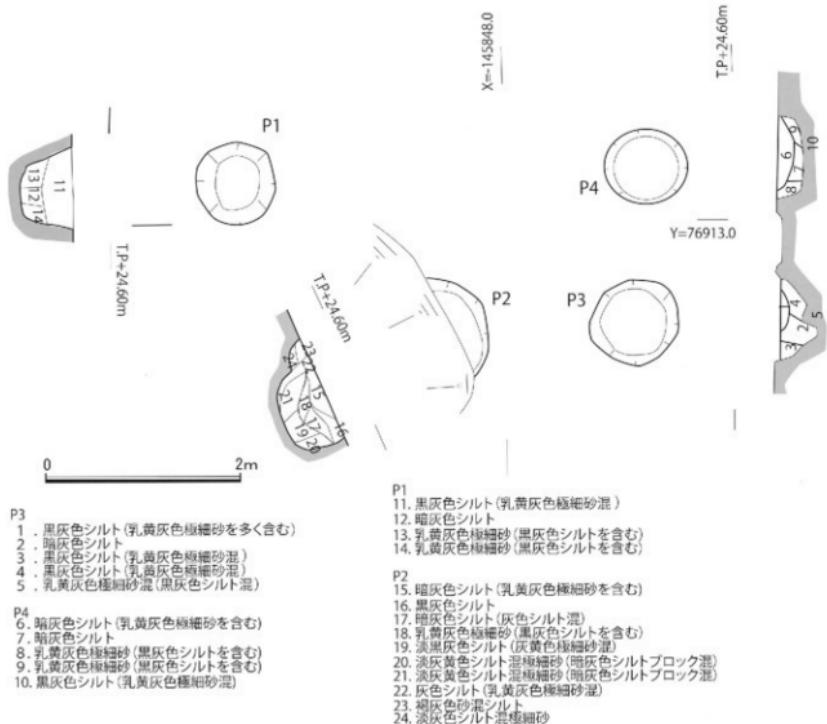


図 29 楠・荒田町遺跡第 46 次調査第 3 造構面 SB01 平面・土層断面図

第4節 小結

今回の調査では、兵庫県の調査で話題を呼んだ、2重塹の続きを検出した。今回の調査において、懸案であった溝の切り合い関係が、最終堆積の段階ではあるが、SD01の方がSD02を切っているのを確認できた。ただ、これらの塹の時期が大いに注目を集めているところであるが、第5章で述べる通り、土師器の年代観からみて、SD01 最下層の遺物群は13世紀前半であり、瓦器自体も口径は15cmを越えるが、器高が5cmを切り、やや低くなる様相を示していることから、12世紀代とするよりは妥当であろう。

さらに、2重塹で示された地割りが幕末までつけ変えられた溝として踏襲されていた点も確認できた。

また、楠・荒田町遺跡第42次調査で検出した11世紀代の遺構が、今回の調査区南半でも確認できている。というより、2重塹の南側では塹と同時期の遺構が確認されていない。

これは、この周囲を、福原遷都後に開発し、区画整備をおこなったものの、本格的に使用を開始する前に遷都となつたために土地利用が部分的にとどまり、土地所有者の変更後には、溝だけが残り、何度か改修されたものの、埋められてしまったとも考えられる。

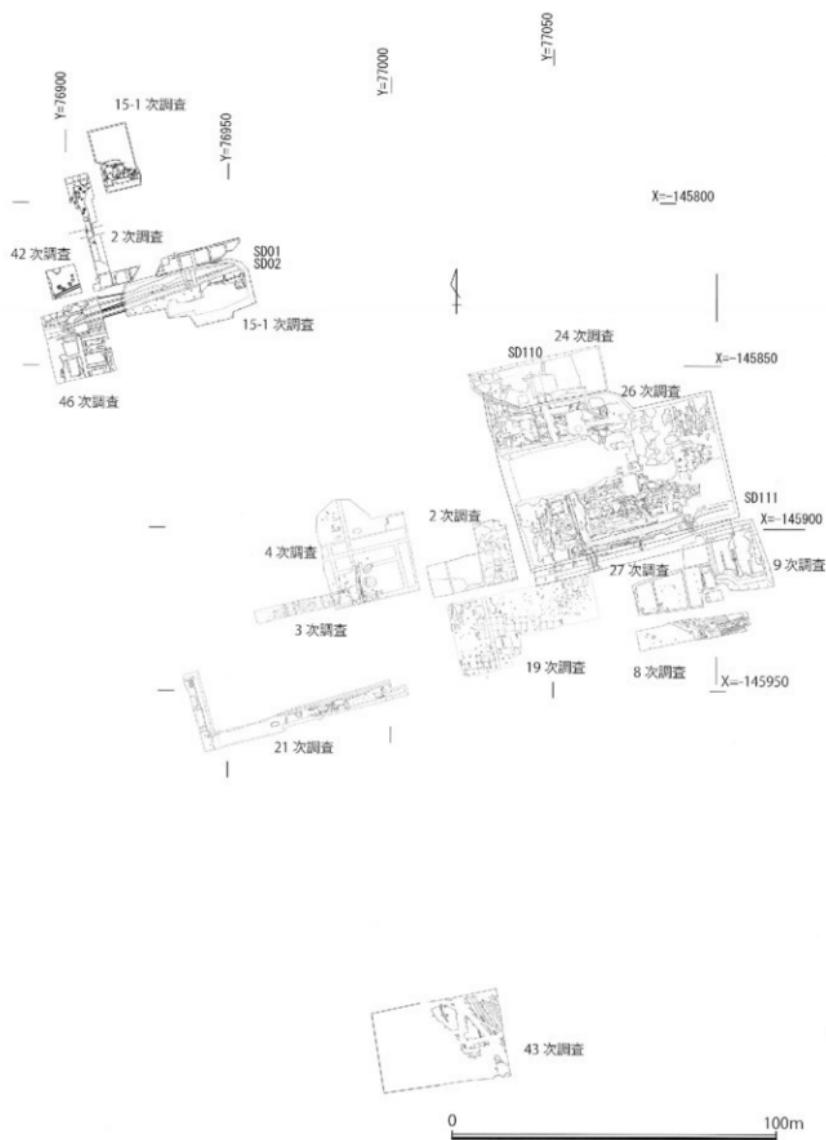


図 30 楠・荒田町遺跡調査地周辺遺構合成図

第5章 自然科学分析

第1節 楠・荒田町遺跡第43次調査の花粉分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、楠・荒田町遺跡で検出された池周辺の古環境復元を目的として、花粉分析を実施する。なお、検出された池は、中世の造構を切り込んで構築されており、明治19年頃の假製地形図にも記載されていることから、中世後半以降に構築され、埋められた時期は新しいことが確認されている。

1. 試料

試料は、池底部の埋土である4層・7層および池斜面に堆積する6層（試料3）から採取された3点である（図31）。分析層準の層相は、4層（試料1）が灰色粘土、7層（試料2）が暗灰色粘土・灰色粗砂の互層、6層（試料3）が黄灰色細砂からなる。

2. 分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリシス（無水酢酸9、濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロー

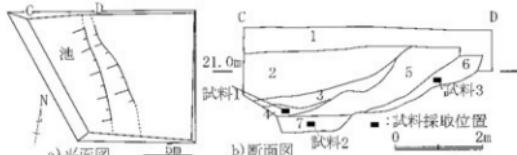


図31 楠・荒田町遺跡第43次調査地点の位置・断面図

スの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で産出率を算出し図示する。

3. 結果

結果を表1・図32に示す。池底の堆積物4層・7層（試料1・2）は花粉化石が多産し、保存状態も良好である。一方、池岸斜面部の6層（試料3）は花粉化石がほとんどみられない。

4層・7層（試料1・2）は組成が類似し、大部分が木本花粉である。木本花粉のほとんどがマツ属複雑管束型であり、マツ属全体を合わせると木本花粉化石の80～90%を占める。その他の木本花粉は、スギ属、コナラ属、エノキ属、クノキ属などが見られるが、いずれも低率である。

草本花粉は全体的に低率である。草本花粉の中ではイネ科がやや多く、その中にはイネ属の花粉化石を含む。また、7層（試料2）からは2個体であるが、大型で表面模様が細かなイネ科花粉が含まれる。このような形態をもつイネ科花粉として、トウモロコシ、ジュズダマ、ハトムギなどがあげられる（中村、1980等）。その他、栽培植物として、ソバ属が産出する。また、ヒシ属、フサモ属、ガガブタ、サンショウモ、

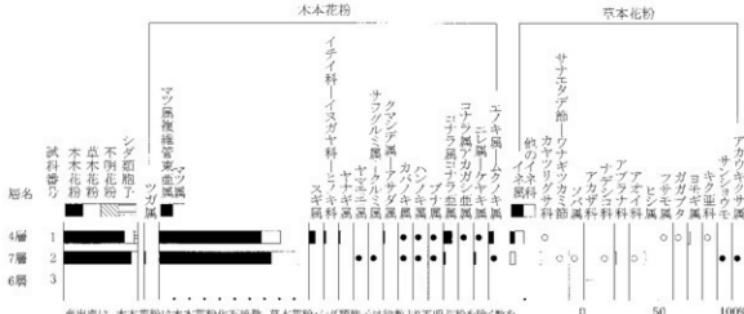


図32 花粉化石群集の層位分布

アカウキクサ属といった水生植物も産出する。

4. 考察

池埋土の花粉化石群集は、木本花粉が高率を占め、その中でマツ属花粉が優占することが特徴である。このことから、池埋上下部形成期には、池近辺ないし、周辺にマツ属が生育する領域が存在したことが推定される。マツ属は、風媒花で花粉生産量も莫大であり、翼を持つため飛散しやすいため、実際の植生量より過大評価される傾向がある(Faegri and Iversen, 1989)。今回の結果も、過大に評価されているともと思われる。

近世の六甲山南麓は、歴史時代の絵図等をもとにした植生景観の復元調査によれば、マツ林が点在するものの、大部分がはげ山であったと考えられている(松下, 1992)。また、本地域の扇状地間低地に位置する本山中野遺跡の花粉分析結果では、近世層準においてマツ属花粉が急増している(古環境研究所, 1995)。一方、山地に位置するイモリ池では、当該期と推定される層準においてマツ属が著しく高率となっている(那須, 1980)。これらのことから、近世の六甲山南麓では、マツ属が主体となる貧弱な林分が存在したことが推定され、今回の結果も同調的結果として認識される。ただし、マツ属が主体となる林分の成立については、古代以降の人間活動と密接に関わっている可能性があり、今後歴史的な評価をふまえ評価していくことが必要である。

一方、草本花粉をみると、水生植物の種類が多数認められる。産出した種類は、浮葉植物のヒシ属・ガガブタ、浮水植物のサンショウモ・アカウキクサ属、沈水植物のフサモ属である。こ

表1 花粉分析結果

種類	試料番号		
	1	2	3
木本花粉			
ツガ属	-	3	-
マツ属複数管束亞属	180	206	-
マツ属	34	54	-
スギ属	11	-	-
イチイ科—イヌガヤ科—セノキ科	3	-	-
ヤナギ属	3	-	-
ヤマモモ属	-	1	-
サワグルミ属—クルミ属	-	1	-
クマシダ属—アサクサ属	3	-	-
カバノキ属	2	1	-
ハンノキ属	2	2	-
ブナ属	1	1	-
ココナツ属—コナラ属	15	3	-
ココナツ属—アガシ属	1	-	-
ニレ属—ケギ属	1	4	-
エノキ属—ムクノキ属	9	1	-
草本花粉			
イネ属	10	1	-
他のイネ科	20	10	-
カヤツリグサ科	2	4	-
サンエタデ類—ウナギツカミ属	-	1	-
ソバ属	-	1	-
アカザ科	-	-	1
ナデシコ科	-	2	-
アブラナ科	-	4	-
オオイ科	-	1	-
ヒシ属	-	4	-
フサモ属	1	-	-
ガガブタ	1	-	-
ヨモギ属	5	-	-
キク酢酸	1	-	-
不明花粉	1	-	-
シダ類胞子	-	1	2
合計			
木本花粉	265	277	0
草本花粉	40	28	1
不明花粉	1	0	0
シダ類胞子	16	3	2
総計(不明を除く)	321	308	3

これらは池沼などで普通にみられる水生植物であり、当時の池内に水深や水質に応じて分布していたとみられる。また、栽培植物のイネ属とソバ属も産出し、池周辺での栽培に由来するとみられる。なお、イネ科には多くの栽培種が含まれるが、花粉化石の形態からこれらを区別することは難しい。また、トウモロコシなどにみられる大型のイネ科花粉が産出したが、ジュズダマ等水辺に生える野生種も同様な形態を持つため、栽培に由来するとは言い切れない。

引用文献

Faegri K & Iversen Johs., 1989, Textbook of Pollen Analysis, The Blackburn Press, 328p.

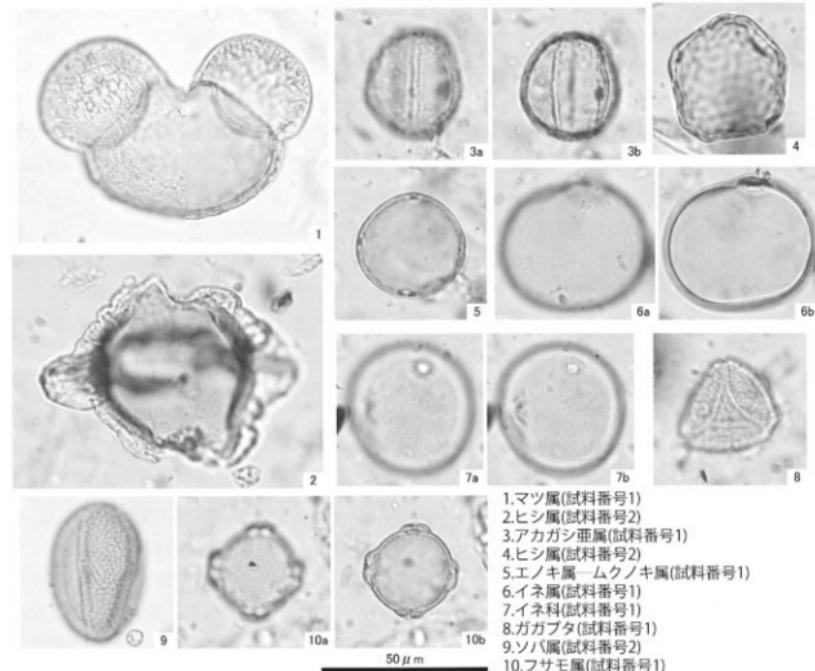
古環境研究所（1995）自然科学分析、「神戸市東灘区本山中野遺跡—道路状遺構の調査一」，六甲南麓遺跡調査会，p.66-78。

松下 まり子, 1992, 六甲山系の変遷, 「六甲山の植物」, 神戸新聞総合出版センター, 168-177。

中村 純, 1980, 日本産花粉の標微Ⅰ・Ⅱ, 大阪市立自然史博物館収蔵試料目録 第12集・13集, 大阪市立自然史博物館

那須孝悌 (1980) 花粉分析からみた二次林の出現, 関西自然保護機構会報, 4, p.3-9

挿図写真図版1 楠・荒田町遺跡第43次調査花粉化石



第2節 楠・荒田町遺跡第46次調査の古環境分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

楠・荒田町遺跡は、旧湊川東岸の六甲山系から派生する丘陵端部の段丘上に位置し、縄文時代から中世に及ぶ複合遺跡である。今回の調査では、中世の塹や近世の溝が検出されている。今回は、これらの塹や溝の用途や埋没過程、当時の環境を知る目的で、珪藻分析、花粉分析、寄生虫卵分析、植物珪酸体分析、種火分析を実施する。

1 試料

分析調査は、中世の塹 SD01・SD02 と、近世の溝 SD03・SD04について実施する。各塹・溝埋土から不搅乱柱状試料が採取されており、層相観察の上、各分析層準を検討・採取した（図1）。

各塹・溝埋土は、人為的營力により形成された土壤ブロックからなるブロック土層、塹・溝が掘り込まれている基盤層（いわゆる地山）からの崩落した堆積物、塹・溝周辺から再堆積した土壤などからなる。各塹・溝埋土の分析試料採取層準の層相の概要を以下に示す。

SD01：1層は現代の客土。2層～14層は泥質砂マトリクスを伴い、淘汰が悪く、角～亜角でブロック状、板状ないし刃状の形をなす最大粒径数cmまでの、やや腐植を含む砂質泥土壤、褐灰色を呈する砂質泥のブロック土層からなる。このうち、3層、12層、5層の上部はやや腐植に富み、土壤生成が進行している状況が窺える。15層は下部に黄褐色ブロック上、円錐～亜角でブロック状の砂質泥ないし泥質砂ブロックが混じる、暗褐色を呈する、やや腐植質な亜角～亜円で腐植質砂質泥（土壤）ブロックからなる。20層は下部に溝の基盤をなす堆積物ブロックや大礫が混じる、やや腐植質砂質泥のブロック上からなる。22層は炭化物・細礫が混じる、著しく擾乱された褐灰色を呈する砂質泥からなる。23層・24層は、溝斜面から崩落したとみられる基盤をなす堆積物ブロックからなる。25層は周囲から流入したとみられる葉理構造が確認される泥質砂からなる。26層は溝斜面から崩落したとみられる基盤をなす堆積物ブロックからなる。27層は葉理構造をなす泥質層を挟在する砂質泥からなる。本層下部には刃状、ブロック状の2～3cm程度までの基盤をなす堆積物ブロックが混じる。以上の層相から、1層～14層は人為的營力により形成された堆積物、15層～27層は溝加工期の堆積物と機能期に周辺から流入しない崩落した周辺土壌・基盤をなす堆積物などからなる。

SD02：1層～10層は、砂質泥ないし泥質砂をマトリクスを伴う、刃状、ブロック状、板状の不規則に配置する黄褐色砂質泥ないし腐植質砂質泥（土壤）からなるブロック上からなる。8層最下部には周囲より流入したとみられる葉理をなす泥質砂を挟在する。溝底の基盤をなす堆積物は花崗岩の大礫が混じる、淘汰不良の泥質砂からなる。本溝は主に人為的營力により形成された堆積物で充填されている。

SD03：1層は砂質泥のマトリクスを伴う、亜角～円錐でブロック状の砂質泥からなるブロック土層、2層は亜角でブロック状の砂質泥のブロック土層からなる。3層は亜角～円錐でブロック状の黒褐色土壤ブロックからなるブロック土層。5層は黄褐色砂質泥のマトリクスを伴う、風化花崗岩や砂質泥ブロックからなるブロック土層。6層は上部・下部に細分され、下部が葉理構造の発達する砂質泥、上部が葉理構造が発達する泥質砂からなる。7層は砂質泥、黒褐色土壤ブロックが混じる。溝底の基盤をなす堆積物は花崗岩の大礫が混じる、淘汰不良の泥質砂からなる。扁状地性堆積物とみられる。以上の層相から本溝埋土のうち1層～5層は人為的營力により形成された堆積物で、3層では土壤生成の進行が認められる。6層～7層は溝機能期に形成され

た周辺から流入した堆積物からなる。

SD04：1層～14層は砂質泥ないし泥質砂をマトリクスとする、亜角～亜円でブロック状の砂質泥や土壤ブロックからなるブロック土層からなる。人為的荷重により形成された堆積物とみられる。

2 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法（4時間放置）の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではないが、全面を走査する）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986, 1988, 1991a, 1991b）、渡辺ほか（2005）、小林ほか（2006）、Witkowski et al.（2000）などを参照し、分類基準は、Round, Crawford &

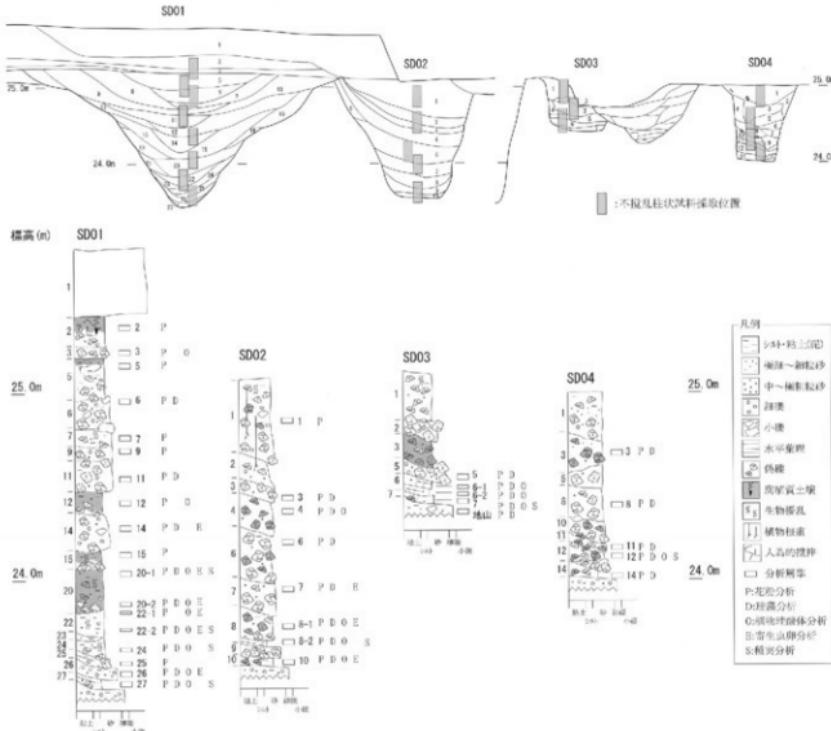


図 33 楠・荒田町遭跡第46次調査地点の層序および分析層準

Mann(1990) に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は、柳沢(2000) に従う。

各種類の生態性は、Vos & de Wolf(1993) を参考とするほか、塩分濃度に対する区分は Lowe(1974) に従い、真塩性種(海水生種)、中塩性種(汽水生種)、貧塩性種(淡水生種)に類別する。また、貧塩性種については塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能も示す。産出個体数 100 個体以上の試料は、産出率 3.0% 以上の種類について主要珪藻化石群集の層位分布図を作成するほか、淡水生種の生態性も 100 個体以上の試料について図示する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、海水生種(真塩性種)～汽水生種(中塩性種)は小杉(1988)、淡水生種(貧塩性種)は安藤(1990)、陸生珪藻は伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性は渡辺ほか(2005) の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析・寄生虫卵分析

試料約 10g を秤取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重 2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物粒の溶解、アセトリシス(無水酢酸 9、濃硫酸 1 の混合液)処理によるセルロースの分解、の順に物理・化学的処理を施す。処理後の残渣から一部を取り、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、同定を行う。結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の分布図として表示する。

寄生虫卵分析は、金原・金原(1992) 等を参考にした。ただし、試料の状況や概査結果から寄生虫卵の数が少ないと判断されたことから、花粉分析に準じた手法を取り入れながら寄生虫卵の濃集を行なう。

試料 10cc を正確に秤取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重 2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物粒の溶解、の順に物理・化学的処理を施す。処理後の残渣を定容してから一部を取り、グリセリンで封入してプレパラートを作成する。分析残渣中の寄生虫卵量を測定するため分析量や分析残渣量、プレパラート作成量などを精密に測定し、1ccあたりの含量が求められるようにする。結果は同定・計数結果の一覧表で示す。

(3) 植物珪酸体分析

各試料について、乾燥重量を秤量した後、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタンクスステン酸ナトリウム、比重 2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部細胞由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2010)の分類を参考に同定・計数する。結果は、植物珪酸体含量の一覧表と層位分布図として示す。各分類群の含量は 10 の位で丸め(100 単位にする)、合計は各分類群の丸めない数字を合計後に丸めている。また 100 個/g 未満は「<100」で表示する。

(4) 種実同定

試料 50cc を水に浸し、粒径 0.5 mm の篩を通して水洗した。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼立体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実遺体を抽出した。種実遺体の同定は、現生標本と石川(1994)、中山ほか(2000) 等との対照より実施した。炭化材は、70°C 48 時間乾燥後の重量と最大径を表示した。分析後は、種実遺体を 70% 程度のエタノール溶液を入れた容器中で保存した。

3 結果

(1) 珪藻分析

結果を表 1、図 2 に示す。珪藻化石の産出頻度は SD03 の試料 5、地山、SD04 の試料 11、12、14 の 5 試

料が少なかった他は、堆積環境を検討する上で有意な量の珪藻化石が産出する。完形殻の出現率は、SD01が60%～70%と化石の保存状態が比較的良好だったが、SD02、SD03、SD04の各試料は50%前後である。産出分類群数は、合計で52属152分類群である。遺構別に珪藻化石群集の特徴を述べる。

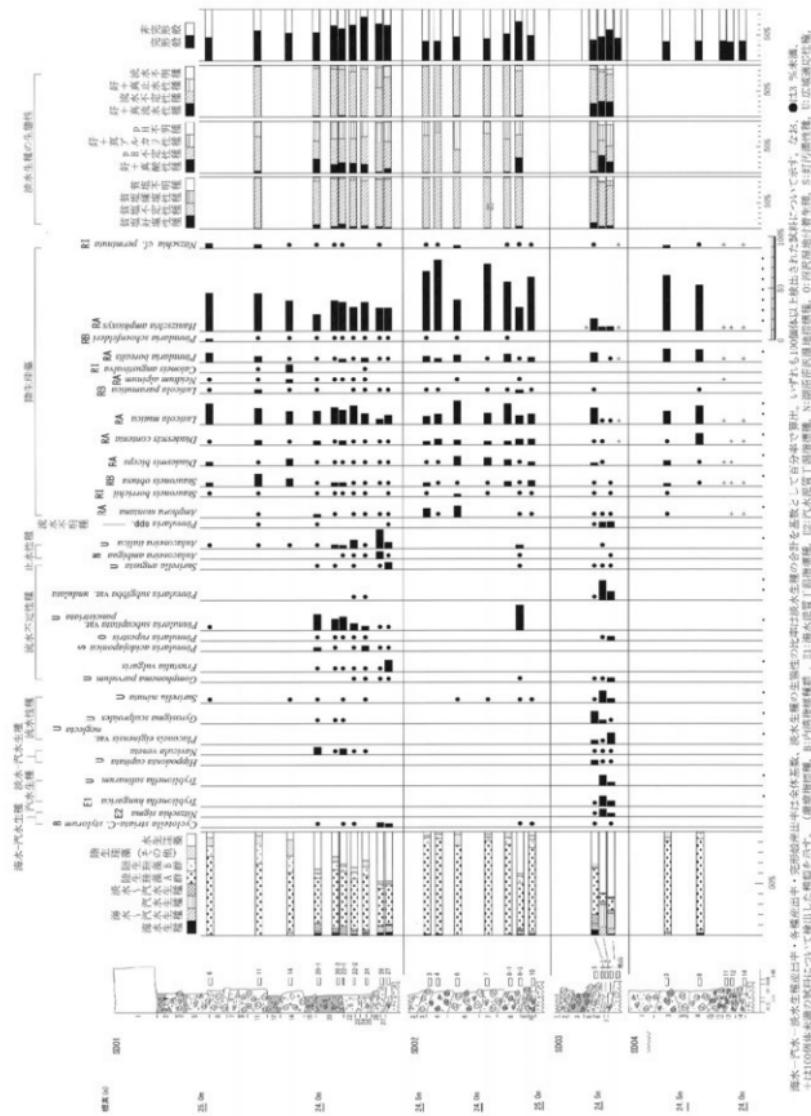


図 34 主要珪藻化石群集の層位分布

海水-淡水一帯水生環境の化石は、各地域の出土する、定形殻の由来と、海水を主生息地の合計を100%として百分率にして表示している。いずれも100個体以上出土した化石について示す。なお、●は化石の出現層、○は既述層地層。

・ SD01

本遺構は、埋土に含まれる珪藻化石の生態的特徴に基づくと、4 区分（試料 27、試料 26、試料 24～20-1、試料 14～6）される。

溝の底に堆積する試料 27 は、淡水生種（以下、水生珪藻と言う）が約 50%、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が約 40%、海水へ（水生種が約 10% 産出する。淡水生種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応性）の特徴は、貧塩不定性種、pH 不定性種と好+真アルカリ性種、流水不定性種が多産する。主要種は、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻 A 群の *Hantzschia amphioxys* が約 20% 産出し、同じく陸生珪藻 A 群の *Luticola mutica*、流水不定性で付着性の *Frustulia vulgaris* がそれぞれ約 10% 産出する。これに次いで、流水不定性で付着性の *Suriella angusta*、止水性で浮遊性の *Aulacoseira italica*、それに海水～汽水生で内湾指標種の *Cyclotella striata-C. stylorum*などを伴う。

試料 26 は、試料 27 と同様な産状を示し、水生珪藻が約 50%、陸生珪藻が約 40% 産出し、海水へ（水生種が約 10% 産出するが、淡水生種の生態性では好+真止水性種が増加する点で違いがある。主要種も、陸生珪藻に関しては同様な産状を示すが、水生珪藻に関しては、止水性で浮遊性の *Aulacoseira italica* が約 20% 産出、湖沼沼澤湿地指標種の *Aulacoseira ambigua* が増加する点で違いが認められる。

試料 24～20-1 になると、陸生珪藻が増加し、約 70% を占める。これに対して、水生珪藻は減少し、淡水～汽水生種を少量伴う。淡水生種の生態性は、貧塩不定性種、pH 不定性種と好+真アルカリ性種、流水不定性種が多産する。主要種は、陸生珪藻 A 群の *Hantzschia amphioxys* が約 25% 産出し、同じく陸生珪藻 A 群の *Luticola mutica* が約 15% 産出する。水生珪藻では、流水不定性で付着性の *Pinnularia subcapitata* var. *paucistriata* が約 15% 産出し、淡水～汽水生で付着性の *Navicula veneta*、流水不定性で付着性の *Pinnularia acidojaponica*などを伴う。

試料 14～6 は、陸生珪藻 90% 以上を占めることが特徴である。主要種は、陸生珪藻 A 群の *Hantzschia amphioxys* が約 30% 産出し、同じく陸生珪藻 A 群の *Luticola mutica* が約 15% 産出する。これに付随して、陸生珪藻 B 群の *Stauroneis obtusa*、陸生珪藻 A 群の *Diadesmis biceps*、*Diadesmis contenta*、*Pinnularia borealis*などを伴う。

・ SD02

6 試料（試料 3、4、6、7、8、10）とも珪藻化石群集が近似しており、陸生珪藻（とくに陸生珪藻 A 群が優占）が大部分を占める。特徴は、陸生珪藻 A 群の *Hantzschia amphioxys* が 50% 以上と優占し、同じく陸生珪藻 A 群の *Luticola mutica* が 10～20% 産出する。これに付随して、陸生珪藻 A 群の *Diadesmis biceps*、*Diadesmis contenta*、*Pinnularia borealis*などを伴う。

・ SD03

珪藻化石が産出した試料 7、6-2、6-1 は、それぞれ群集に多少の違いが見られる。

試料 7 は、水生珪藻が約 65% と多産し、これに次いで、陸生珪藻が約 15%、（水生種が約 15% 産出する。淡水生種の生態性は、貧塩不定性種、好+真酸性種～好+真アルカリ性種、流水不定性種と好+真流水性種が多産する。主要種は、好流水性で付着性の *Placoneis elginensis* var. *neglecta*、流水不定性で付着性の *Pinnularia subgibba* var. *undulata* がそれぞれ約 10% 産出し、好流水性で付着性の *Suriella minuta*、流水不定性で付着性の *Gomphonema parvulum*、流水不定性で沼澤湿地付着生種の *Pinnularia rupestris*などを伴う。また、塩分濃度の高い汽水域に生息する *Tryblionella hungarica*、*Tryblionella salinarum*、*Nitzschia sigma* なども産出する。

試料 6-2 は、生態性の特徴は前試料の試料 7 に近似するが、産出割合に違いが認められる。流水不定性で付着性の *Pinnularia subgibba* var. *undulata* が約 20%と多産し、好流水性で付着性の *Surirella minuta*、汽水付着性の *Tryblionella hungarica*、*Tryblionella salinarum*、*Nitzschia sigma* がそれぞれ約 10% 産出する。

試料 6-1 は水生珪藻が約 30%に減少し、陸生珪藻が約 50%に増加する。また、淡水～汽水生種も約 10% 産出する。主要種は、陸生珪藻 A 群の *Luticola mutica*、*Pinnularia borealis*、*Hantzschia amphioxys* がそれぞれ 15 ~ 10% 産出する。水生珪藻では、好流水性で付着性の *Gyrosigma scalpoides* が約 10% 産出する。これに付随して、好流水性で付着性の *Placoneis elginensis* var. *neglecta*、淡水～汽水生で付着性の *Hippodontia capitata*などを伴う。化石の少なかった地山、試料 5 は、陸生珪藻が多い傾向がある。

・ SD04

珪藻化石が産出した試料 8、3 は、群集が近似しており、陸生珪藻（とくに陸生珪藻 A 群が優占）が大部分を占める。特徴は、陸生珪藻 A 群の *Hantzschia amphioxys* が 50% 前後と優占し、同じく陸生珪藻 A 群の *Luticola mutica*、*Pinnularia borealis* が 10 ~ 15% 産出する。これに付随して、陸生珪藻 A 群の *Diadesmis biceps*、*Diadesmis contenta*などを伴う。化石の少なかった試料 14、12、11 は、陸生珪藻に限られる傾向がある。

(2) 花粉分析・寄生虫卵分析

花粉分析結果を表2、図3に示す。花粉化石が比較的多く産出したのは SD3 の試料 6-1、6-2、7 の 3 試料のみで、他の試料からはほとんど検出されない。また、いずれの試料も分析後の残渣は少なく、花粉の保存も悪かった。また、寄生虫卵分析では、堆積物あたりの花粉量を計算したが、いずれも 1ccあたりの含量が一桁台である。低湿地の花粉分析結果では、普通 1ccあたり数千から数万になることから、かなり少ないといえる。わずかに産出する種類は、SD3 の 6-1、6-2、7 の 3 試料で多産する種が中心である。

SD3 の試料 6-1、6-2、7 の 3 試料の組成は、いずれも類似した組成を示す。これら 3 試料も、他の花粉化石が少なかった試料同様、保存状態が悪い。木本花粉の割合が高いのが特徴で、その中でもマツ属複雑管束並属の割合が圧倒的に多い。その他の木本花粉では、モミ属、ツガ属、トウヒ属、スギ属などがみられるものの、種類数が少なく、単調な組成である。草本類ではイネ科やカヤツリグサ科、ヨモギ属がみられるが、いずれも低率である。

寄生虫卵分析の結果は、いずれの試料も寄生虫卵は検出されなかった。

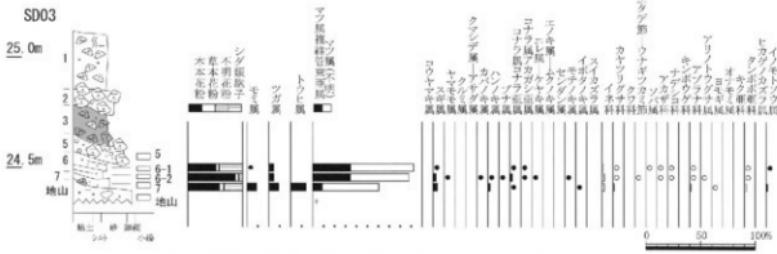
(3) 植物珪酸体分析

結果を表3、図4に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるが、産出する珪酸体は保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下に、各遺構の産状を述べる。

・ SD01

堆積物中の植物珪酸体含量には、層位的な変化が見られる。27 層では約 1.8 万個/g であるが、上位の 26 層では 1,500 個/g 程度に減少し、さらに上位の 24 層から 20-1 層では増加して約 1.9 万個/g となる。12 層では約 1.0 万個/g に減少し、3 層では約 1.9 万個/g となる。植物珪酸体の産状は、下位から上位にかけて同様であり、メダケ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、スキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亞科などが認められる。

また、27 層で栽培植物であるイネ属がわずかに検出され、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の含量が 100 個/g 未満である。芻（穎）に形成される穎珪酸体も検出される。24 層から上位では連続的に検出され、20-2 層や 20-1 層で短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体の含量が増加して 1,000 個/g 前後となり、12 層の短細胞珪酸体が約 200 個/g に減少するものの、機動細胞珪酸体の含量が約 800 個/g となる。3 層では、短細胞珪酸体が



出没率は、木本花粉は木本花粉化石数、草木花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基準として百分率で算出。
なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

図 35 花粉化石群集の層位分布

約 900 個/g、機動細胞珪酸体が約 2,000 個/g となる。穎珪酸体や短細胞列も見られる。

20-1 層や 3 層では、オオムギ族の短細胞珪酸体も認められる。

• SD02

埋積物中の植物珪酸体含量は、10 層から 8 層にかけて約 1.2 万個/g から約 8,500 個/g に減少するが、4 層では約 1.6 万個/g に増加する。

植物珪酸体の産状は SD01 と同様であり、メダケ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。

イネ属も検出され、10 層で産出が目立つ。10 層では短細胞珪酸体が約 900 個/g、機動細胞珪酸体が約 1,300 個/g であり、穎珪酸体や短細胞列の検出も多く。機動細胞列も見られる。8-2 層では短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体がいずれも約 200 個/g と少なく、8 層と 4 層ではいずれも短細胞珪酸体が約 300 個/g、機動細胞珪酸体が約 500 個/g である。

またオオムギ族の短細胞珪酸体が各試料から認められる。

• SD03

埋積物中の植物珪酸体含量は、SD01 や SD02 と比較して概して少ない。7 層では約 2,100 個/g、6-2 層では約 6,400 個/g、6-1 層では約 3,200 個/g である。

植物珪酸体の産状は SD01 や SD02 と同様であり、メダケ節を含むタケ亜科の産出が目立つ。イネ属も検出されるものの、概して少ない。7 層では機動細胞珪酸体が約 100 個/g、6-2 層では短細胞珪酸体が 100 個/g 未満、機動細胞珪酸体が約 300 個/g、6-1 層では機動細胞珪酸体が約 200 個/g である。各試料から、穎珪酸体が検出される。

他の試料で見られたオオムギ族の短細胞珪酸体は認められない。

• SD04

埋積物 12 層での植物珪酸体含量は約 1.1 万個/g である。メダケ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、イチゴツナギ亜科などが認められる。

イネ属も検出され、短細胞珪酸体が約 100 個/g、機動細胞珪酸体が約 500 個/g である。穎珪酸体が多く検出され、短細胞列や機動細胞列も見られる。

(4) 種実同定

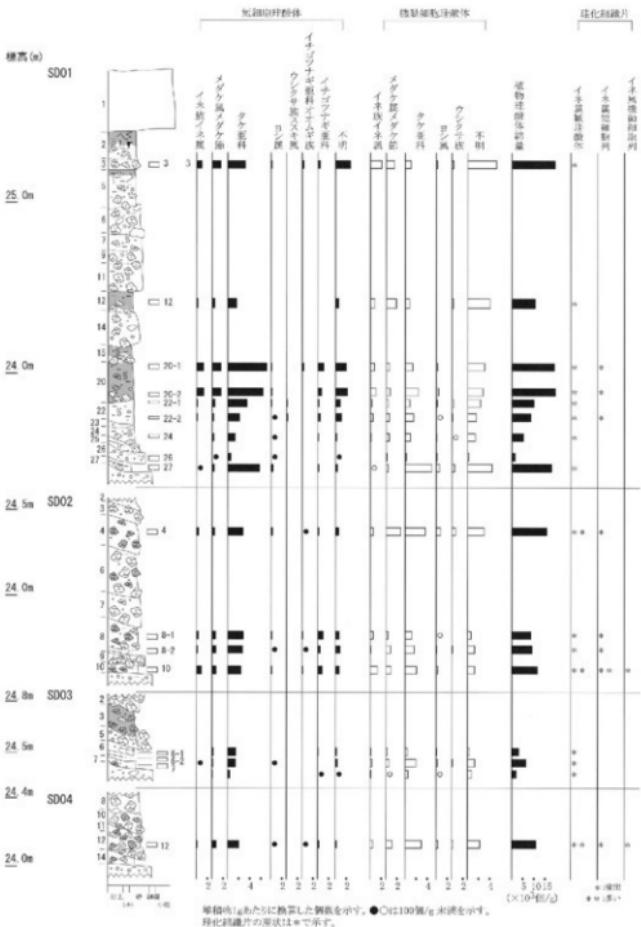


図36 植物珪酸体含量の層位的変化

ここでは珪藻化石群集の特徴から推定される各溝埋土の成因や堆積環境について検討する。各溝から埋土の珪藻化石群集は、いずれの層準も陸生珪藻と水生珪藻からなり、大きく三つの群集に区分することができる。

第1の群集は、陸生珪藻が90%~100%と優占する群集である。本群集は、中世のSD01塚の14層・11層・6層、SD02塚埋土の3・4・6・7・8・10層、近世のSD04溝の3・8・11・12・14層が相当する。これらの層準は、層相から人為的營力により形成された堆積物と推定されることから、各層形成時の溝内は乾いた状態であったと考えられ、当時の表層土によって埋積が進んでいることが推定される。

第2の群集は、陸生珪藻が全体の約70%を産出する群集である。SD01の24層~20層が相当する。現生の陸生珪藻の分布調査から、陸生珪藻の占める割合が全体の約70%以上であれば、好気的環境で堆積したこと

表4 植物珪酸体含量

種名	固有地名・試料名																		
	SD01						SD02												
3	12	26-1	29	2	22	1	23	24	26	27	4	8	9	2	10	6-1	6-2	7	12
イギス藻類紅藻類放散体																			
イギス藻・マツ	900	200	1,200	1,200	200	100	-	-	<100	300	300	200	900	-	<100	-	100		
マダラシノリケレ	1,600	400	1,600	1,600	500	300	<100	400	400	600	700	<100	200	200	100	700			
クケ藻類	3,100	1,600	7,000	6,200	3,500	2,100	1,200	500	5,700	2,700	2,800	2,700	2,300	1,400	1,400	400	2,000		
ワシモ	200	-	100	200	100	<100	<100	<100	400	300	200	600	300	-	<100	-	<100		
ウツボカサガススキ属	-	-	-	-	100	200	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イギスケヤギリオコギ族	300	-	200	-	100	-	-	-	-	<100	100	<100	100	-	-	-	-	<100	
イギスケヤギリオ科	500	-	1,100	700	200	500	100	-	200	200	1,000	400	500	100	-	<100	200		
アリ	2,700	600	2,000	2,100	900	1,100	250	<100	400	500	700	800	700	300	300	<100	200		
イギス科藻類紅藻類放散体																			
イギス科・マツ	2,600	800	700	1,000	200	500	200	-	<100	500	500	200	1,300	200	300	100	500		
マダラシノリケレ	1,500	1,600	600	700	400	600	600	100	400	2,600	300	800	900	200	500	<100	1,100		
クケ藻類	1,000	800	1,200	7,300	800	1,500	900	200	4,800	3,600	1,200	1,600	2,000	400	2,000	300	2,300		
ワシモ	200	-	200	400	200	100	100	600	600	600	<100	100	300	100	200	<100	300		
ウツボカサガス	300	200	-	-	100	<100	-	-	500	700	-	100	-	-	-	100	200		
アリ	3,200	1,000	3,100	2,700	2,300	4,500	1,400	200	4,400	3,000	600	1,300	1,300	300	1,300	700	2,700		
合計																			
イギス科藻類紅藻類放散体	9,200	2,800	13,200	12,200	5,000	4,200	2,100	800	7,100	4,600	5,700	5,000	5,700	2,000	2,000	600	3,600		
イギス科藻類紅藻類放散体	10,100	7,600	6,000	4,400	4,200	3,200	700	10,700	11,200	2,700	4,100	5,800	1,200	4,400	1,100	7,300			
総計	19,300	10,100	19,200	19,500	9,800	8,500	5,200	<500	17,800	15,700	8,800	9,100	11,300	3,200	6,000	2,100	16,900		
堆積組成																			
イギス藻類細胞	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
イギス藻類細胞	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
イギス藻類細胞	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*

数据は質量割合(%)を示し、10の位で丸めた値です。合計は各分類群の丸めない数値の合計値に丸めていました。(100×100個/1g未満)、一は未検出、-は検出、*は多く検出です。

が確認されている(伊藤・堀内,1991)。これに従えば、SD01の24層~20層も基本的には好気的環境で堆積したと考えられる。これらの層から産出する水生珪藻の *Pinnularia subcapitata* var. *paucistriata* は、好気的環境にも耐性がある(Ohtsuka and Fujita,2001)ことから、陸生珪藻として好気的環境に生息していた可能性が考えられる。のことから、当時の溝内は雨水でのみ潤養されるような乾いた状態であったと考えられる。

第3の群集は、水生珪藻が約50%以上産出する群集である。本群集は、中世のSD01塚下部の26~27層と近世のSD03溝の6層~7層が相当する。このうち、SD01の27~26層からは、止水域を特徴づける *Aulacoseira ambigua*、*Aulacoseira italicica* が産出した。陸生珪藻も比較的多く産出することから、26~27層の溝内は水が滞水する時期を挟むする、乾湿を繰り返すような堆積環境であったことが推定される。

一方、近世のSD03溝の7層~6層からは、*Surirella minuta*、*Gyrosigma scalpoides*、*Placoneis elginensis* var. *neglecta* といった流水性種が多く産出したことから、溝内には流れが存在した可能性がある。また、7層~6層からは、*Tryblionella hungarica*、*Tryblionella salinarum*、*Nitzschia sigma* といった本来汽水域に生息するものや、貧栄養の水域に一般的な *Pinnularia* 属の中でも中程度の電解質を含む水域に生育する *Pinnularia subgibba* var. *undulata*(Krammer,2000) が多産したことから、当時の溝内の水質が富栄養化していたことも考えられる。これらの層では陸生珪藻も検出されることから、表土の流入、あるいは乾燥する時期を挟んでいることも推定される。SD03は好気的環境では花粉化石が比較的多く産出するが、このような嫌気的な状態におかれていたことが、他の溝埋土と比べて花粉化石が残りやすい一因となっていた可能性がある。

(2) 花粉化石からみた周辺植生

花粉分析結果では、花粉化石の保存状態が悪い試料が大部分である。また、寄生虫卵も検出されない。花粉や寄生虫卵は、好気的環境下では風化作用により分解することから、珪藻化石で推測された好気的環境下において分解していることが考えられる。

花粉化石が比較的多産した近世のSD03溝埋土下部の群集組成をみると、マツ属花粉が優占する特徴を示す。

これは、別の調査区で実施した花粉分析結果と同様な傾向である。マツ属は風媒花であるため花粉の生産量が莫大であり、また翼を持つため飛散しやすいことから、実際の植生に比べて花粉化石の割合が高くなる傾向がある(Faegri and Iversen,1989)。このため実際の古植生においては、これほど多くはないと思われるものの、

後背山地を中心とした場所にはマツ林の存在が示唆される。歴史時代の絵図等をもとにした植生景観の復元調査によれば、江戸時代の六甲山は、マツ林が点在するものの、大部分がはげ山であったと考えられている（松下, 1992）。このことから、植生全体でみた場合のマツ林は少ないが、木本類のみで見た場合は相対的にマツ林が多いことになり、花粉分析の結果とも調和的である。また栽培植物は、保存が悪いながらも中世のSD01 墓壇上 22 層、近世の溝堀上 6 層からソバ属花粉が産出している。これらの層準の形成期には周辺でソバが栽培されていた可能性がある。

（3）植物珪酸体の産状からみた溝周辺の植生

中世の SD01 や SD02 墓土における植物珪酸体含量密度の層位変化をみると、腐植質堆積物、腐植質堆積物ブロック土からなる層準で高くなる傾向がうかがえる。特に SD01 の 20 層で高く、層相および珪藻分析結果を踏まえると、20 層形成期の溝内は植物珪酸体が蓄積されやすい、比較的安定した好気的環境であったことが推定される。群集組成をみると、比較的乾いた場所に生育する種類であるメダケ節などを含むタケ亜科の産出が目立つことから、溝の周辺にはササ類などが生育していたことが推定される。また、温潤な場所に生育するヨシ属も認められることから、溝沿いにはヨシ属が生育する地下水位の高い場所も存在したことが推定される。

また、溝堀土のほとんどの層準から栽培種のイネ属の糲や葉部に由来する植物珪酸体が検出された。当時の調査区は屋敷地であったと考えられている。イネ属の植物体は住居構築材や燃料材など生活資材として利用されることが多い。屋敷地の周辺に稲作地が存在した可能性もあるが、これらのことと複合的に捉えると、イネ属の植物珪酸体は当時の屋敷地で利用していた稻糲穀や稻藁に由来する可能性がある。

近世の溝である SD03・4 も中世の溝堀土の植物珪酸体群集も、中世の溝堀土中の群集組成と同様な特徴示しており、溝周辺にはササ類などがタケ亜科植物が生育していたことが推定される。栽培植物のイネ属についても周辺での稻藁などの利用が考えられる。なお、SD03 墓土の 6 層・7 層では植物珪酸体含量密度が低かったが、これは埋積の過程で植物珪酸体が残留しにくい状態にあったことがと考えられる。

引用文献

- 安藤 一男. 1990. 淡水底珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42:73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T. 1995. Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, 35-47.
- Faegri, K. & Iversen Johs., 1989. Textbook of Pollen Analysis. The Blackburn Press, 328p.
- 原口 弘・大友 三友・清史・小林 弘. 1998. 埼玉の藻類 珪藻類. 埼玉県植物誌. 埼玉県教育委員会, 527-600.
- Hustedt, F. 1937-1939. Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java., Bali und Sumatra. Archiv für Hydrobiologie, Supplement, 15:131-177, 15:187-295, 15:393-506, 15:638-790, 16:1-155, 16:274-394.
- 石川茂雄. 1994. 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 伊藤 良永・鶴内 誠示. 1991. 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解釈への応用. 珪藻学会誌, 6:23-45.
- 神戸市教育委員会. 2010. 桐・荒田町遺跡第 46 次発掘調査現地説明会資料.
- 近藤 錠. 2010. プラント・オ・パール図譜. 北海道大学出版会, 387p.
- 小杉 正人. 1988. 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27:1-20.
- 小林 弘・井出 雅彦・真山 茂樹・南雲 保・長田 啓吾. 2006. 小林弘珪藻図鑑. 第 1 卷. 横内田老舗圖, 531p.
- Krammer, K. 1992. PINNULARIA. eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J.CRAMER, 353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1986. Bacillariophyceae. I. Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/1. Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1988. Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/2. Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991a. Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaeae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/3. Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991b. Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnanthaceae, Kritsche Ergänzungen zu Navicula(Lincolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/4. Gustav Fischer Verlag, 248p.
- Lange-Bertalot, H. 2001. Navicula sensu stricto 10 genera separated from Navicula sensu lato. Frustulia, 526pp. In: Lange-

Lowe, R.L.1974.Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p. In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency. Cincinnati.

松下まり子,1992.六甲山系の変遷、「六甲山の植物」、神戸新聞総合出版センター,168-177.

中村 純,1980.日本産花粉の標徴 I・II、大阪市立自然史博物館収蔵試料目録 第12集・13集、大阪市立自然史博物館中山至大・井之口希秀・南谷 忠志,2000.日本植物種子図鑑、東北大出版社,642p.

Ohtsuka,T. & Fujita,Y.2001.The diatom flora and its seasonal change in a paddy field in Central Japan.Nova Hedwigia 73,97-128.

Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G.1990.The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.

田中正昭,2002.日本淡水動植物プランクトン図鑑,584p.

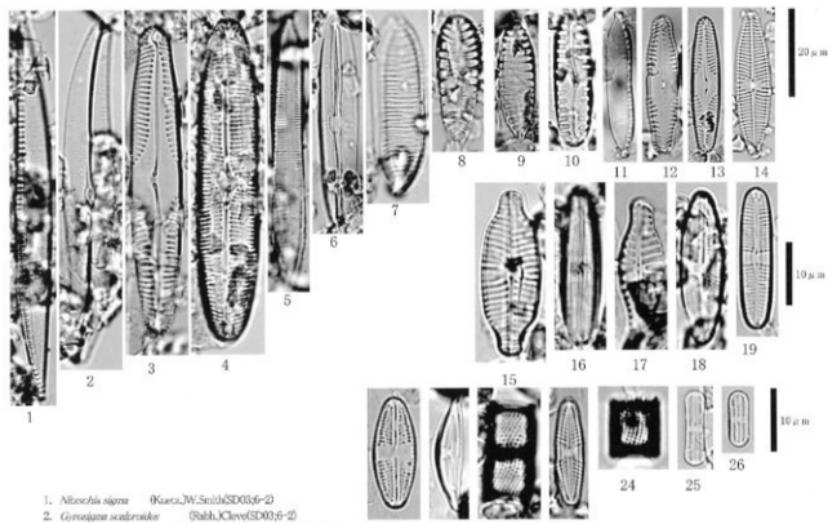
Vos, P.C. & H. de Wolf,1993.Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands: methodological aspects.Hydrobiologia,269/270,285-296.

渡辺仁治・浅井 一視・大塚 泰介・辻 彰洋・伯善 晶子,2005.淡水珪藻生態図鑑、内田老鶴園,666p.

柳沢 幸夫,2000. II -1-3-2-(5)計数・同定.化石の研究法—採集から最新の解析法まで—,化石研究会,共立出版株式会社,49-50.

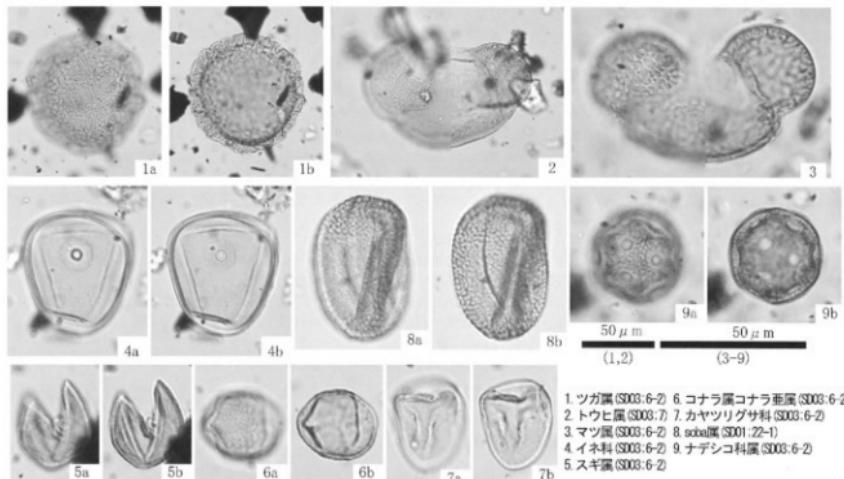
Wiktorowski, A., & Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D.,2000,Iconographia Diatomologica 7. Diatom flora of Marine coast I. A.R.G.Gantner Verlag K.G., 881p.

挿図写真図版 2 楠・荒田遺跡第46次調査珪藻化石

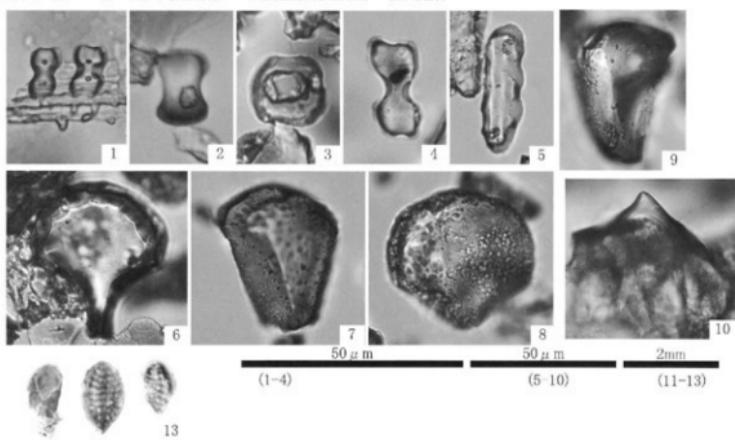


1. *Alethosphaera signata* (Kutz.)W.Smith(SD03-6-2)
2. *Gomphonema scalaroides* (Gahn)Kleve(SD03-5-2)
3. *Pinnularia subgibba* var. *sordida* Krammer(SD03-5-2)
4. *Pinnularia riparia* (Littke)S.Döhl(SD01-22-2)
5. *Typhlocyella hungarica* (Cronow)D.G.Mann(SD03-6-2)
6. *Plaotus vulgaris* (Thunb.)de Toni (SD01-27)
7. *Typhlocyella salinaria* (Cronow)Pérez-García(SD03-6-2)
8. *Serivella sinuata* Brebisson(SD03-6-2)
9. *Serivella squata* Kutzelnig(SD01-27)
10. *Pinnularia borealis* Ehrenberg(SD01-30)
11. *Hausseria amphioxys* (Griseb.)Kutzelnig(SD01-11)
12. *Pinnularia aciculipora* Mihde et H.Kobayashi(SD01-24)
13. *Pinnularia subcavata* var. *paucistrata* (Cron.)Kleve(SD01-23-1)
14. *Nivalis veneta* Kutzelnig(SD01-20-1)
15. *Placoneis eligensir* var. *zegelecta* (Krasilnikov)Kleve(SD03-6-1)
16. *Aspidium adipsum* Hustich(SD01-11)
17. *Hypodonta capitata* (Oehr.)Lange-B. Metzeltin et Wiktorowski(SD03-6-1)
18. *Stauroneis obtusa* Lagerström(SD01-11)
19. *Coleoëis angustivikka* Bayo (PSX01) (14)
20. *Latidens mucosa* (Kutz.)D.G.Mann(SD01-11)
21. *Amphora monstrosa* Krusko(SD02-3)
22. *Aulacoseira austriaca* Grun. Simonov(SD01-26)
23. *Stauroneis horrida* (Grun.)Xiong(SD01-22-1)
24. *Anadeostrea italica* (Oehr.)Simonov (SD01-22-1)
25. *Didegesmus fulgar* Arnett ex Gruene in Van Heurck(SD01-9)
26. *Didegesmus contenta* (Gruene)Van Heurck(D.G.Mann(SD01-22-1))

挿図写真図版3 楠・荒田町遺跡第46次調査花粉化石



挿図写真図版4 楠・荒田町遺跡第46次調査植物珪酸体・植実遺体



1. イネ属短細胞列(SD04;12)
2. メダケ節短細胞柱酸体(SD01;3)
3. ヨシ属短細胞柱酸体(SD01;22-1)
4. ススキ属短細胞柱酸体(SD01;22-2)
5. オオムギ族短細胞柱酸体(SD01;3)
6. イネ属機動細胞柱酸体(SD01;22-2)
7. メダケ節機動細胞柱酸体(SD01;3)
8. ウシクサ族機動細胞柱酸体(SD01;22-1)
9. ウシクサ族機動細胞柱酸体(SD01;22-1)
10. イネ属頸柱酸体(SD01;20-2)
11. カヤツリグサ科 果実(SD03;7)
12. カタバミ属 種子(SD03;7)
13. カタバミ属 種子(SD03;7)

第6章 考 察

第1節 土器について

二重塹については、これまでの調査・研究によって福原京関連の遺構として評価されてきた。今回の調査でも、この塹の続きを検出し、一部に切り合い関係も確認できたが、その相互の時期的な関係は不明瞭なままである。その上で、塹の時期を改めて検証するために神戸市域の中でも、六甲山南麓に絞って、いくつかの類例を元に再度確認していきたい。

その前提として、土器のある程度の一括性が保たれる遺構からの出土であることが条件となるが、塹の性格上きわめて短期間の遺構として土器変遷に供するような遺構の存在を限定的に選別はしない。流路など幅広い時期の遺物が出土する事例を除き、塹と同程度のやや緩い一括性の考慮される遺構から出土した事例を設定条件としている。また、京都系上師器の編年や瓦器編年、東播系須恵器編年についてはそれぞれに研究史を持ち、編年が確立されている。これらを参考とするために、できる限り須恵器と土師器と瓦器の共作事例に限定することとし、少なくともいざれか2者が出土し、傾向が把握できるような出土量を持つものを優先的に考証の資料とした。なお、本論の目的が12世紀末の土器様相を理解することが目的であるので、11世紀後半から13世紀にかけての資料を主に扱うこととする。その上で、遺構の性格上時期幅を持つという前提に立っているため、編年作業における画期といった線引きや、型式設定ないしは様式認定はあえて行わず、緩やかなグルーピングとしてのまとまりを示すことに止める。なお、使用する資料については、文末に一括掲載することとし、いちいち註等で示すことは行わない。また、原典との比較を容易にするために、上器の番号については、原典番号をそのまま採用して記述を進めることとする。

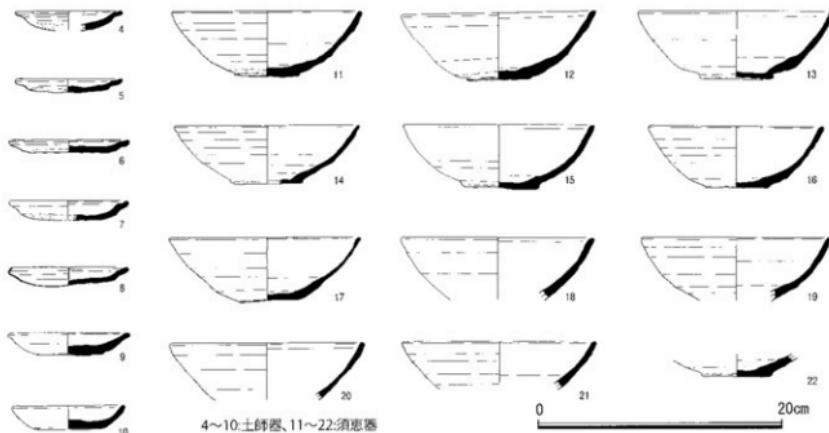


図37 二葉町遺跡第22次調査SE315出土遺物

まず最初に示す資料としては二葉町遺跡第22次調査SE315山上資料を取り上げる。

番号の4~10は京都系の土師器であり、9・10は底部糸切底の在地系の土師器である。4~8は、ての字状口縁であり、口縁端部は内上方につまみあげられている。口径は9~10cmを測る。須恵器は口径

14cm～16cmと幅があり、高台状に底部が段を持ち、底部から緩やかに内湾しながら立ち上がる体部を持つ。底部内面の見込み部分には段差を持つが、段の明瞭なものとやや緩やかな段を持つものとが存在する。土師器は、時期的にある程度のまとまりがみられるが、須恵器についてはやや時期幅がある。

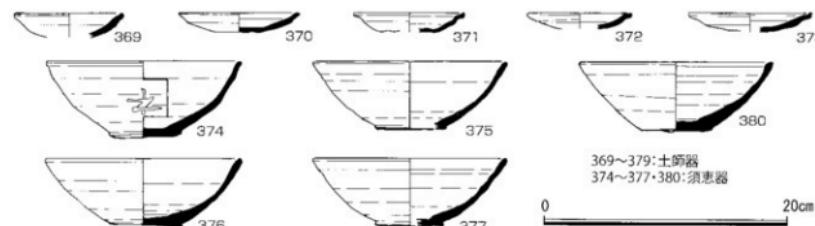


図38 二葉町遺跡二葉町6丁目地区SE304出土遺物

二葉町遺跡二葉町6丁目地区SE304の資料では、369～373は、ての字状口縁の土師器であり、口縁端部は内上方につまみあげられている。口径は、9～10cmを測る。須恵器は口径15cm以上で器高も5.5cmを越えており高い。高台状に底部が段を持ち、底部から緩やかに内湾しながら立ちあがる体部を持つ。底部内面の見込み部分には段差を持つが、段の明瞭なものとやや緩やかな段を持つものとが存在する。

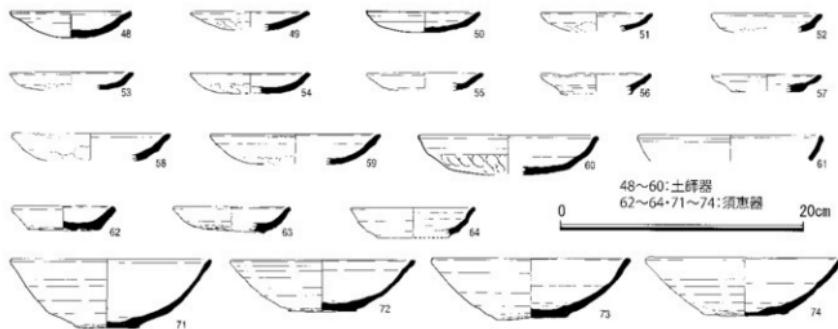


図39 二葉町遺跡第22次調査SE318出土遺物

二葉町遺跡第22次調査SE318の資料では、ての字状口縁を持つものと口縁端部が外反するものがある。ての字状口縁の端部は、明瞭な段を持たず端部先端を丸く収めるものが大半を占めるようになる。口径は9cm～10cmである。須恵器は底部の高台状に段を持つものが減少し、わずかに痕跡程度となる。口径は大型化し16cmを越えるが器高に大きな変化は認められず、5～6cmの範囲に収まる。底部から直線的に開き気味に延びる体部を持ち、底部内面の見込み部分のへこみは不明瞭なくぼみに変化する。

生田遺跡第4次調査SE4101の資料では、7・8がての字状口縁を持つ土師器である。ての字状口縁の端部は、明瞭な段を持たず端部先端を丸く収めるものが大半を占めるようになる。口径は9cm～10cmであるが、二葉町遺跡第22次調査SE318の資料よりやや小型化の傾向を持つ。須恵器は底部の高台状の段を持つものが減少し、わずかに痕跡程度となる。口径は16cmを越え、口径の大型化が見られるが器高に大きな変化は認められず、5～6cmの範囲に収まる。底部から直線的に開き気味に延びる体部を持ち、

底部内面の見込み部分のへこみは不明瞭なくぼみに変化していく。全体的には、二葉町遺跡第22次調査SE318の資料より新しい傾向が認められるが、ほぼ同じ範疇とする。

二葉町遺跡久保町6丁目地区SE302の資料では、188～195までが土師器である。端部先端が外反するものがほとんどを占め、一部に端部先端が内径し、端部外面に面を持つものが現れる。口径は9cmと16cmが中心である。196～200の須恵器では、底部の高台状の段がわずかに痕跡程度となる。口径は16cm以下に戻るが、器高に大きな変化は認められず、5～6cmの範囲に収まる。底部から直線的に開き気味に延びる体部を持ち、底部内面の見込み部分のへ込みは不明瞭となったままであるが、幾分見込み部分の径は大きくなる傾向を示す。201は楠葉型の瓦器碗であり、口径15cm、器高6.3cmを測る。内外面ともに密にミガキが施されており、神戸市域では、まず楠葉型の瓦器碗の出土が先行する傾向が認められる。

二葉町遺跡第22次調査SE317の資料では、33～36・43～46までが土師器である。口縁端部は外反し、口縁部外面は2段ナデとなっている。須恵器は底部から屈曲し直線的に外上方へ延びる。口径は16cm以上で、器高も5cm以上を保っている。

二葉町遺跡久保町6丁目地区SE301の資料では、132～135までが土師器である。端部先端は外反しており、口径は9cm～10cmである。須恵器は底部の段が痕跡程度に残る。口径としては16cmを越えるが5.5cm以下とやや器高の減少傾向が認められる。須恵器はやや時期幅を持つ資料と考えられる。

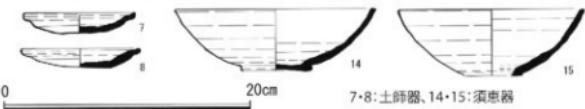


図40 生田遺跡第4次調査 SE4101 出土遺物

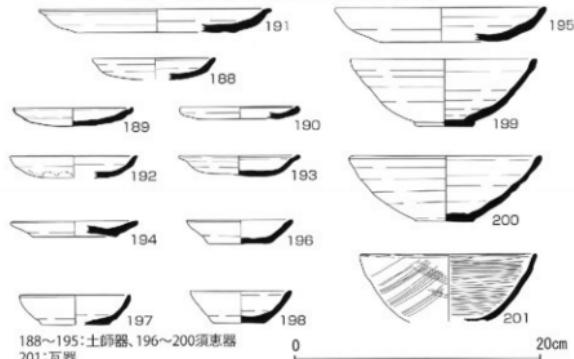


図41 二葉町遺跡久保町6丁目地区 SE302 出土遺物

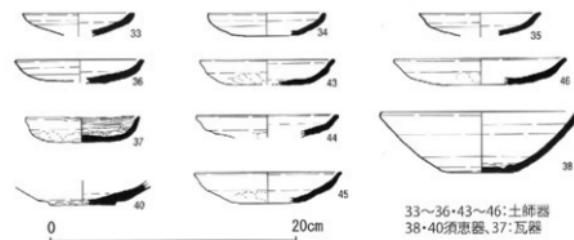


図42 二葉町遺跡第22次調査 SE317 出土遺物

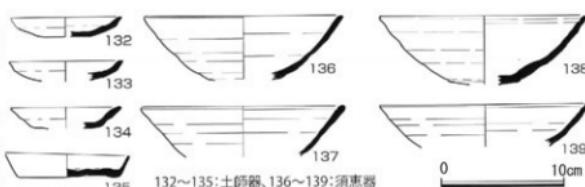


図43 二葉町遺跡久保町6丁目地区 SE301 出土遺物

大橋町遺跡第1次調査SE104の資料では、8～17までが土師器である。端部先端は外反しており、口径は8.8cm～10.2cmを測る。また、14cm台の坏も含まれている。須恵器は口径の小型のものも含まれているが、16cm前後で、器高は5.4cmのものが中心である。底部の段はほとんど痕跡となっており、底部内面の見込み部分の段差もほとんど痕跡に近い。

二葉町遺跡第22次調査SX301の資料では、94～101は土師器である。体部上部から口縁端部外面にナデによる浅い2段の窪みをもち、口縁端部は微妙に外反気味のものと、端部外面に外傾する端面を持つ、断面三角形状を呈するものがある。口径は9cm～10cm、器高は1cmの後半である。須恵器は105・106で、底部の段はわずかに張り付く程度となり、底部内面の見込み部分の段は、制作時の回転ナデによるくぼみのみになる。底部から屈曲して外上方に延びる体部に丸みを帯びた端部を持つ。口径は16cmを保つが、器高が5cmを割っており、大橋町遺跡第1次調査SE104の事例より、やや扁平な器形へと変化している。

二葉町遺跡久保町6丁目地区SK311の資料では、瓦器が出土している。90・91は、桶葉型瓦器碗と考えられる資料で、内面および外面を密にヘラミガキを施している。高台は断面三角形の明瞭な形をしており、底部から緩やかに内湾しながら立ち上がる体部を持つ。端部内面には沈線を施している。口径は15cm以上、器高も5cmをこえるおおぶりのものである。須恵器は底部から外上方に延びる体部を持つもので、端部は単に丸く收める。口径16cm、器高5.1cmを測る。

大橋町遺跡第1次調査ST101の資料では、土師器の口径が9cm前後で、体部上部から口縁端部外面にナデによる浅い2段のくぼみをもち、端部外面に外傾する面をもつ。須恵器は口径16cmを保つが、器高5cmを削り込み、扁平な器形となっている。SK311からSX301→ST101へと緩やかに変化していく。

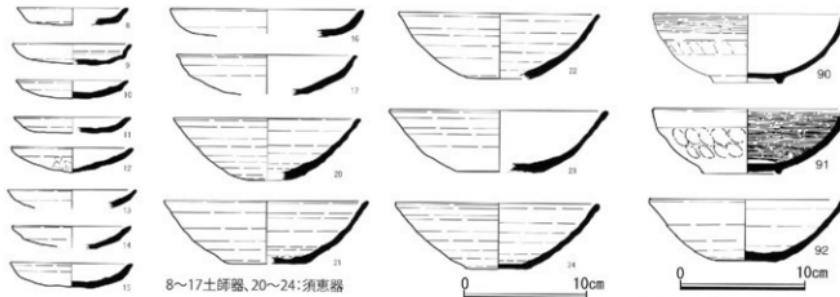


図44 大橋町遺跡第1次調査SE104出土遺物

図45 二葉町遺跡久保町
6丁目地区SK311出土遺物

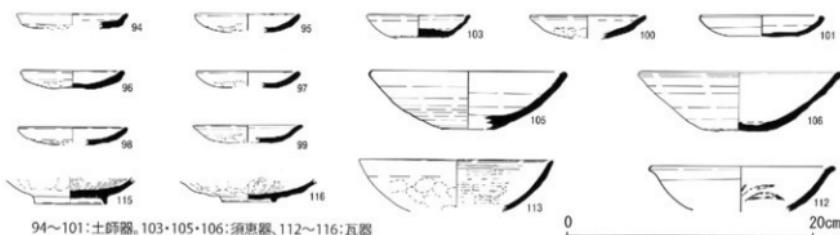


図46 二葉町遺跡第22次調査SX301出土遺物

祇園遺跡 SX07 I 期に伴う資料である。土師器は口径が 14cm 前後で、体部上部から口縁端部外面にナデによる浅い 2 段のくぼみをもち、端部外面に外傾する面をもつ。ただし、2 段くぼみナデの内、上段のくぼみはやや狭くなっている。瓦器は口径 15cm、器高 5cm を越える。見込み部分の暗文は格子状になっている。高台はまだ断面三角形の明確なものである。

祇園遺跡 SX07 の II - 1 期に伴う資料である。京都系土師器の主な傾向として、体部上部から口縁端部外面にナデによる浅い 2 段のくぼみをもち、端部外面に外傾する面をもつ。ただし、2 段くぼみナデの内、上段のくぼみはやや狭くなるものが多くなっている。口径は 9cm ~ 10cm と 14cm 前後にその分布の中心がある。器高は 1cm の後半を保っている。46 は、底部糸切りの土師器である。瓦器は口径 15.4cm であるが、器高 4.9cm となっている。見込み部分の暗文は格子状になっている。高台はまだ断面三角形の明確なものである。

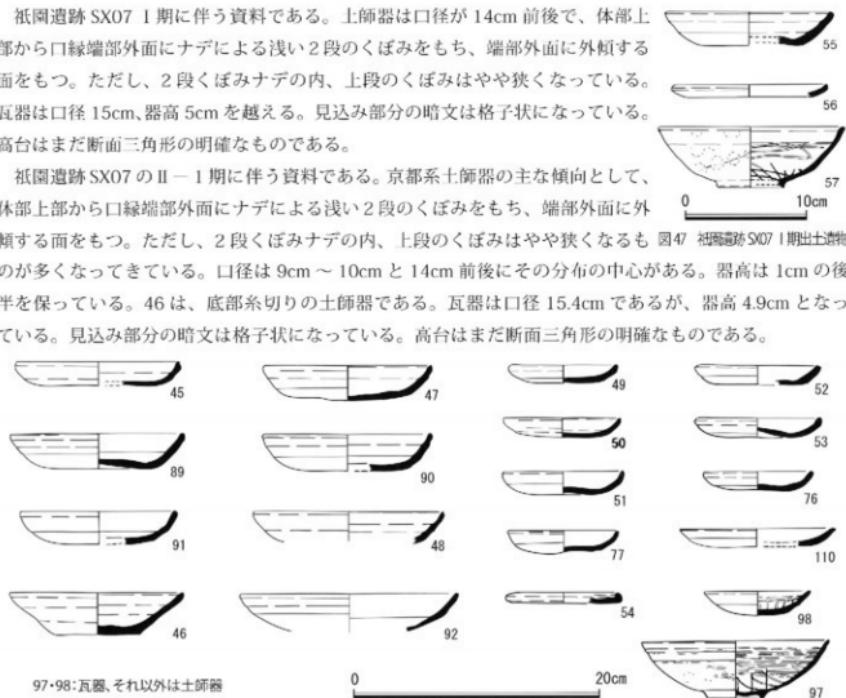


図 47 祇園遺跡 SX07 I 期出土遺物

楠・荒田町遺跡 H15-1 次調査 SK01 の資料では土師器が多量に出土している。京都系土師器の主な傾向として、体部上部から口縁端部外面にナデによる浅い 2 段のくぼみをもち、端部外面に外傾する面をもつ。ただし、2 段くぼみナデの内、上段のくぼみはやや狭くなるものが主流である。口径は 9cm と 14cm 前後にその分布の中心がある。器高は 1.5cm を中心としている。土師器の法量では、祇園遺跡 SX07 II - 1 期より楠・荒田遺跡 H15-1 次調査 SK01 出土資料の方が小型化が進んでおり、やや新しい傾向を示す資料である。なお、祇園遺跡 SX07 は福原京関連の遺構と考えられ、土師器の編年においても、SX07 出土の土器群は京都の編年と対比可能であり、祇園遺跡 SX07 II - 1 期の実年代は 1150 ~ 1180 年の幅が与えられる。この成果から、時期的な基準資料として有効である。これまでに述べてきた土器の変化過程が正しいと仮定して、それらは、祇園遺跡 SX07 II - 1 期以前の土器群と捉えることができ、およそ、その変化過程から実年代が推定的割り振りはあるが可能となる。

これまでのおおよそのグループとしては、土師器がての字状口縁で須恵器の高台が明瞭な二葉町遺跡第 22 次調査 SE315 と二葉町遺跡二葉町 6 丁目地区 SE304 がある。土師器の端部が外反するかての字状を呈するかのいずれかであり、須恵器の高台がわずかな痕跡となるグループとして二葉町遺跡第 22 次調査 SE318・生田遺跡第 4 次調査 SE4101 がある。土師器の口縁端部が外反するものが大半を占め、須恵器の体部は湾曲せず直線的に外上方に延び、底部の高台状のものは、わずかに張り付いたような痕跡へと変化

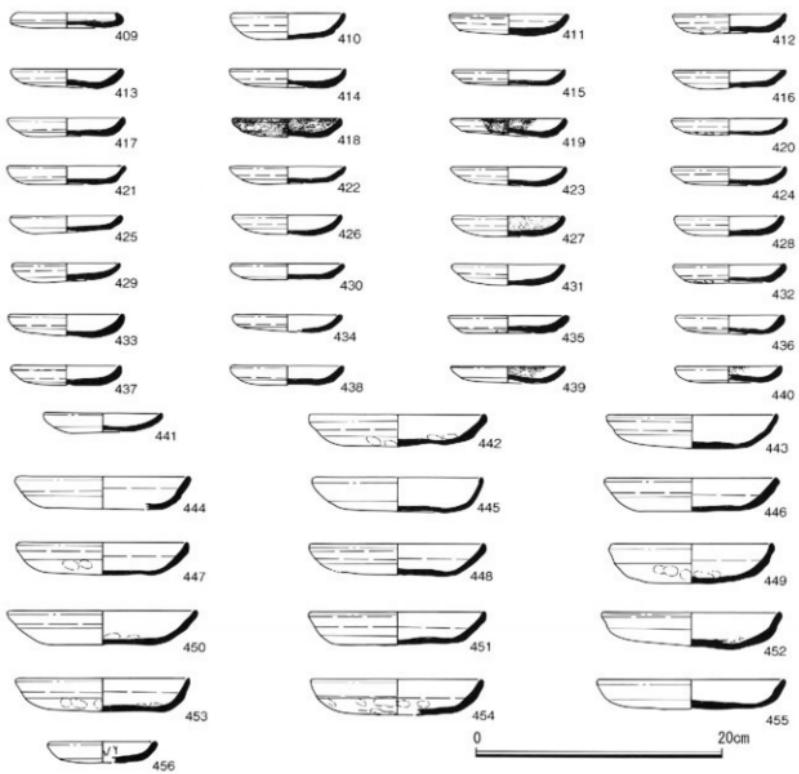


図 49 楠・荒田町遺跡第 H15-1 次調査 SK01 出土遺物

するグループとして、二葉町遺跡久保町 6 丁目地区 SE302・二葉町遺跡第 22 次調査 SE317・二葉町遺跡久保町 6 丁目地区 SE301・大橋町遺跡第 1 次調査 SE104 がある。なお、このグループの時期より瓦器が含まれるようになる。次は、体部上半から浅い 2 段のくぼみナデがあり、端部は外面に外傾する面を持ち、須恵器では、器高がやや減じて扁平な形となるグループとして、二葉町遺跡第 22 次調査 SX301・二葉町遺跡久保町 6 丁目地区 SK311・大橋町遺跡第 1 次調査 ST101 がある。土師器では、端部外面に外傾する面をもち、体部上部から口縁端部外面にナデによる浅い 2 段のくぼみがやや退化傾向にあり、瓦器では見込み部分に格子の暗文を施し、口径は依然として 15cm を越えるが、器高は 5cm 前後となるグループとして祇園遺跡 SX07 I 期、祇園遺跡 SX07 II - 1 期、楠・荒田町遺跡第 H15-1 次調査 SK01 がある。以上、これまで祇園遺跡 SX07 II - 1 期の土器群出現までの土器様相についての大まかな流れを整理してきた。径高比率では微細な変化であるが、法量的に減少傾向にあり、器高もやや低くなる傾向が現れる。須恵器や瓦器では祇園遺跡 SX07 出現以降、引き続き法量の減少として現れると考えられる。これは、これまでの瓦器の編年研究や東播系須恵器の編年研究でも繰り返し述べられてきたことであるが、口径と器高の減少する方向性を視点として、神戸市域の六甲山南麓における 13 世紀の土器様相について述べていきたい。

祇園遺跡 SX07 II - 3期の土器群は、土師器小皿の口径分布が9cm～9.5cmへと推移し、法量として、小型化が進むが、器高自体は1.5cm以上を保っている。体部上半からのナデは1段ナデが多くなってきていている。瓦器椀では、口径15cmを割るものも現れてきており、器高も5cmを割り込むものが主流となる。

大開遺跡第4次調査 SE04でも、瓦器椀は口径15cmないしは少し割り込むものであり、器高も5cmを割り込んでいる。内面見込みの暗文は格子から平行線へと変化している。土師器小皿は、口径9cm～9.5cmの間で、器高は1.5cm以上を保っている。端部外面の面取りは、少し不明瞭なものも現れ始めており、ナデも1段へとの変化が認められる。

二葉町遺跡二葉町6丁目地区 SE312の資料では、土師器大皿は口径14cm 器高2.6cmで、体部外面上方のナデは1段へと変化している。瓦器椀の口径は15cm前後のものがあるが、器高は5cm以下のものが中心となっている。底部から緩やかに内湾しながら立ち上がる体部は膨らみを失い、直線的に外上方へ延びる傾向にある。底部内面の見込みの暗文は平行線であり、底部の高台径が小さくなる傾向が現れる始める。

上沢遺跡第20次調査 SE01では、須恵器の口径が16.4cmとやや大きめであるが、器高は4.8cmとや

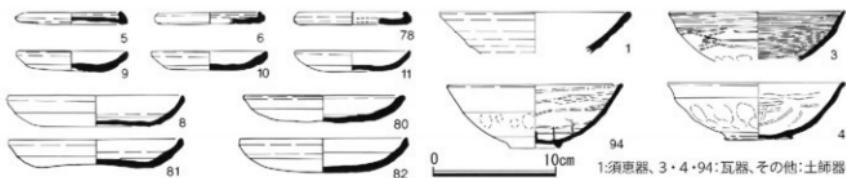


図50 祇園遺跡 SX07 II - 3期出土遺物

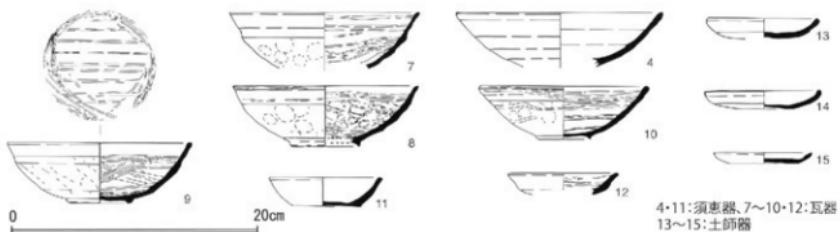


図51 大開遺跡第4次調査 SE04 出土遺物

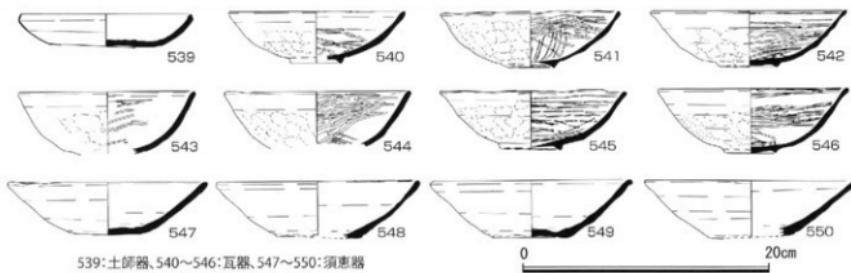


図52 二葉町遺跡二葉町6丁目地区 SE312 出土遺物

や器高を減じている。底部から外上方に延びる体部の角度に大きな変化はなく、器高の減じた分を底部径の拡大によって口径の減少を抑えている。とはいっても、扁平な器形へとの変化は否めない。瓦器椀では、底部の高台径がやや小さくなってきており、底部から延びる体部もふくらみを失い、直線的に外上方へと延びる。底部内面の見込みの暗文は平行線である。体部内面中段における暗文は密に施されている。

楠・荒田町遺跡第H15-1次調査SD01最下層出土の資料は、土師器小皿では口径9cm前後に中心があり、土師器大皿では14cmに中心がある。体部上半

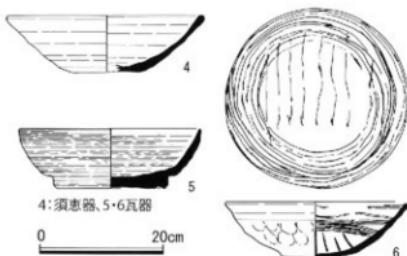


図53 上沢遺跡第20次調査SE01出土遺物

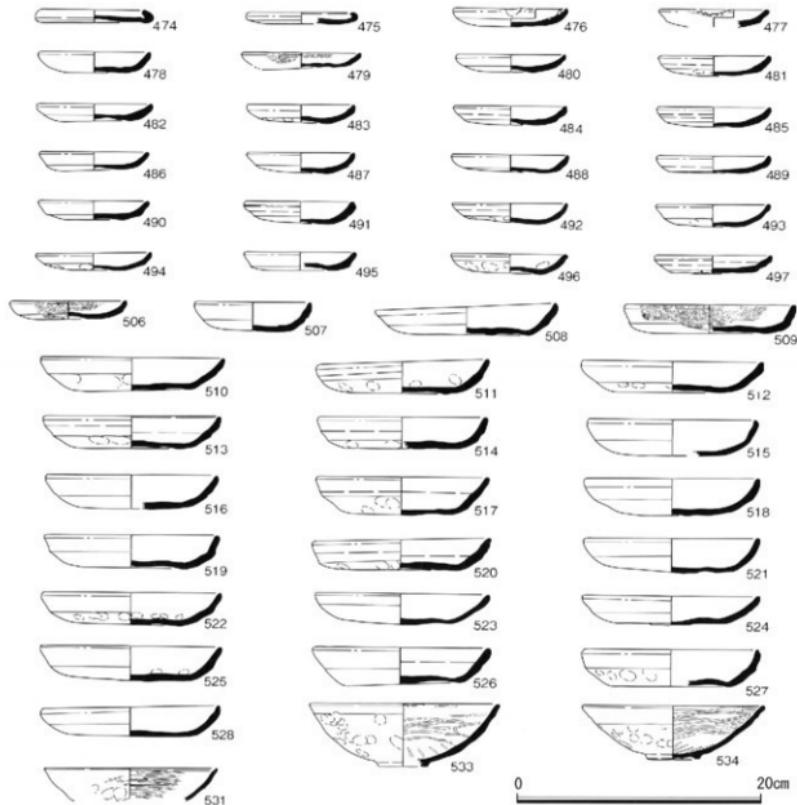


図54 楠・荒田町遺跡第H15-1次調査SD01最下層出土遺物

のナデは2段ナデの残るものもあるが、総じて1段ナデが主流となる。底部から外上方に延びる体部で、内湾ないしは強く屈曲する事例は減少する。土師器皿に507の事例のようにやや器高が高いものが出現する。これは、器壁が白っぽく、白色系土師器と思われるもので、神戸市域の六甲山南麓における初源的な事例である。瓦器は底部から外上方に直線的に延びる体部を持ち、底部の高台の形状は断面三角形を保つが小さくなる。口径・器高共にやや小振りのもので、法量の進んだ事例がこの頃に出現し始めると考えられるが、従来に近い口径15cm以上で器高が4.5cm以上のものが依然として主流である。

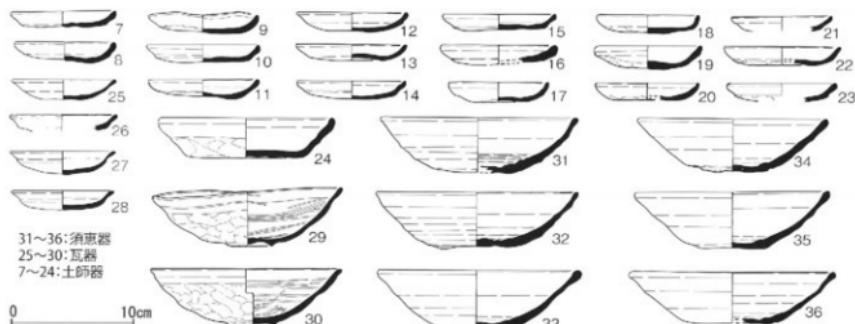


図55 長田神社境内遺跡第17次調査SK06出土遺物

長田神社境内遺跡第17次調査SK06の資料では、土師器小皿では口径9cm前後に中心があり、器高は、1.5cm以上が主流となっている。土師器大皿では14cmに口径の中心がある。体部上半のナデは1段ナデである。瓦器は底部から外上方に直線的に延びる体部を持ち、底部の高台の形状は断面三角形を保つが小さくなる。口径・器高共に、従来に近い口径15cm以上で器高が4.5cm以上を保っている。須恵器では、器高は、5cmを切っており、口径が16cm以上のものと共に、口径15.5cm、器高4.5cmといった法量の減少した事例も出現している。

松野遺跡第19次調査SK01の資料では、土師器の傾向はおよそ似た状況と思われるが、瓦器碗では、口径が15cmに近い値となってきており、高台も粘土ひもを貼り付けたような低いものへと変化している。

底部内面の暗文では、平行線を施すものもあるが、荒くなってきており、中には体部中段からの螺旋状暗文のみで終わるものも現れ始める。

二葉町遺跡久保町6丁目地区SP301の資料では、やや瓦器碗の口径に縮小の進行が認められるが、依

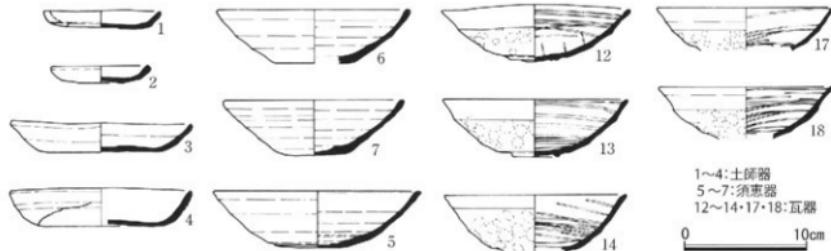


図56 松野遺跡第19次調査SK01出土遺物

然として口径は15cm、器高4.8cmである。二葉町遺跡久保町6丁目地区SP302の資料では、須恵器の底径が広がり、底部から緩やかに外上方に延びる体部を持ち、全体として、扁平な形状となってきている。

楠・荒田町遺跡第H15-1次調査SD01中層から出土した資料では、土師器小皿の口径に大きな変化は認められないが、器高は、1.5cmを中心とするようになり、器高が低くなってきていている。

二葉町遺跡二葉町6丁目地区SE306の資料では、土師器小皿の口径が9cm以下となり器高も1.5cm以下の事例となる。端部先端は三角形状というより、単に丸みを帯びたものへと変化している。体部外面は強い1段ナデにより、口縁部が外反する事例も認められる。瓦器椀では、口径は15cm以上を保ってはいるが、器高が4.1cmと極端に低い扁平な器形となってきている。底部外面の高台も粘土ひも貼り付けによ

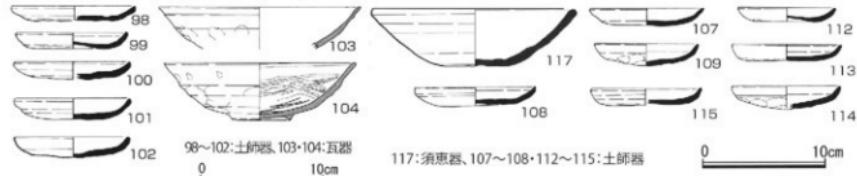


図57 二葉町遺跡久保町6丁目地区SE306出土遺物

図58 二葉町遺跡久保町6丁目地区SP302出土遺物

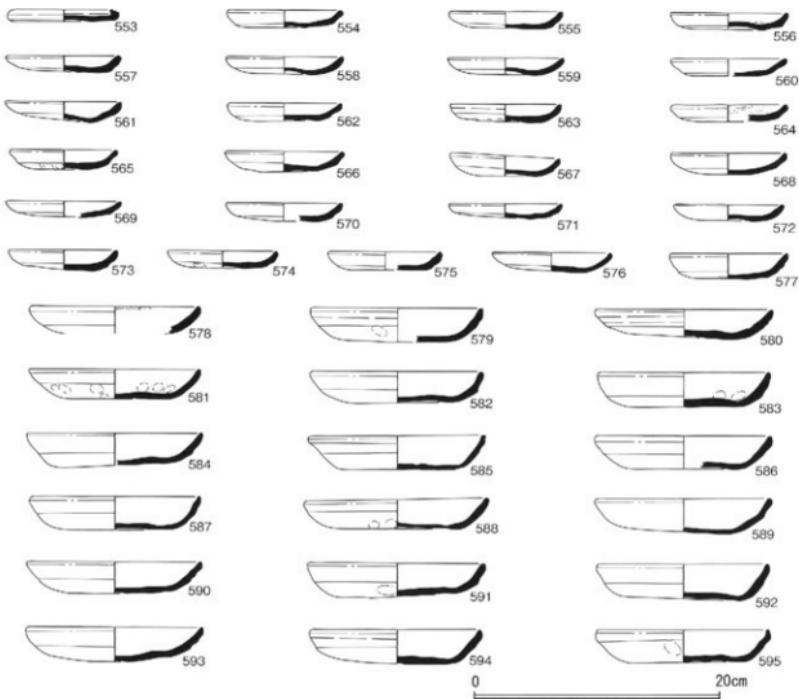


図59 楠・荒田町遺跡第H15-1次調査SD01中層出土遺物

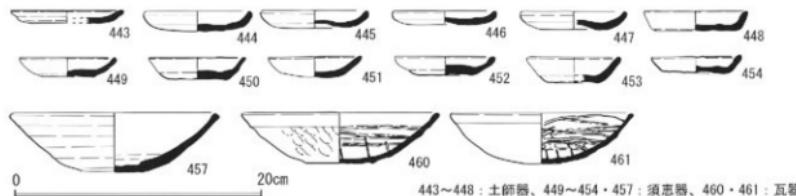


図 60 二葉町遺跡二葉町 6 丁目地区 SE306 出土遺物

る痕跡程度へと退化している。

松野遺跡 SE306 の資料では、土師器小皿が口径 8.5cm を中心とするようになっているが、器高は 1.5cm 前後である。須恵器椀は、口径を保ちながら器高を減じる傾向にあるため扁平な形状となる。

森北町遺跡第 20 次調査 SK08 出土の資料では、底部と体部の堀も不明瞭となってきており、底径も 5cm 程度となるため底部から延びる体部は以前に増して緩やかな立ち上がりとなる。

森北町遺跡第 20 次調査 SK08 出土の資料では、土師器小皿の口径が 8cm ~ 8.5cm を中心とするようになり、器高も 1.2cm 以下と法量の減少傾向が進んでおり、新しい傾向を示している。口縁部外面のナデも 1 段化が進み、その幅も狭くなる傾向が認められる。瓦器椀は、口径 15cm 前後で器高は、4.5cm 前後と法量の減少傾向が認められる。内面の暗文も荒く簡略化が進む。底部の高台も簡略化が進み、粘土ひも貼り付けの後、軽くまで断面三角形状にしようとしているが、わずかに痕跡のような部分も見られる。底径も、口径に対する比率は 24.3% ~ 28% と小さくなっている。

二葉町遺跡久保町 6 丁目地区 SX310 出土資料では、土師器皿は、口縁部の外面が浅い 1 段ナデであり、端部も丸く收める形状となっている。瓦器椀では、2 つのタイプが出土しており、口径 15cm と大きさを保ち、底部から内湾しながら立ち上がる体部で、器高が 4.0cm と低く、高台は粘土ひもを貼り付けただけのものと、口径 14cm と小振りで、器高 4.1cm で底部から直線的に立ち上がる体部を持つ形状のもがある。

篠原遺跡第 21 次調査 SK01 出土の資料では、須恵器が底部にふくらみを持ち始め底部と体部の堀が不明瞭となってくる。瓦器椀では、口径 14cm 前後、器高 4cm 前後のものと、口径が 12cm 近くで器高 3cm 前後的小振りのものとの 2 種類に分かれる。暗文も荒くなってしまっており、高台の形骸化もさらに進む。

二葉町遺跡二葉町 6 丁目地区 SX302 出土の資料では、土師器皿は口縁部外面の 1 段ナデは浅くなり、体部上

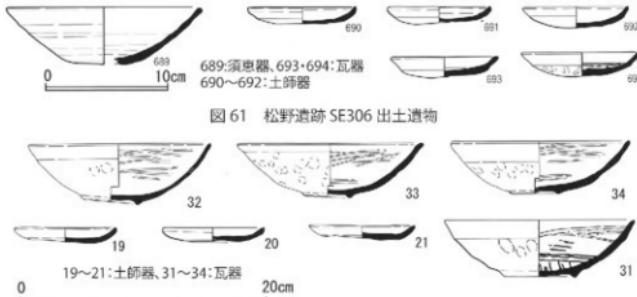


図 61 松野遺跡 SE306 出土遺物

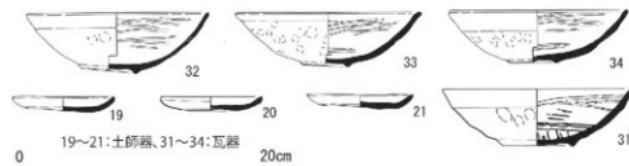


図 62 森北町遺跡第 20 次調査 SK08 出土遺物

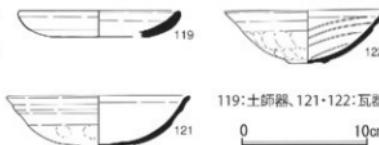


図 63 二葉町遺跡久保町 6 丁目地区 SX310 出土遺物

半から口縁部にかけてやや外反する。須恵器は底部外面が丸身を帯び、底部から延びる体部は直線的に広がる。瓦器椀は、口径 10cm 代の小型のもので、やや特殊な事例と思われる。暗文は荒く雜である。

森北町遺跡第 20 次調査 SK09 では土師器皿は口縁部外面の 1 段ナデは浅くなり、体部上半から口縁部にか

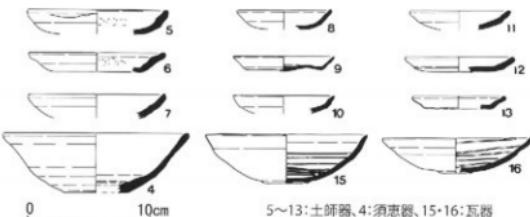


図 64 藤原遺跡第 21 次調査 SK01 出土遺物

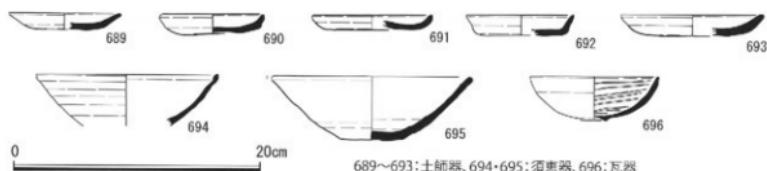


図 65 二葉町遺跡二葉町 6 丁目地区 SX302 出土遺物

けてやや外反する。口縁端部は単に丸く收める。瓦器椀では、口径 14cm 前後、器高 4cm 前後のものと、口径が 12cm 近くで器高 3cm 前後的小振りのものとの 2 種類に分かれる。暗文も荒くなっている。高台の形骸化もさらに進む。なお、二葉町遺跡二葉町 6 丁目地区 SE313 の瓦器椀は口径 14cm 前後、器高 4cm 前後のグルーブに属し、高台径は小さく暗文も荒くなっている。

森北町遺跡第 20 次調査 SX02 では、土師器皿の小型化が進み、器高が低くなっている。瓦器椀は、口径が 12cm 近くで器高 3cm 前後的小振りのグルーブに属するもののみで構成されており、暗文もわずかで、高台も痕跡を残すのみとなっている。

その他、明確な位置づけはできないが、二葉町遺跡久保町 6 丁目地区 SX302 の資料は、土師器皿が体部上半に 2 段ナデを施し、口縁端部外面に外傾する面を持つものが大半を占めている。ただし、246 の須恵器椀の資料は、高台状の高まりを残すが、体部外面下半を單なるナデによって仕上げており、古い時期の須恵器の資料とすることはできない。また、土

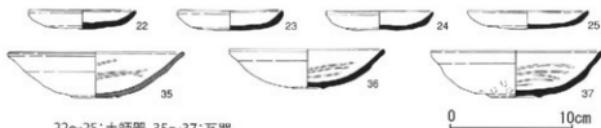


図 66 森北町遺跡第 20 次調査 SK09 出土遺物

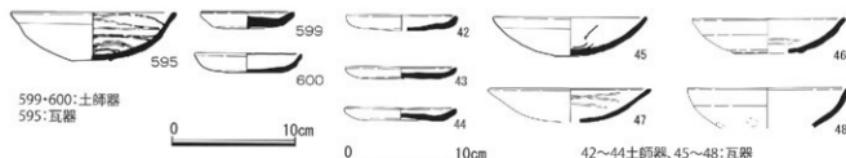


図 67 二葉町遺跡二葉町 6 丁目地区 SE313 出土遺物

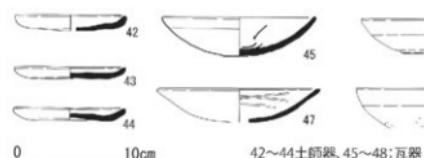


図 68 森北町遺跡第 20 次調査 SX02 出土遺物

師器皿の中に新しい傾向を示すものも含まれており、時期的には祇園遺跡 SX07 II - 1 期を中心とした時期の資料と考えられる。

二葉町遺跡久保町 6 丁目地区 SB308 の出土の瓦器資料では、口径が 15.6cm あり、器高も 5cm 前後である。高台径は 4.8cm あり、明瞭な断面三角形を呈する。瓦器のみの資料ではあるが、時期的には祇園遺跡 SX07 II - 1 期を中心とした時期の資料と考えられる。

生田遺跡第 4 次調査 SE4102 の資料は、土師器皿では、体部外面上半に 2 段ナデを施し、口縁端部外面に外傾する面を持つものがある。ただし、瓦器椀の法量は、口径 14.8cm、器高 4cm を測るものが含まれており、時期としては、祇園遺跡 SX07 II - 3 期ないしは楠・荒田町遺跡第 H15-1 次調査 SD01 最下層の資料を中心とした前後の土器が含まれている可能性がある。

松野遺跡 SX302 出土資料では、土師器皿では、体部外面上半に 2 段ナデを施す事例も存在するが、体部上半から口縁部にかけてやや外反する外面 1 段ナデの資料の方が量的には優勢である。瓦器椀としては、口径 15.6cm を測るが、器高は、4.6cm と低い。底部内面の見込み部分の暗文は平行線文であり、新しい傾向を示す。須恵器椀では、底径が 7cm 前後と広くなっている。内面の見込み部分にも明瞭な段差は認められない。時期としては楠・荒田町遺跡第 H15-1 次調査 SD01 中層と相前後する。

以上、神戸市域内の、六甲山南麓における土師器と瓦器・須恵器の共伴資料を中心に述べてきた。その中で、今回出土している SD01 の遺物群は、兵庫県が調査した SD01 最下層と土器様相がほぼ一致しており、瓦器椀自体も口径 15cm 以上で、器高がわずかに 5cm を切る事例が存在していることが確認された。また、SD01 自体が、その土器群のあり方から、完全に埋没するまでに土器型式の 2 型式以上の時間幅を

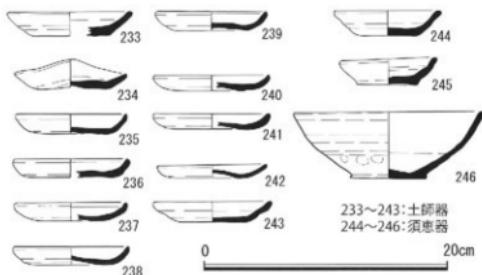


図 69 二葉町遺跡久保町 6 丁目地区 SX302 出土遺物

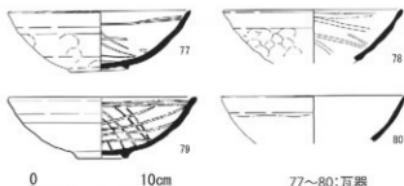


図 70 二葉町遺跡久保町 6 丁目地区 SB308 出土遺物



図 71 生田遺跡第 4 次調査 SE4102 出土遺物

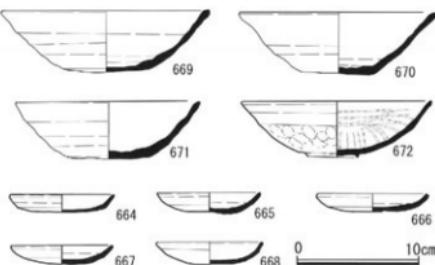


図 72 松野遺跡 SX302 出土遺物

持っている点も確認できた。これにより、13世紀代前半は、浚渫の実施などを含めてこの塙は機能していたと考えられる。その上で、塙の時期を改めて考えてみるならば、塙の最下層出土の時期が13世紀前半であり、中層の堆積に至るのは13世紀中頃と思われる。土器が示す時期はあくまでも埋没開始の時期であるため塙が掘られた時期については特定できない。しかしながらあえて推測するならば、最下層から中層への堆積吟刷幅が土器型式の1型式程度と推定することを前提に、塙の竣工後、最下層が堆積するまでに1型式程度の幅を持って考えることはそう無謀とも言えないであろう。推論の域を出ないが塙は12世紀末頃に掘られ、その後浚渫を繰り返しながらも13世紀後葉には埋没したものと考えられる。

なお、塙内から出土した遺物はすべて13世紀代のものであるが、いずれも京都系上師器の範疇にあり、その模倣のあり方もかなり忠実な方を示している。また、塙からは、口径14cm前後の上師器大皿が、一定量まとまって出土している。この器種は、祇園遺跡SX07や楠・荒田町遺跡第H15-1次調査SK01などごく限られた場所でしか量的な出土は認められない。それゆえに、SK01やSD01周辺の遺構の性格は、ある程度、祇園遺跡で示されているような、平家関連と同等に、都と強い結びつきを感じられ、平家が去った後でも、この地は都と強い結びつきを持っていた可能性がうかがえる。これらに閑連する遺構は確認できていないが、兵庫津周辺を中心として神戸が栄えた時期でもあり、この時期の遺構遺物は、周辺地域で資料の量も増す傾向にある。その意味からも、この地域を所領することは重要な意味を持っていたと考えられ、平家が去った後の所領争いも『九条家文書』『輪田荘々官源能信等中状』にもみられ、今回の調査区周辺にもこの地を所領した人物が関わった遺構が存在していた可能性がある。

参考文献並びに典資料目録

- 祇園遺跡 SX07Ⅰ期、祇園遺跡 SX07Ⅱ-1期、祇園遺跡 SX07Ⅱ-3期
　富山直人編 2000『祇園遺跡第5次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
楠・荒田町遺跡第H15-1次調査 SD01最下層、楠・荒田町遺跡第H15-1次調査 SD01中層、楠・荒田町遺跡第H15-1次調査 SK01
　別府洋二編 2008『楠荒田町遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告 第339冊 兵庫県教育委員会
長田神社境内遺跡第17次調査 SK06 阿部功編 2008『長田神社境内遺跡第17次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
松野遺跡 SK01上層　閑野豊編 2002『松野遺跡第11～23・25・26・29～31次 水笠遺跡第2・3・5～15・17～21次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
松野遺跡 SX302・松野遺跡 SE306　口野博史編 2001『松野遺跡発掘調査報告書第3～7次調査』神戸市教育委員会
二葉町遺跡久保町6丁目地区 SK311、二葉町遺跡久保町6丁目地区 SX310、二葉町遺跡二葉町6丁目地区 SE317
　東喜代秀編 2008『二葉町遺跡発掘調査報告書第14～21次調査』神戸市教育委員会
二葉町遺跡第22次調査 SE315、二葉町遺跡第22次調査 SE317、二葉町遺跡第22次調査 SE318、二葉町遺跡第22次調査 SX301
　阿部功編 2010『二葉町遺跡第22次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
二葉町遺跡久保町6丁目地区 SB308、二葉町遺跡久保町6丁目地区 SP301、二葉町遺跡久保町6丁目地区 SP302、
二葉町遺跡久保町6丁目地区 SE301、二葉町遺跡久保町6丁目地区 SE302、二葉町遺跡久保町6丁目地区 SX302、
二葉町遺跡二葉町6丁目地区 SE304、二葉町遺跡二葉町6丁目地区 SE306、二葉町遺跡二葉町6丁目地区 SE312、
二葉町遺跡二葉町6丁目地区 SE313、二葉町遺跡二葉町6丁目地区 SX302
　川上厚志編 2001『二葉町遺跡第3・5・7・8・9・12次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会
上沢遺跡第20次調査 SE01 橋詰清孝 2001『上沢遺跡第20次調査』『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
福原遺跡第21次調査 SK01 黒H恭正 2003『福原遺跡第21次調査』『平成12年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
生田遺跡第4次調査 SE4101、生田遺跡第4次調査 SE4102
　中谷正 2009『生田遺跡第4次調査の整理』『平成18年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
大開遺跡第4次調査 SE04 富山直人 1995『大開遺跡第4次調査』『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
森北町遺跡第20次調査 SK08、森北町遺跡第20次調査 SK09、森北町遺跡第20次調査 SX02
　中居さやか編 2004『森北町遺跡20次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会
(今山掲載した資料の内神戸市の資料については再実測を実施した資料が多い。また、兵庫県の資料については一部加筆の上掲載している。)

第2節 発掘された福原の全容

平家の栄華衰盛からみると、平家はもともと板東武者であったが、その流れをくむ伊勢平氏が西日本に進出し、成功を収め、栄光を手にするのであった。その流れの中でも、今回問題となる福原の地がいつ頃平家の所領となったかは判然としない。応保二（1162）年に平家の家使が検注をおこない、押領したとの記録が九条家文書の建仁二（1202）年の記録に認められ、おそらくこのころに平家の所領として取り扱われたのである。つまり、応保二（1162）年に平家の所領とした後、この地に別荘を造り始めたとみられ、仁安二（1167）年に清盛が太政大臣を辞してからは、この地が清盛の主な居住地となっていたようである。

表5 平家開拓年表

西暦	和暦	出来事	天皇	院	摂政	將軍
1132	長承1	3月、備前守平忠盛、内昇殿を許される。	崇徳	鳥羽	忠道	
1133	長承2	8月、宋船、肥前神崎莊に來着。平忠盛、交易を行う。				
1147	久安3	4月、延暦寺大衆、平忠盛・清盛の流罪を求め、強訴。				
1156	保元1	7月、保元の乱	後白河			
1158	保元3	8月、平清盛、大宰大式となる。	二条	後白河	基実	
1159	平治1	12月、平治の乱。				
1160	永曆1	2月、上皇、清盛に命じ、藤原經宗・推方を追捕。3月、頼朝、伊豆に配流。				
1161	応保1	9月、平教盛・時忠ら、陰謀により解官される。				
1162	長寛2	9月、平家納経。12月、清盛、蓮華正院を造進。				
1167	仁安2	2月、清盛、太政大臣となる。5月、平重盛、西国・東国の大賊・山賊の追捕使となる。	六条		基房	
1170	嘉応2	7月、摂政藤原基房、半資盛の無礼を怒り、車を壊す。平氏これに報復。				
1171	承安1	10月、法皇、清盛の摂津攝原の別荘に赴く。				
1174	承安4	3月、法皇・建春門院、巣島に参詣。				
1177	治承1	6月、鹿ヶ谷の陰謀。				
1179	治承3	7月、平重盛没。11月、清盛、武力により閑白をかえ、院の近臣39人を解官、院政を停止。			基通	
1180	治承4	5月、以仁土の乱。6月藤原遷都（11月遷都）。8～9月、源頼朝・義仲、挙兵。10月、頼朝、鎌倉入り、富士川で平氏を破る。12月、平重衡、南都を攻め、東大寺・興福寺を焼く。	安徳	高倉		
1181	養和1	1月、平宗盛、畿内近畿9か国の大總管となる。閏2月、平清盛没。3月、源行家、尾張黒俣で平重衡らに大敗。		後白河		
1183	寿永2	7月、平氏、天皇・神器を奉じ西海に亡むかゝ、義仲・行家人京。	後鳥羽			
1184	元暦1	1月、義仲、征夷大将軍となる。範頼・義経、義仲を破り入京。義仲敗死。2月、範頼・義経・ノ谷に平氏を破る。			師家	義仲
1185	文治1	2～3月、義経・屋島・壇ノ浦で平氏を破る。平氏一門滅亡				
1189	文治3	閏4月、藤原泰衡、義経を襲い殺す。7月、頼朝泰衡追討			兼実	
1192	建久3	8月、頼朝、將軍家政所を開設				頼朝

ここでは、文献にみられる福原について、その周辺地域も含め調査成果からその一端に触れてみたい。

中世の条里遺構

まず、福原周辺におけるこの時期の条里の調査成果についてみてみよう。

兵庫県神戸市長田区二葉町遺跡の鉢溝は、現行地割りにほぼ沿うものであり、時期としては12世紀後半とされている。この鉢溝の他に、神戸市長田区御蔵遺跡¹や神戸市長田区松野遺跡²など、現状の地割り方向に一致する鉢溝が多く確認されている。これらの鉢溝の多くが12世紀から13世紀にかけてのものであり、広範囲にわたっての現況方向の地割りの成立は、13世紀前半にはすでに存在していたと考えられるのである。

たとえば、二葉町遺跡における調査³において、確認されている建物群は、11世紀中頃から13世紀前半が中心であり、多少のぶれはあるが、おおよそ現在の地割りにそった方向をとっている。

特に、二葉町遺跡久保町6丁目地区の事例では、多数の建物が確認されているが、その建物の多くが鉢溝の方位に近く、それぞれ微妙に方位を違えているのである。これは、大きくは共通の方位を持ちながら周囲の微地形によって耕作地の区画がやや異なっていたと考えられ、それに伴い建物も、耕作地の区画によって、その方位をあわせていたことに起因すると思われる。このことから、断片的であるにしても十三世紀中頃には、八部郡平野部の広域的な条里が存在したと考えられるのである。条理地割りによる土地区画の整備は段階的に行われたのかもしれない。

祇園遺跡は神戸市兵庫区上祇園町に所在している。祇園遺跡の周辺は昔平野と呼ばれていた地域で、平清盛が別荘を建てた場所と推定されている地域である。

祇園遺跡は、平成5年度（1993）より調査が開始されており、京都系土師器が出土するほか、庭園遺構の検出された遺跡としても著名である。そのつくりは、とても精緻で京都の同時期の庭園遺構と比較しても、遙かに早い見事なものである。この庭園遺構の時期は、土器型式からみておおよそ2型式の時期幅に収まるもので、非常に短時間のうちに何度も補修と改修が行われていたことが確認されている⁴。そして、時期的には、清盛が福原を「遁世退老之幽居」としていた時期と一致するのである。また、輸入陶磁器などの出土も認められ、遺構と遺物の内容から、平氏の中でもかなり身分の高い人物の別荘であった可能性が高いのである。なお、庭園遺構の洲浜をもつ堤が、約N—52°—Eの東西方向をとるもので、現状の小径がその直上を並走している。これとは別に、同時代と考えられる石垣等が検出されており、この石垣はN—34°—Wの南北方向をとるものである。

この庭園遺構からは、多量の土器が出土しており、その大半は土師器であった。土師器の多くが京都系土師器に属するもので、ほとんどが2次模倣系に属しており、直接的に京都の土器を模したか京都からもたらされたと考えられるのである。それに対して、在地系とされる轆轤成形による土器はわずか0.6%にすぎないのである。

京都という都で生活するか、京都と密接に関係していたとされる人物の別荘では、それが京都から離れた地方であっても、そこで使用する文物は必然性を以て京都からもたらされ使用されていたようである。

その他の福原関連の遺跡

祇園遺跡の南にある楠・荒田町遺跡内にある国立大学法人神戸大学医学部附属病院の増築・立て替え時の関連の調査で福原京に関する遺構が確認されている。楠・荒田町遺跡第2次調査では、大型の柱掘形をもつ掘立柱建物と共に2条の塹が確認されている⁵。建物の方位は、約N—40°—Wである。しかし建物の南で確認されている2条の塹は、方向が建物とは異なり、約N—70°—Eの方向をとるものである。

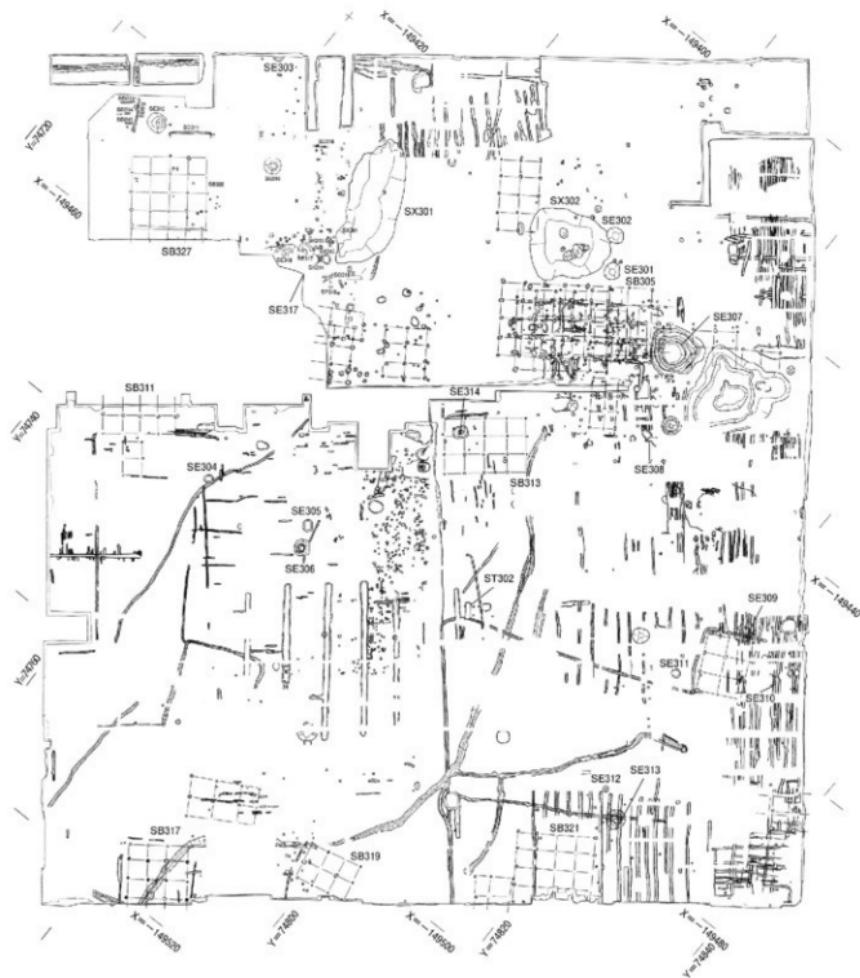


図73 二葉町遺跡久保町6丁目地区遺構全体図

この塚は今回の調査でも確認したもので、埋没時期は、U字形塚（SD02）が先行している。V字形塚（SD01）の北側斜面に上器が集中して出土することから、土器は、塚の北側から投棄されたと考えられ、京都系土師器を使用するような邸宅は塚の北側にあったと考えられる。塚の性質は、その後も何度も同方向に溝が築かれていることから、坪境に当たると考えられ、邸宅の境界であると共に、坪境としての機能も兼ね備えていたと考えられる。しかしながら、本来塚が築かれた当初には幾つかの軍事的機能も考慮されていたと考えたい。

また、国立大学法人神戸大学医学部附属病院周辺でも調査が行われており、楠・荒田町遺跡第10・11

次調査⁶では、壕状遺構が確認されている。この壕状遺構は、幅約5m、深さ1.7mを測る断面V字状のもので、時期としては、12世紀から13世紀と考えられる。この遺構の方位は、明治19年（1886）作成の假製地形図に見られる地割り方向に近い方位をとるものである。

また、楠・荒田町遺跡第12次調査⁷では、溝が一条確認されている。この溝は、2段に掘り込まれており、幅5m以上、深さ1.4m以上を測るものである。溝幅は推定で、10m近いものであり、時期としては12世紀後半から13世紀と考えられている。溝の方位は、楠・荒田町遺跡10・11次調査で確認されている壕状遺構とほぼ一致している。

楠・荒田町遺跡第16次調査⁸では、柵によって区画された掘立柱建物群10棟が確認されている。これらの建物の内、SB02とSA01が11世紀後半、SB03が12世紀代、SB09・SB10が13世紀代と時期がある程度特定できる。これらの内、12世紀代とされるSB03の方位は、N-39°-Wで、こ



図74 楠・荒田町遺跡周辺旧地形図

の方針とほぼ一致する建物や柵列としては、SB02・SB05・SA01・SA05がある。SB03の示す方位は、明治19年（1886）作成の假製地形図に見られる周囲の地割り方向に近い方位をとるものである。

福原離宮の範囲

現時点における福原に関する調査成果によれば、以下のような状況が理解される。福原周辺でも湊川以西では、特に福原離宮などとは関連づけて考える必要のあるような遺構や土器様相等がみられず⁹、現時点では福原離宮の範囲は、湊川以東を中心とした地域と考えられる。このほかに、東は宇治川周辺までを含む範囲とし、北を山裾まで、南を楠・荒田町遺跡第12次調査区あたりまでとし、方位を、明治19年（1886）作成の假製地形図に見られる地割り方向に近い方位とする、おおよそ平安宮城に近い範囲が得られるのである。福原離宮は、六甲山南麓の山裾に位置しており、北東から南西に延びる大倉山と会下山の丘陵によって囲まれている。湊川西岸は、会下山の丘陵が迫っており、離宮の背後には急峻な山が迫っている。このように囲まれた領域への進入には、湊川東岸で大倉山までの間の狭い空間しかなく、この間に進入するための主要な道路があつたと考えられる。

福原離宮周辺出土の土器

次に各調査地から出土した土器の状況についてみてみることとしよう。

二葉町遺跡は海岸線から 500 m に位置した、海に近接した集落である。遺跡の位置する周辺は、12世紀頃、「小馬林」(現在の駒ヶ林)と呼ばれていた地域に相当する。この遺跡の久保町 6 丁目の SB305 から遺物がまとまって出土しており、時期としては、12世紀前葉と考えられる時期の建物である。図示された上師小皿 15 点の内、11 点は回転系の在地の土師器で占められている¹⁰。SB06 は、12世紀中葉と考えられる時期の建物である。この建物から出土した土器の中には、京都系土師器が一部含まれているものの、全体としては在地色の強い土器様相で占められている。また、紙園遺跡と同時期と考えられる久保町 6 丁目地区の SE301・SX301 などの遺構でも糸切りによる底部をもつ土師器皿の占める割合が高く、てづくねによる土器にも紙園遺跡と比較して、在地性の強いものとなっている。二葉町遺跡の場合、11世紀以降、在地の土器の混在化が始まり、てづくねの土器も京都系土師器からみると時期の変化と共に、在地的な要素が進むようである。

松野遺跡で確認されている中世の遺構の大半は、13世紀代に入ってからのものである。それぞれの遺構から出土した土器としては、須恵器の占める比率が高く、その割には、底部糸切り痕をもつ上師皿が認められるなど、在地色の強い様相をもっている¹¹。てづくねの土器においても、紙園遺跡出土の土器群とは違いが認められるのである。

若松町遺跡において 12世紀中頃の木棺墓が調査されており、これに伴って土器が出土している¹²。糸くら輪成形による在地系土器が一定量含まれている。紙園遺跡成立以前における地域的な土器様相としては、てづくねの土器においても在地化が進みはじめ、土師器皿全体の内、回転系土師器皿が一定量含まれるようになってくるのである。紙園遺跡の土器様相は、従前からの地域的土器様相の流れからみても、特異な状況を示しているのである。

この他、大間遺跡や五番町遺跡においても、紙園遺跡との土器様相に関する対比において、同様な状況がうかがわれる¹³。

以上、紙園遺跡周辺の中世集落は平家所領になる段階前後から福原遷都と京都遷都にいたるまで、出土した土器の実態からみて、ほとんどその様相に変化が見られない。つまりは、在地性の強い集落が点在すると理解できる。唯一、平清盛の別荘や福原行幸に関わる中枢部分にのみ、通常集落にない遺構・遺物が認められるのである。具体的には紙園遺跡にみられる上師器や輸入陶磁器がそれぞれ京都や各地からもたらされ、限定された地域で、一部の階層の人たちが使用したことを示す。史料に頼る限り、福原の開発とその時期は極めて限定的で平家とその周辺の階層の人たちの様相が議論の中心である。今後、福原周辺に平安京の下層階級の人たちや庶民がどのように関わり、開発が進められていったのか解明されることが期待される。

大輪田泊（兵庫津）

本来、平家は、福原の宮城と共に、港を整備し、一体としてひとつの都市を造り上げようとしていたと考えられる。ところが、大輪田泊、後の兵庫津の実態はまだ殆ど明らかとなっていない。現時点での、文献にみられる港の様子と調査成果を基に兵庫津について若干の考察を行いこれに変えたい。

文献にみられる大輪田の泊

大輪田泊が文献に最初に現れるのは、『日本後紀』弘仁三年（812）の改修記事が最初である。このことから、9世紀には大輪田泊が、港として機能していたことが窺える。しかしながら、律令体制の弱体化

と共に、その維持管理は失われていくようであり、『日本紀略』大曆元年（947）の記載を最後に資料から消えてしまう。再度大輪田泊が現れるのは『帝王編年記』承安三年（1173）で、清盛が経ヶ島を築くとみえる。この後、『玉葉』・『東大寺文書』の治承四年3月20日に大輪田泊修築の記載が認められるが、福原遷都や政情不安により、工事は完成しなかったと考えられる。

平家滅亡の後、重源によって修復された港は、名を兵庫津と改められて、その後の貿易に重要な役割を果たし、東大寺の再建と並みにおおいに貢献したと考えられている。『火躬卿記』弘安八年（1285）龜山上皇の訪問記事に兵庫島として、記載されており、船が数百隻にものぼるとある。また、ほぼ同じころの一通聖絵にも兵庫津に複数の家屋が描かれており、このころの町屋のにぎわいを今に伝えており、このころから、町屋が形成され始めたと考えられている。そして、その後、兵庫津は口明貿易の中心的な港としてその繁栄を極めるのである。

このように文献では、神戸の港の発展が追えるのであるが、実際の発掘調査ではどの程度明らかになっているのであろうか？

兵庫津遺跡

近年の発掘調査でも、調査成果としては、その殆どが近世の町屋に関するもので、中世以前にさかのぼると考えられる遺構などは少ない。ここでは、わずかではあるが、中世以前の遺構又は遺物の出土した調査の事例を挙げて、平家の経済基盤の一翼を担った福原京期の港について考えてみたい。

調査によれば、確実に港と断定できる遺構を確認できていないものの、兵庫津遺跡第32次調査では、奈良時代から平安時代にかけての遺構遺物が確認されている。また、第2次調査においても10世紀から11世紀にかけての遺物が出土している。また、第26次調査では真光寺境内の北東側側溝を確認しており、現在の真光寺が創建時から殆ど動いていないことが確認された。さらに、第13次調査でも12世紀以降の遺構・遺物が確認されている。これらの調査から、断片的にではあるが、この地に12世紀末頃には、町屋が形成されていったと考えられる。そして、また、第13次調査で確認された溝の状況からすると、現在の町屋の状況が中世に完成された町割をかなりの部分踏襲していることもわかってきてている。

また、第2次調査の地点が10世紀時点で既に生活可能な土地として存在していることからみても、真光寺からある程度南側までは陸地として広がっていたものと考えられる。

これらのことからみて、兵庫津遺跡第2次・26次調査の東側に旧の淡川が流れしており、中世までの港は、本来河口部分に施設を設けることが多いことからみても、そのどこかに港は存在していたものと考えられる。ただし、第13次調査の区域をさける必要性があることからみても、第26次調査と第13次調査の間か、第13次調査の東側のいすれかを旧淡川は流れていたと考えられる。

楠・荒田町遺跡の二重塹¹⁴

最後に、今回の調査で確認した二重塹を検討し、出現期の武家、平家の実像に迫りたい。

今回の調査で確認した塹は軍事的性格の可能性や屋敷を囲む溝、ないしは坪境としての役割などいくつかの顔を持ち合わせているが、周辺の調査でも1100年代後半以降の遺構がいくつか確認されている。

二重塹の南側では、楠・荒田町遺跡第26次調査で、L字型に配備された2棟の建物が検出されたほか、それを囲むように東西南北方向に走る溝が検出されている¹⁵。溝に囲まれた範囲は54mと半町四方の方形地割りを示している。時期としては楠・荒田町遺跡第H15-1次調査確認したV字形塹（SD01）に近い時期と考えられる。南北方向の溝の方位は、N-16°～17°-W前後をとり、二重塹の方位から直交した方向に近い方位を示している。また、鎌倉時代の遺構も確認されているが、それらの主な方位は12世

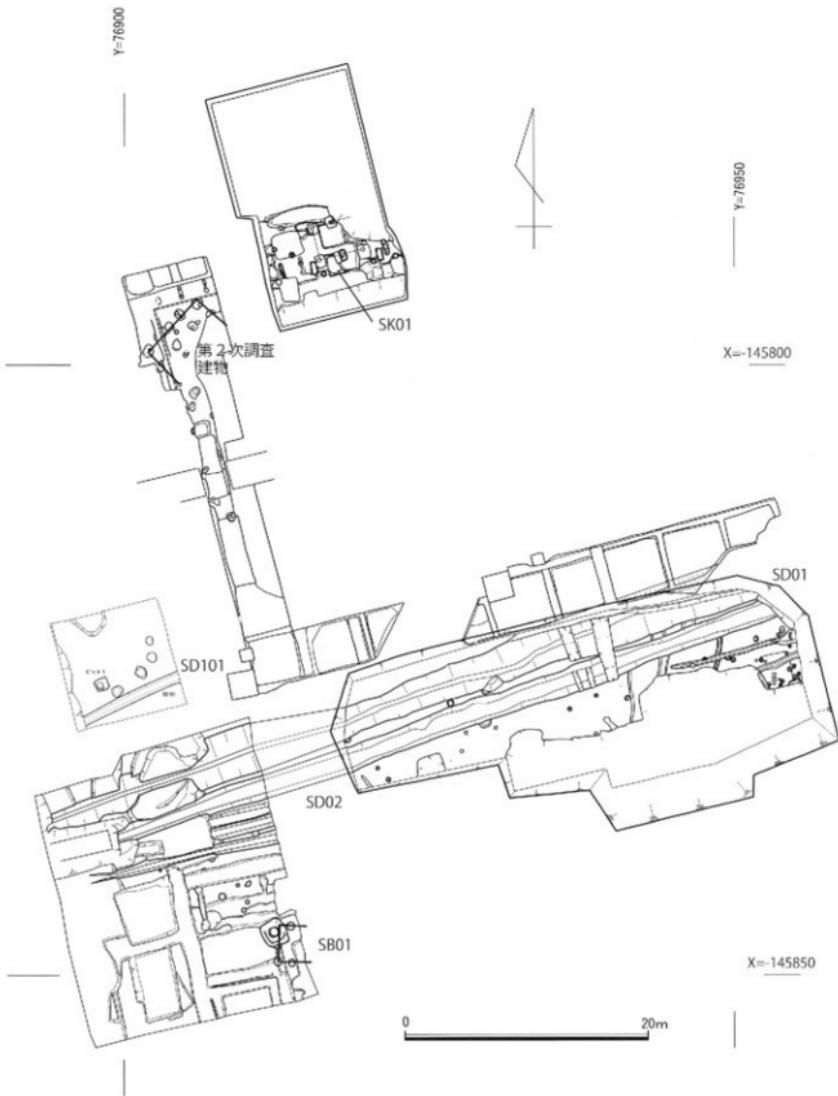


図 75 二重塹跡周辺遺構平面図

紀代のものとほぼ一致しており、基本的には 12 世紀代に形成された地割りを踏襲していたものと考えられるのである。

二重塙の北側では、楠・荒田町遺跡第 2 次調査で検出された N—40°—W 前後の方位をとる大型の柱掘形をもつ掘立柱建物がある。ただし、この建物については、すでに述べたように、12 世紀以前にさかのぼる可能性が高い。その他に、祇園遺跡の時期とほぼ一致する土坑（SK01）からは、大量の土師器が出土している¹⁶。

また、兵庫県教育委員会によって実施された、国立大学法人神戸大学医学部附属病院内における調査成果では、54 m四方、およそ半町四方を溝で区画された範囲が特定されている。その中に U 字形に配附された二棟の建物を確認しているが、他の区画内の詳細な建物配置は不明である。この区画溝は、二重濠と微妙に方位を違えており、楠・荒田町遺跡第 2 次調査で確認されている建物とも方位が異なっている。

これらのことから考えられるのは、今回の調査で確認されている SBO1 の方位のようにほぼ北にあわせた方位を持つものが 11 世紀初頭には存在していたが、この周囲を再開発する段階ではやや異なった方位を持つ区画を選択したと考えられる。そしてその区画は、半町四方の区画であることから、貴族、特に平家一門の重要な人物の建物とは考えにくいのである。あえて言えば、福原行幸後の急造の邸宅群のひとつとも考えられるのである。そのことは、区画に埋められた建物の柱掘形が一辺 50cm の方形と大型ではあるが、さほどの規模の建物との評価を考えにくいくとも、この区域が中心的な建物群の開発区域でなかったことの傍証となろう。さらにいえば、その開発にあたっては、11 世紀代の従前の方向とは異なるものの、周囲の方向や地形の制約の中で行われており、あえて、真北を意識したようなものではない。

また、楠・荒田町遺跡第 10・11 次調査や楠・荒田町遺跡第 12 次調査の溝は、隣接する地域の地割りと一致するものの、その溝幅は、邸宅を囲むようなものとは考えられない。どちらかといえば道路の側溝のようなものと考えられるが、断面 V 字状であることからみて、防御的な側面も含んだものと考えられる。

いずれにしても、福原離宮やその周辺には、V 字形の断面を持つ溝が幾つか存在しており、その地形との関係からみても、防御的な性格がかいみられる。このことは、福原の地に、平家の邸宅群があり、福原離宮としての性格と共に、武家の防御拠点としての側面も併せ持っていたものと考えられる。本来ならば、都の建設にみられる変遷としては、中世都市鎌倉でも認められるように、防御拠点から都市への移行には、V 字形溝から箱掘溝への変化が伴う。その意味では、新京建設を平家という武家の私財で進行していた福原は、防御的な性格が付け加えられたと考えられるのであり、真の都市への移行には今しばらくの時間が必要だったと考えられる。これは、調査で確認できている 2 重塙の内、U 字形塙（SD02）が先行し、V 字形塙（SD01）が後から築かれるということは¹⁷、本来貴族的な側面を有した平家の邸宅を区画するないしは、領域を区画する溝であったものが、真の武家へと目覚めつつあった平家の居宅群において、時代の流れと共に必要性から防御的性格の V 字形塙（SD01）が新たに加えられたと考えることもできる。

それにしても、福原の状況をつぶさにみれば、北面武士として、その尖端としては貴族の一員であった平氏が、新たな時代を切り開く武家へと目覚めようとしていたその方向性が浮かんでくるのである。しかしながら、それも、平家を襲った数々の不幸、さらには清盛の死と共に、頓挫してしまったのである。

このように、様々に新たな方向性を持ち始めていたものの結局、新たな時代を迎えることなく、平家は滅びてしまうのであり、新たな都市として成立するはずであった福原もまた夢に終わってしまったのである。やがて政権は鎌倉に移り、京都も平穏な内に新たな発展を遂げる。歴史の中に取り残された福原に昔の面影は少なく、地割りの一部が耕作地の区画として現在まで受け継がれてきただけである。

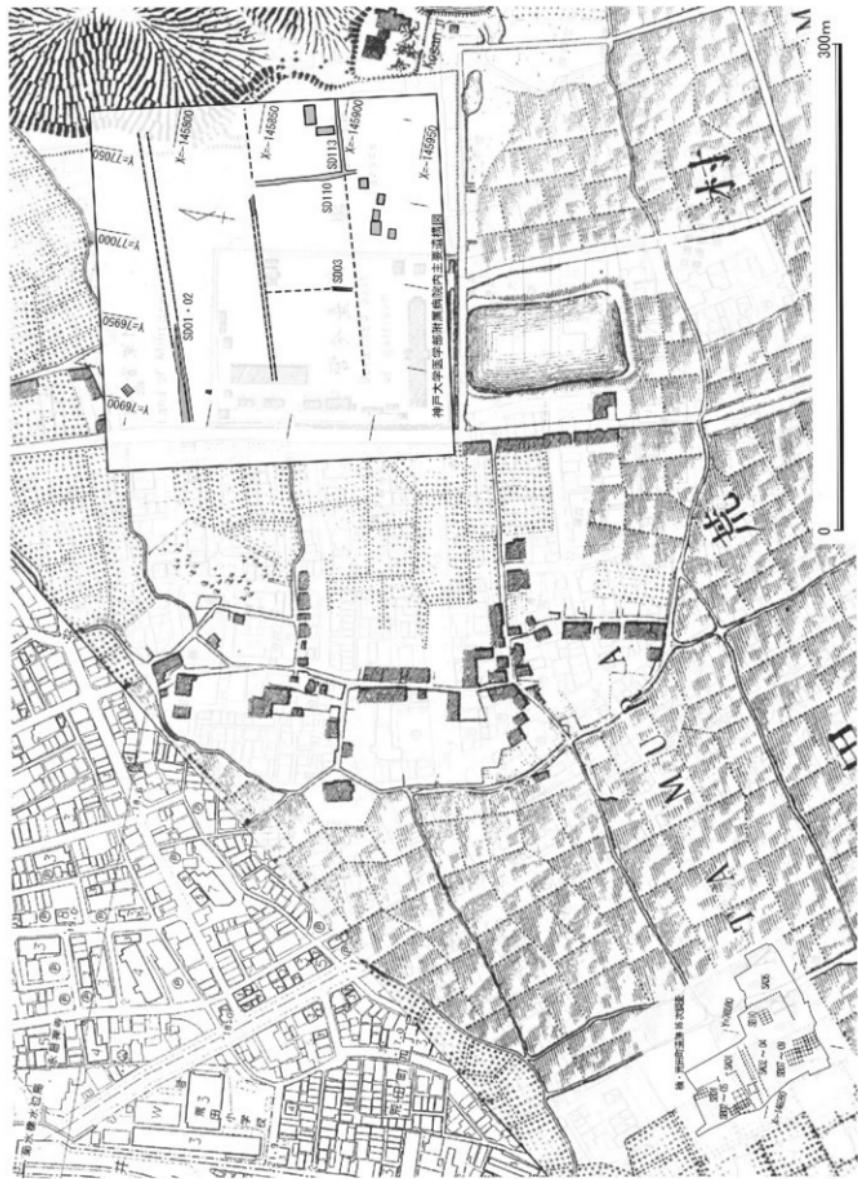


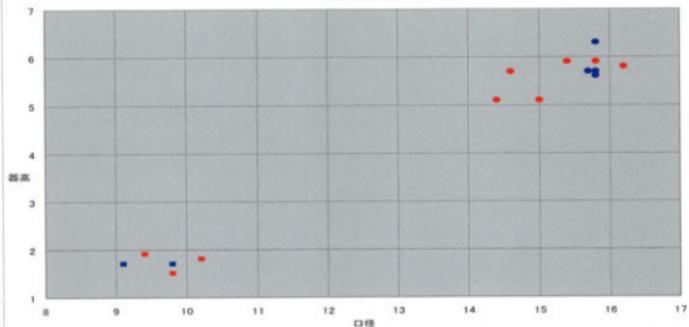
図 76 楠・荒田町遺跡主要遺構の位置関係図 (S=1/3000)

参考文献・註

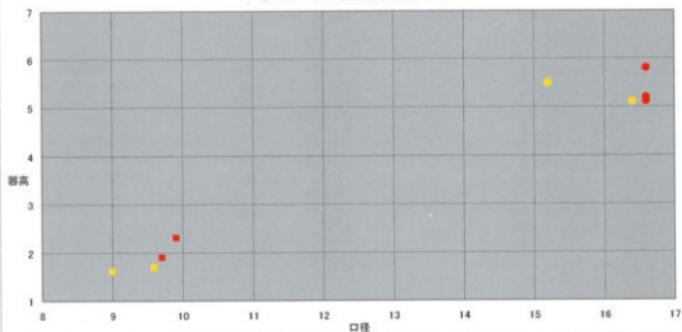
- ¹ 富山直人 2001 「御藏遺跡六丁目北地区の調査」『御藏遺跡』神戸市教育委員会
- ² 口野博史編 2001『松野遺跡発掘調査報告書第3～7次調査』神戸市教育委員会
- ³ 川上厚志編 2001『二葉町遺跡第3・5・7・8・9・12次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会、東喜代秀編 2008『二葉町遺跡発掘調査報告書第14～21次調査』神戸市教育委員会、阿部功編 2010『二葉町遺跡第22次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- ⁴ 富山直人編 2000『祇園遺跡第5次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- ⁵ 岡田章一他編 1997『楠・荒田町遺跡－神戸大学附属病院構内遺跡－』兵庫県文化財調査報告 第162冊 兵庫県教育委員会
- ⁶ 真野 修 1990『楠・荒田町遺跡発掘調査概報』一五次－神戸市教育委員会
- ⁷ 香本宏明 1992『楠・荒田町遺跡』『平成元年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- ⁸ 黒田恭正 1995『楠・荒田町遺跡第11次調査』『平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- ⁹ 富山直人 2003『都へのまなざし』『文化財論集』II
- ¹⁰ 川上厚志編 2001『二葉町遺跡第3・5・7・8・9・12次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- ¹¹ 口野博史編 2001『松野遺跡発掘調査報告書第3～7次調査』神戸市教育委員会
- ¹² 口野博史 2001『若松町遺跡』『平成10年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- ¹³ 富山直人 2000『祇園遺跡周辺の遺跡の概要』『祇園遺跡』神戸市教育委員会
- ¹⁴ 別府洋一編 2008『楠荒田町遺跡II』兵庫県文化財調査報告 第339冊 兵庫県教育委員会
- ¹⁵ 岡田章一他編 1997『楠・荒田町遺跡－神戸大学附属病院構内遺跡－』兵庫県文化財調査報告 第162冊 兵庫県教育委員会、別府洋一編 2008『楠荒田町遺跡II』兵庫県文化財調査報告 第339冊 兵庫県教育委員会
- ¹⁶ 別府洋二編 2008『楠荒田町遺跡II』兵庫県文化財調査報告 第339冊 兵庫県教育委員会
- ¹⁷ 別府洋一：2008「12章まとめと考察 第2節 遺構と遺物」『楠荒田町遺跡II』兵庫県文化財調査報告 第339冊 兵庫県教育委員会 p118～120

図 版

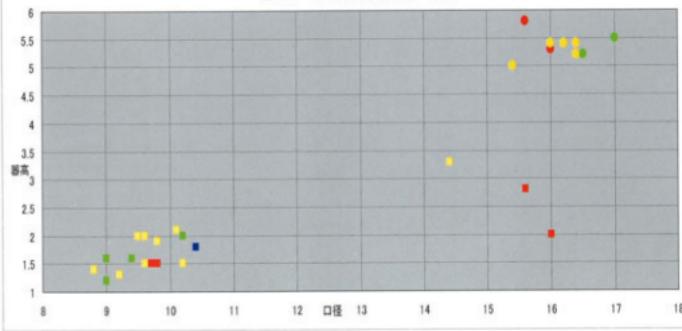
グループA径高分布グラフ



グループB径高分布グラフ

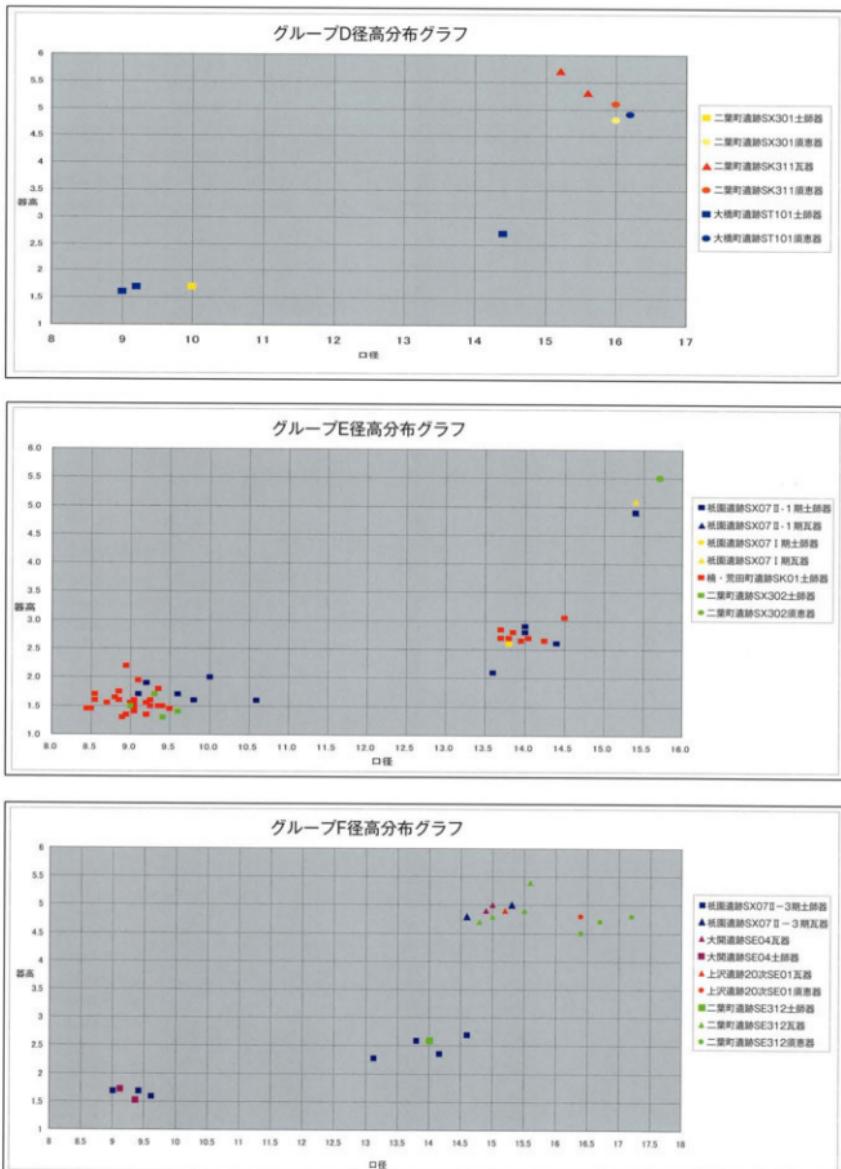


グループC径高分布グラフ



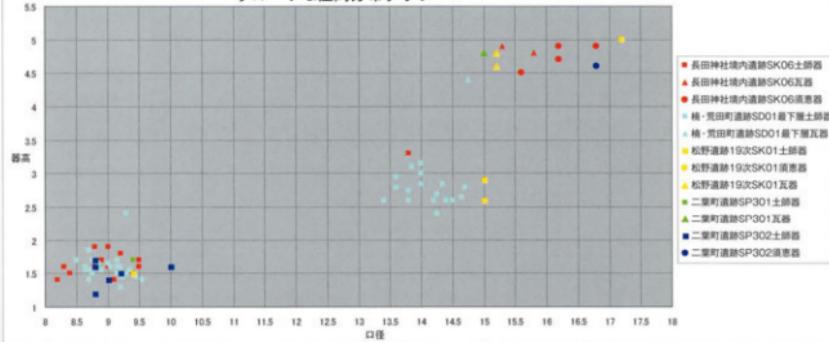
径高分布カラーグラフ 1

カラー図版 2

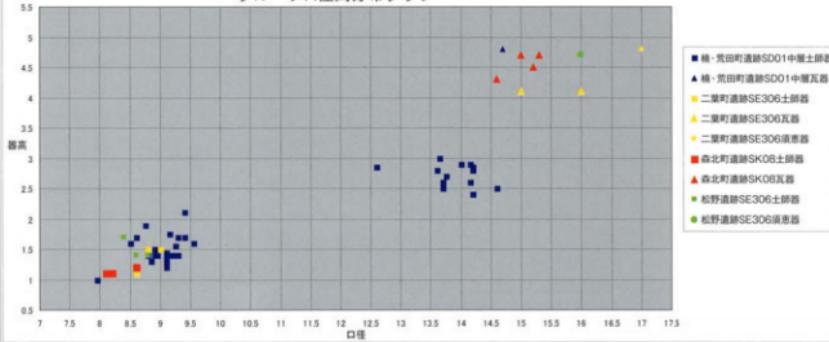


径高分布カラーグラフ 2

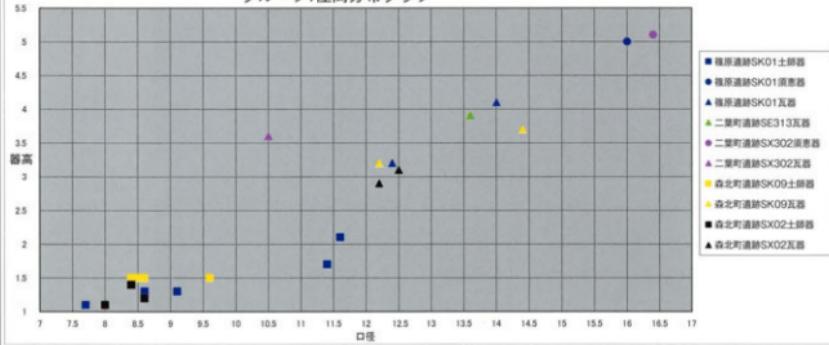
グループG径高分布グラフ



グループH径高分布グラフ

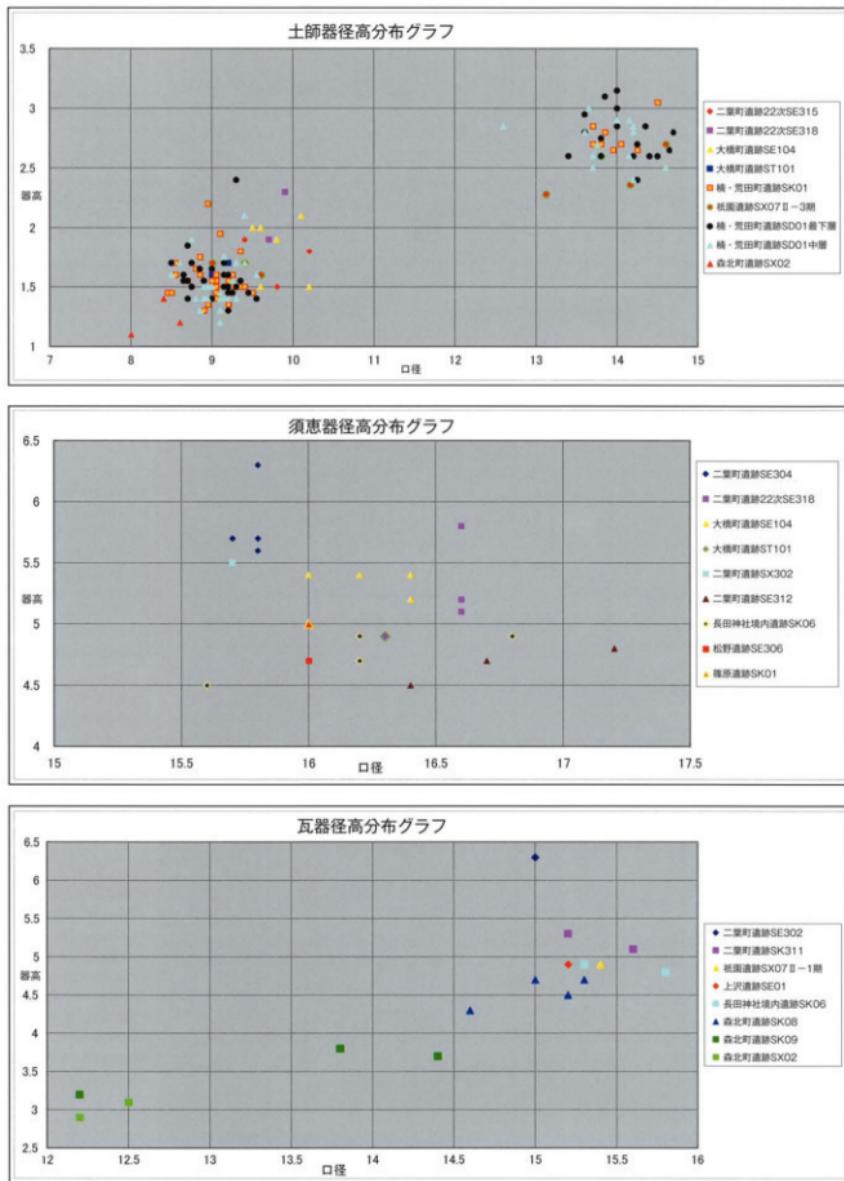


グループI径高分布グラフ



径高分布カラーグラフ 3

カラー図版 4



径高分布カラーグラフ



楠・荒田町遺跡第46次調査区全景垂直写真

カラー図版 6



楠・荒田町遺跡第46次調査区北半全景垂直写真



楠・荒田町遺跡第46次調査区北半遠景写真

カラー図版 8



楠・荒田町遺跡第46次調査区北半全景写真



楠・荒田町遺跡第46次調査区北半斜め遠景写真



楠・荒田町遺跡第46次調査区北半SD01・SD02土層断面写真

カラー図版10



楠・荒田町遺跡第46次調査区北半SD01全景写真



楠・荒田町遺跡第46次調査区北半SD01土層断面写真



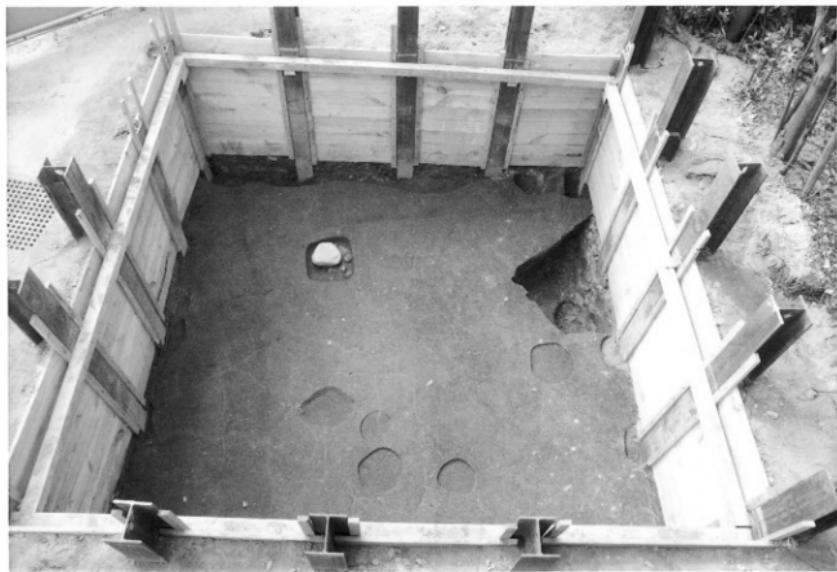
楠・荒田町遺跡第46次調査区北半SD02全景写真



楠・荒田町遺跡第46次調査区北半SD02土層断面写真



橋・荒田町遺跡第46次調査SD01出土遺物集合写真



楠・荒田町遺跡第42次調査第1遺構面全景（東から）



楠・荒田町遺跡第42次調査第2遺構面全景（東から）

図版 2



楠・荒田町遺跡第42次調査SD101遺構土層断面（西から）



楠・荒田町遺跡第42次調査P102土層断面（南から）



楠・荒田町遺跡第42次調査P101（北から）



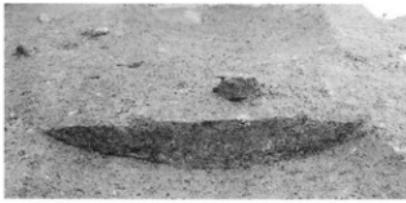
楠・荒田町遺跡第42次調査P101遺物出土状況（東から）



楠・荒田町遺跡第42次調査P101完掘状況（北から）



楠・荒田町遺跡第42次調査P103土層断面（南から）



楠・荒田町遺跡第42次調査SD202土層断面（西から）



楠・荒田町遺跡第42次調査SD201土層断面（西から）

楠・荒田町遺跡第42次調査区土層断面（西から）



楠・荒田町遺跡第43次調査第1遺構面全景（南から）



楠・荒田町遺跡第43次調査第1遺構面全景（西から）



楠・荒田町遺跡第43次調査第1遺構面溝群全景（南から）

図版 4



橋・荒田町遺跡第43次調査SK01遺物出土状況（北西から）



橋・荒田町遺跡第43次調査SK02遺物出土状況（北東から）



楠・荒田町遺跡第43次調査SD101（北から）



楠・荒田町遺跡第43次調査SD102（北から）



楠・荒田町遺跡第43次調査SD103（南から）



楠・荒田町遺跡第43次調査SD104（南から）



楠・荒田町遺跡第43次調査溜池土層断面（南西から）

図版 6



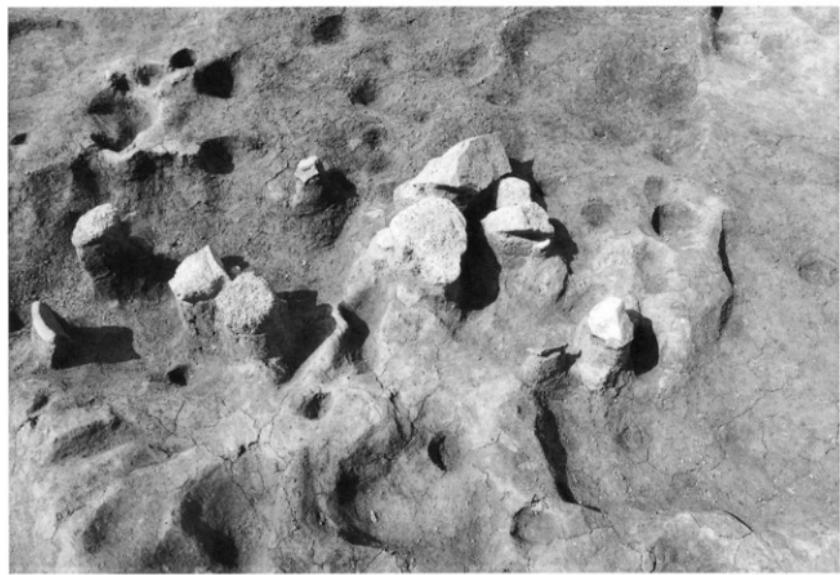
楠・荒田町遺跡第43次調査第2遺構面全景（南から）



楠・荒田町遺跡第43次調査第2遺構面全景（北西から）



楠・荒田町遺跡第43次調査SD201遺物出土状況（南西から）

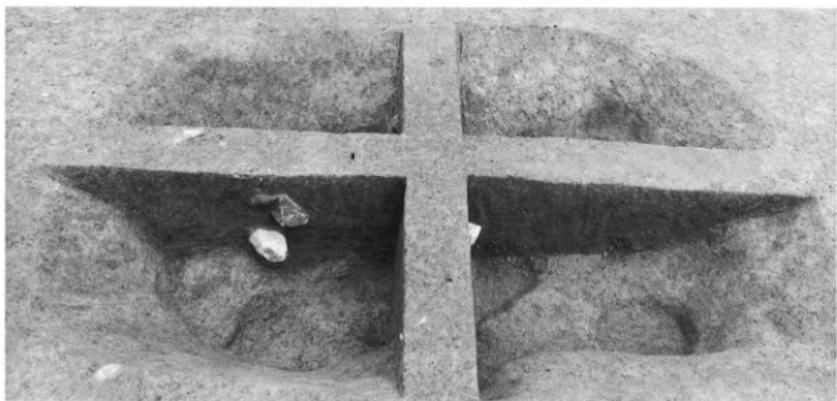


楠・荒田町遺跡第43次調査SK201（南西から）

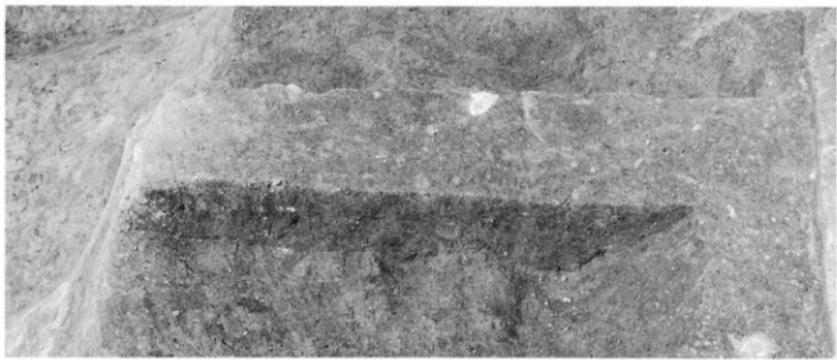
図版 8



楠・荒田町遺跡第43次調査SK201土層断面（南西から）



楠・荒田町遺跡第43次調査SK203土層断面（南から）



楠・荒田町遺跡第43次調査SD202土層断面（東から）



楠・荒田町遺跡第46次調査区北半全景（東から）

図版10



楠・荒田町遺跡第46次調査区北半全景（西から）



楠・荒田町遺跡第46次調査区北半全景（西から）



楠・荒田町遺跡第46次調査SD01・SD02土層断面（西から）



楠・荒田町遺跡第46次調査SD01・SD02切り合い関係土層断面（東から）

図版12



楠・荒田町遺跡第46次調査SD01土層断面（西から）



楠・荒田町遺跡第46次調査SD02土層断面（西から）



楠・荒田町遺跡第46次調査SD01最下層遺物出土状況（西から）



楠・荒田町遺跡第46次調査SD01最下層遺物出土状況（北から）

図版14



楠・荒田町遺跡第46次調査石船全景（西から）



楠・荒田町遺跡第46次調査石組土層断面（西から）



備・荒田町遺跡第46次調査SD03・SD05土層断面（西から）



備・荒田町遺跡第46次調査SD04土層断面（西から）

図版16



精・荒田町遺跡第46次調査区南半第2遺構面全景（北から）

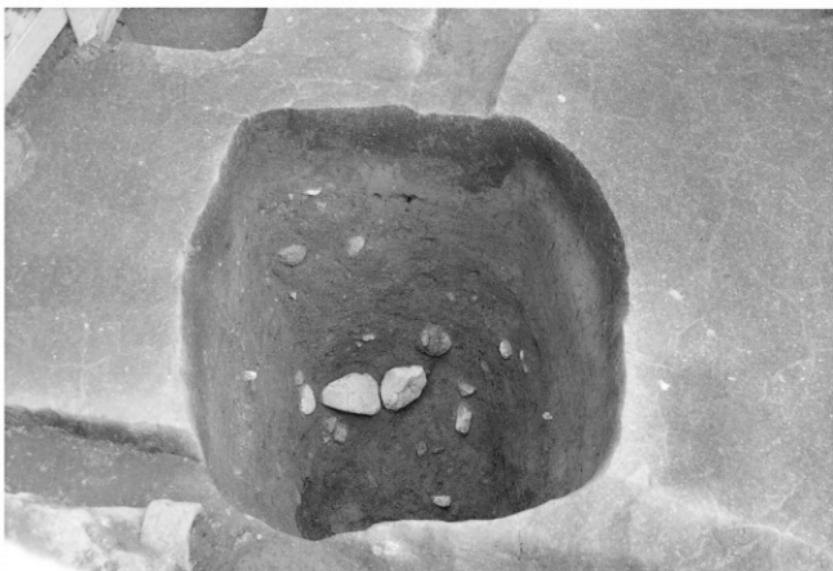


楠・荒田町遺跡第46次調査区南半第2遺構面全景（北から）



楠・荒田町遺跡第46次調査区南半第2遺構面全景（北から）

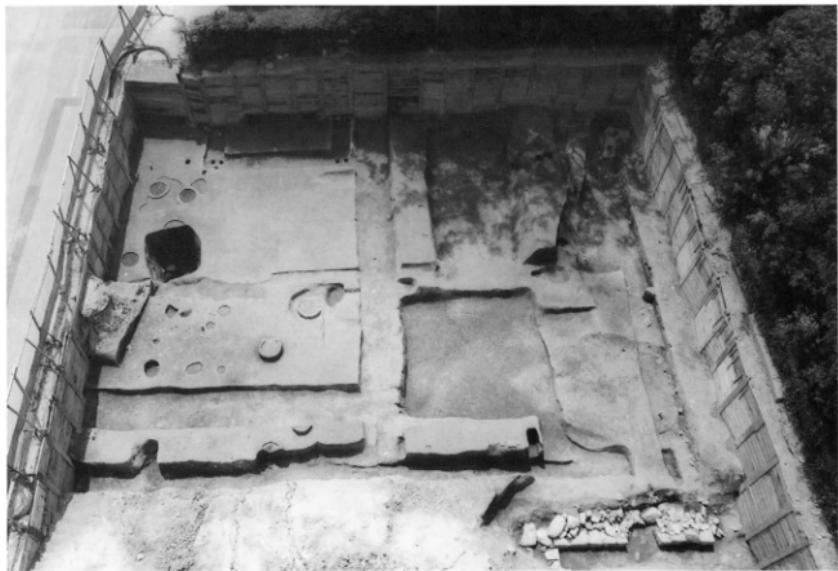
図版18



橋・荒田町遺跡第46次調査SE01（北から）



橋・荒田町遺跡第46次調査SE01土層断面（北から）



楠・荒田町遺跡第46次調査区南半第3遺構面全景（北から）

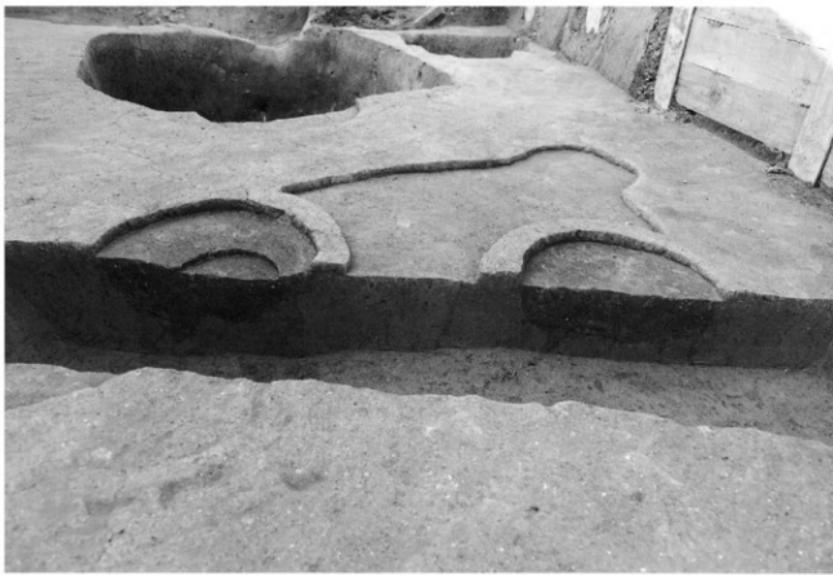


楠・荒田町遺跡第46次調査区南半第3遺構面全景（北から）

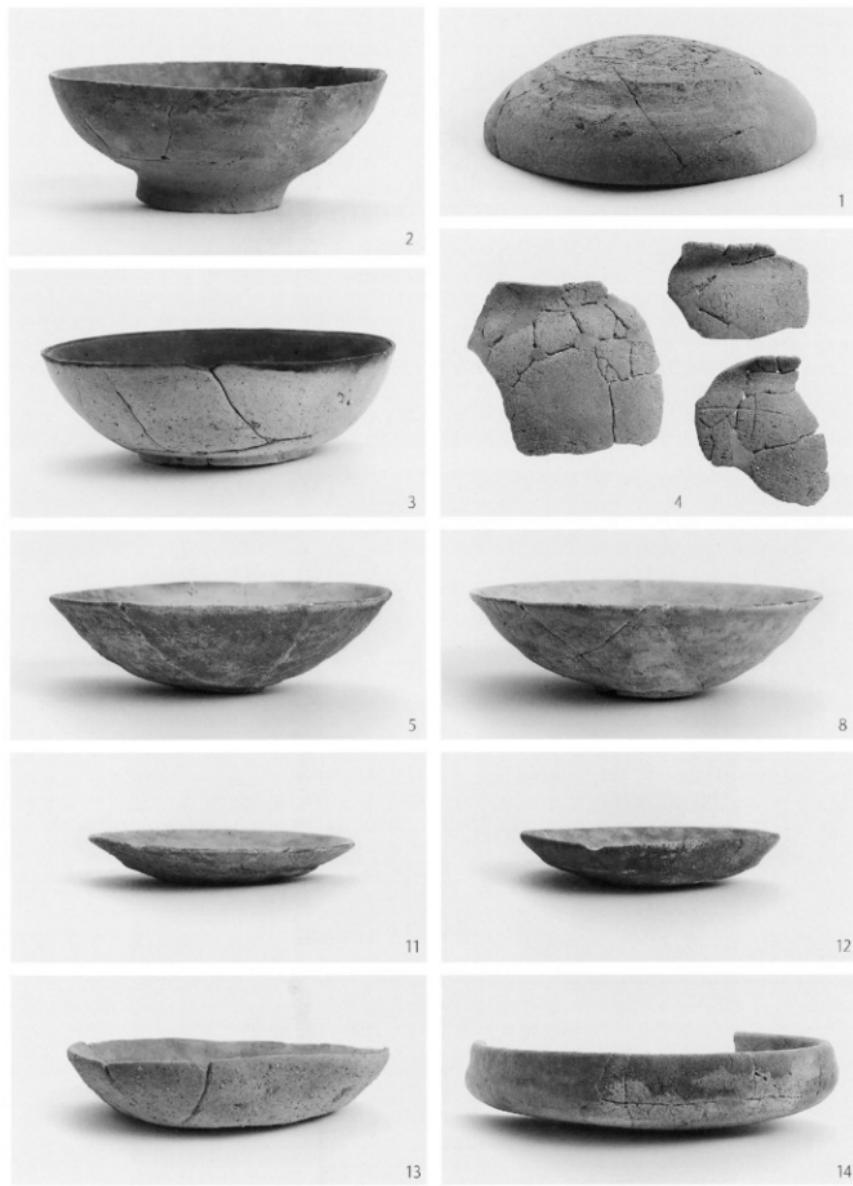
図版20



楠・荒田町遺跡第46次調査SB01全景（西から）

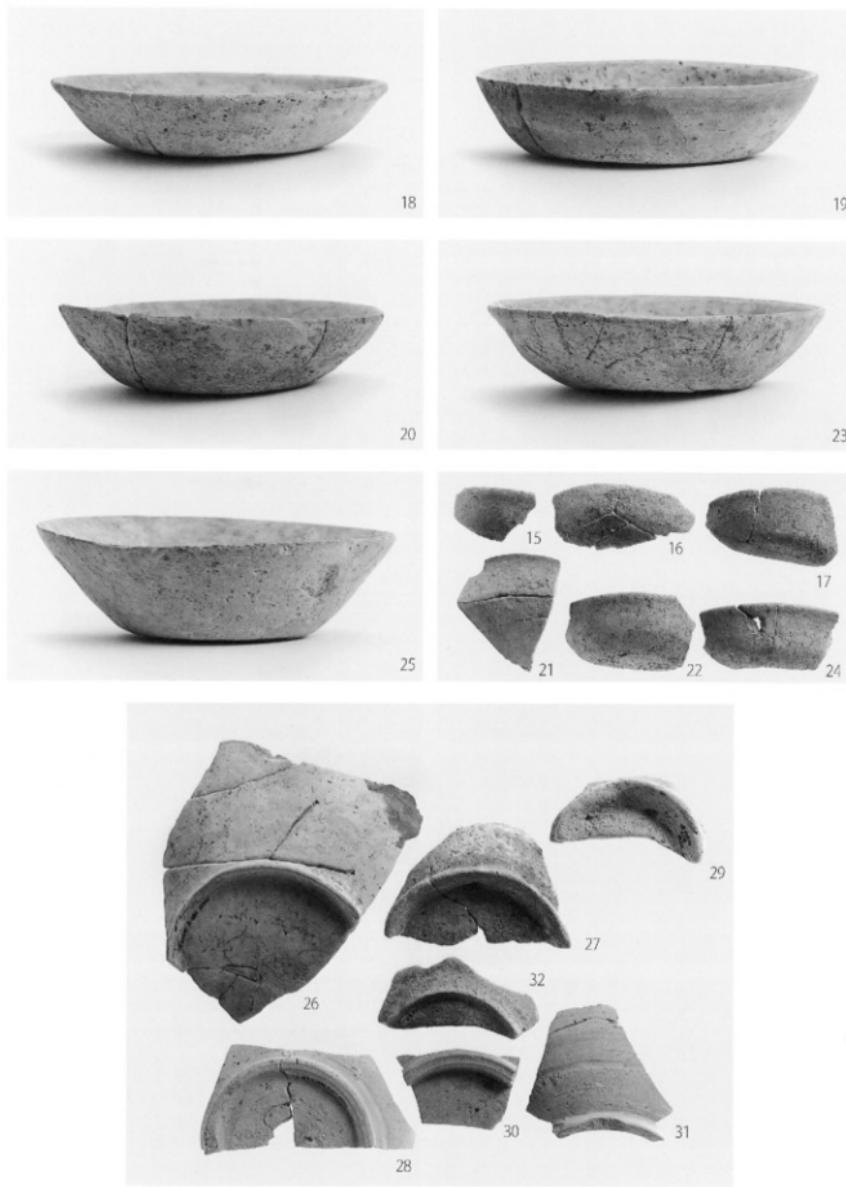


楠・荒田町遺跡第46次調査SB01柱穴土層断面（南から）



柄・荒田町遺跡第42次調査・43次調査第1遺構面出土遺物

図版22



柿・荒田町遺跡第43次調査第2遺構面出土遺物



33



34



35



36



37



38



39



40



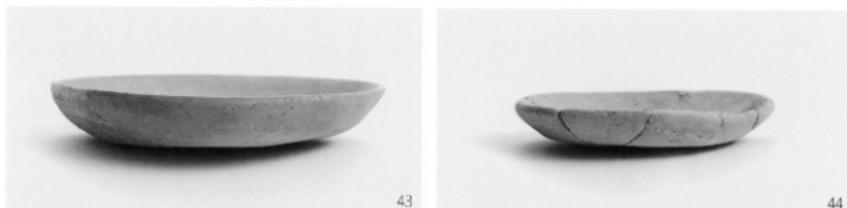
41



42

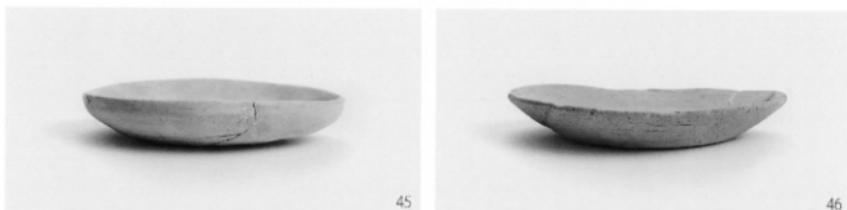
楠・荒田町遺跡第46次調査SD01最下層出土遺物

図版24



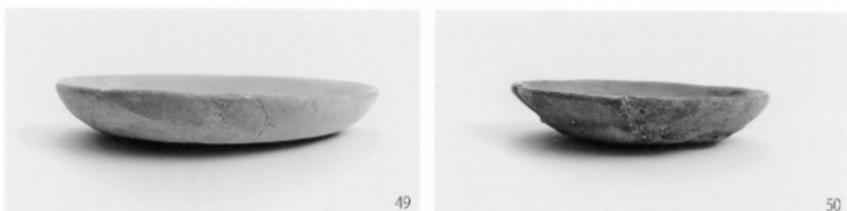
43

44



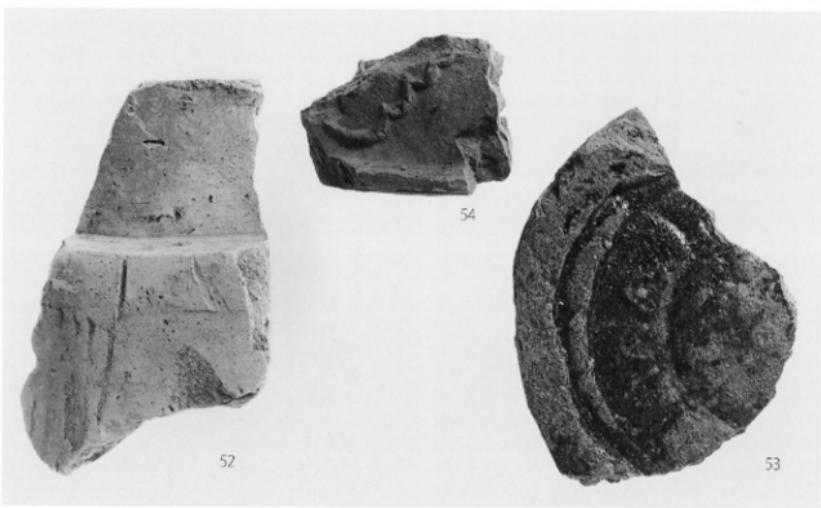
45

46



49

50



52

54

53

楠・荒田町遺跡第46次調査SD01中層出土遺物



55



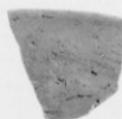
56



65



66



58



59



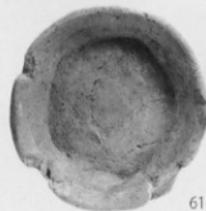
63



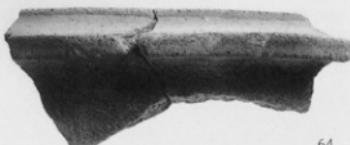
60



62



61



64

楠・荒田町遺跡第46次調査第1遺構面SD02・第2・第3遺構面出土遺物

報告書抄録

ふりがな	くすのき・あらたちょういせきだい42じ・43じ・46じはくつちょうさほうこくしょ						
書名	楠・荒田町遺跡第42次・43次・46次発掘調査報告書						
副書名							
巻							
シリーズ番号							
編著者名	富山直人・小林さやか						
編集・発行機関	神戸市教育委員会						
所在地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6-5-1 Tel 078-322-6480						
発行年月日	2011年3月20日						
所収遺跡名	所在地	コード 市町村番号	北緯	東経	本発掘調査期間	発掘面積	発掘原因
楠・荒田町 遺跡	中央区楠町 6・7丁目	28110	14023	31度41分7秒	135度10分15秒 07/10/15~10/24 08/04/07~5/16 10/05/10~8/30	735m ²	国立大学 法人神戸 大学附属 病院施設 新営事業 等・国立 大学法人 神戸大学 医学部大 学院演習 施設新営 事業等
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
楠・荒田町 遺跡	集落跡 都城跡	平安・鎌倉・ 江戸・近代	掘立柱建物・塼・溝・ 土坑・井戸	京都系上部器・瓦器・須恵器・瓦・ 黒色上器	平安時代末・福原遷 都時・の仮御所とされ た平領盛母と伝承の ある邸宅跡付近の調 査		

神戸市中央区

楠・荒田町遺跡

第42次・43次・46次発掘調査報告書

2011.03.20

編集 神戸市教育委員会文化財課

発行 神戸市中央区加納町6丁目5番1号

TEL 078-322-6480

印刷 福田印刷工業株式会社

〒658-0026

神戸市東灘区魚崎西町4丁目6-3

